



「確かな学力」を身につけ、自己実現できる生徒の
育成：
学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北海道教育大学, 附属函館中学校 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010794

2004 北海道教育大学附属函館中学校教育研究大会

研究主題

「『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成」

～ 学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫 ～



- 主催 : 北海道教育大学
北海道教育大学附属函館中学校
- 後援 : 北海道教育委員会
函館市教育委員会
- 期日 : 平成 16 年 10 月 29 日 (金)
- 会場 : 北海道教育大学附属函館中学校

「『確かな学力』を身につけ、
自己実現できる生徒の育成」

～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～

(第2年次)

2004 (平成16年)

北海道教育大学附属函館中学校

目 次

日 程

巻頭言 北海道教育大学附属函館中学校長 富田幸雄

1. 研究総論 1～14

2. 教科研究
 - ・国語科 「確かで豊かな言語感覚と伝え合う力の育成を目指して
～生徒の学ぼうとする力に視点を当てて～」16～23
 - ・社会科 「自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学習の追究
～評価と教材開発の視点から～」24～31
 - ・数学科 「自ら学ぼうとする力を高める学習指導の工夫」32～39
 - ・理科 「論理的な思考力の育成をめざして」40～45
 - ・音楽科 「自己実現をめざし、自ら"音楽する"生徒の育成
～音楽科における学ぼうとする力とは～」46～53
 - ・美術科 「感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方」54～59
 - ・保健体育科 「自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習IX
～保健体育科における学ぼうとする力とは～」60～67
 - ・技術家庭科 「学ぶ意欲を高め『確かな学力』へと育てるアプローチ」68～73
 - ・外国語科 「コミュニケーションを維持・発展させるための学習指導の工夫」74～81

3. 講演 「学ぶ意欲とスキルを育てる教育のあり方」
東京大学大学院教授 市川伸一氏

4. 研究同人一覧83

平成16年度

北海道教育大学附属函館中学校教育研究大会

開催要項

1. 研究主題：「『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成」
～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～

2. 主催：北海道教育大学
北海道教育大学附属函館中学校

3. 後援：北海道教育委員会
函館市教育委員会

4. 期日：平成16年10月29日(金)

5. 会場：北海道教育大学附属函館中学校

6. 日程：

8:00	8:30	9:20	9:40	10:30	10:45	12:15	13:15	14:15	14:30	16:00
受付	1校時 授業	移動	2校時 授業	移動	教科別 分科会	昼食	全体会 ・ 実践提案	移動	講演会	

公開授業

(1校時 8:30~9:20、2校時 9:40~10:30)

教科	校時	学年学級	題 材	授業者
国語	1	1年A組	『話し合い』	黒田 諭
社会	2	1年B組	『元の襲来』	阿部 智子
数学	2	3年A組	『二次方程式』	福井 博志
理科	1	2年C組	『天気とその変化』	松下 賢
音楽	1	3年C組	『舞台芸術を味わおう』	嶋田 歩
美術	1	3年B組	『公共空間と立体造形』	佐々木 善憲
保健体育	1	2年A組	『跳び箱運動』	池田 靖秋
技術・家庭	2	1年C組	『コンピュータ活用のためのルールとマナー』	秋山 範光
外国語	2	2年B組	『Unit 5 A Park or a Parking Area?』	早瀬 真裕美 マイケル・ポップハム

教科別分科会

(10:45~12:15)

教科	教科研究テーマ	研究発表	共同研究者	司会者	助言者
国語	確かに豊かな言語感覚と、伝え合う力の育成を目指して ～生徒の学ぼうとする力に 視点を当てて～	三津橋ゆかり 黒田 諭	長田 友紀 (教育大学函館校助教授)	荒木 康博 (市立凌雲中学校教諭)	沢田 紀之 (渡島教育局指導主事) 酒井 充 (七飯町立七飯中学校長)
社会	自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学学習の追求 ～評価と教材開発の視点から～	阿部 智子 深見 亘	宮田 省一 (教育大学函館校助教授)	佐々木 理之 (市立西中学校教諭)	加賀 重仁 (北海道教育センター指導主事) 川合 裕紀子 (市立旭岡中学校教頭)
数学	自ら学ぼうとする力を高める学習指導の工夫	福井 博志 油谷 栄次	後藤 泰宏 (教育大学函館校助教授)	吉田 亨 (市立湯川中学校教諭)	松岡 利夫 (市立宇賀の浦中学校教頭)
理科	論理的な思考力の育成をめざして	辰巳 哲治 松下 賢	紀藤 典夫 (教育大学函館校助教授)	安達 幹彦 (市立深堀中学校教諭)	佐藤 潤一 (渡島教育局指導主事) 岡野 伸二 (市立西中学校教頭)
音楽	自己実現をめざし、自ら“音楽する”生徒の育成 ～音楽科における学ぼうとする力とは～	嶋田 歩	尾藤 弥生 (教育大学函館校助教授)	笠島 美教 (市立港中学校教諭)	田村 順子 (市立五稜中学校長)
美術	感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方	佐々木 善憲	佐藤 昌彦 (教育大学函館校助教授)	仲井 靖典 (市立湯川中学校教諭)	中村 吉秀 (市立北中学校教頭)
保健体育	自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習区 ～体育科における学ぼうとする力とは～	池田 靖秋	佐藤 徹 (教育大学函館校助教授)	鍵谷 誠 (市立赤川中学校教諭)	佐藤 毅 (市立大川中学校長)
技術・家庭	学ぶ意欲を高め「確かな学力」へと育てるアプローチ	秋山 範光	阿部 二郎 (教育大学函館校助教授)	白川 卓 (市立深堀中学校教諭)	阿部 憲司 (市立港中学校教頭)
外国語	コミュニケーションを維持・発展させるための学習指導の工夫	早瀬 真裕美 宮野 健	マイケル・クロフォード (教育大学函館校助教授)	門間 康志 (市立深堀中学校教諭)	徳成 隆雄 (市立深堀中学校教頭)

全体会・実践提案

(13:15~14:15)【会場は体育館】

研究総論説明の後、「学ぼうとする力を高めるための工夫」として、つぎの3つの視点で提案します。

- ・教材開発の工夫（社会科、技術・家庭科、外国語科）
- ・学習形態の工夫（国語科、数学科、理科）
- ・学習シート、評価シートの工夫（音楽科、美術科、保健体育科）

講演会

(14:30~16:00)

テーマ：「学ぶ意欲とスキルを育てる教育のあり方」

市川 伸一 氏（東京大学大学院教授）

巻 頭 言

北海道教育大学附属函館中学校長 富田幸雄

日頃より本校の教育・研究活動に対して多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本校では、文部科学省による学習指導要領の一部改訂の趣旨を踏まえた教育課程及び指導の充実・改善を図る取り組みに着手し、これまで本校で積み重ねてきた「確かな学び」の育成と評価の内容や手法に関する研究成果を生かして、平成15年度から、一人ひとりの子どもたちが「確かな学力」を身につけ、これからの社会を主体的、創造的に生きていくために、2ヵ年計画の研究主題『「確かな学力」を身につけ、自己実現できる生徒の育成』を設定いたしました。昨年度は自己実現できる生徒の育成を目指す上で必要となる～発展的・補足的な学習はいかにあるべきか～というテーマを副主題として実践上の研究を進めてまいりました。

本年度は、昨年度の成果を発展させて、～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～という副主題の下で、確かな学力育成の根幹をなす学習に対する関心・意欲・態度を見とり、主体的に「学ぼうとする力」を高めるための指導の工夫を行うとともに、自己実現に向けた、自律的な学習活動を展開する上で必要不可欠となる生徒および教師による生徒一人ひとりの評価情報の蓄積や活用などについて、各教科で研究実践に取り組んでまいりました。

教育研究大会では、これまで進めてまいりました「学ぼうとする力をはぐくむ学習指導の工夫」について、各教科の公開授業や教科別分科会を通じた提案、また教材開発、学習形態および学習シート・評価シートという3つの視点からの指導の工夫に関する実践提案を行いたいものと考えております。また、講演会では、「学ぶ意欲とスキルを育てる教育のあり方」と題して、東京大学大学院教授の市川伸一先生から貴重なお話をいただくことになっております。

活発なご討議を通して多数の方々と交流を図りたいものと希望しておりますので、提案に対する忌憚のないご意見やご批正をいただきますよう、ここにお願ひ申し上げます。

最後になりましたが、教科別分科会で助言者および司会者をお引き受け下さいました渡島教育局、南北海道教育センターおよび公立中学校の諸先生方に厚く御礼を申し上げますとともに、今後ともご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

研究総論

「確かな学力」を身につけ、自己実現できる生徒の育成

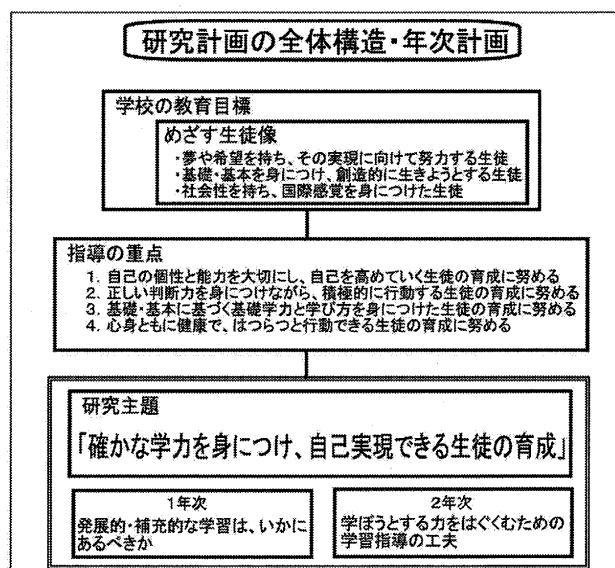
～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～

はじめに

平成15年の中央教育審議会答申では、学習指導要領の基準性の一層の明確化、教育課程を適切に実施するために必要な指導時間の確保、「個に応じた指導」の一層の充実、教育課程及び指導の充実・改善のための教育環境の整備など当面の充実・改善方策が示された。この答申を踏まえ、文部科学省では、平成16年度から教育課程及び指導の充実・改善に反映させるため、学習指導要領の一部改正などの必要な施策を講じており、各学校においては、改訂の趣旨を踏まえた取組が求められている。

このような文部科学省の施策の趣旨にかんがみ、本校においても、学習指導要領に明示されている共通に指導すべき内容を確実に身につけさせることを目的とした学習カードの開発や、指導と評価の一体化をはかるための生徒の実態把握や効果的な指導方法及び柔軟かつ多様な学習活動の流れを構想し、教科を中心とした実践研究を進めてきた。

今年度は、昨年度までの「確かな学力」育成のために積み上げた指導方法を生かしつつ、確かな学力育成の根幹をなす学習に対する関心・意欲・態度を見とり、高めるための指導のあり方について模索する。

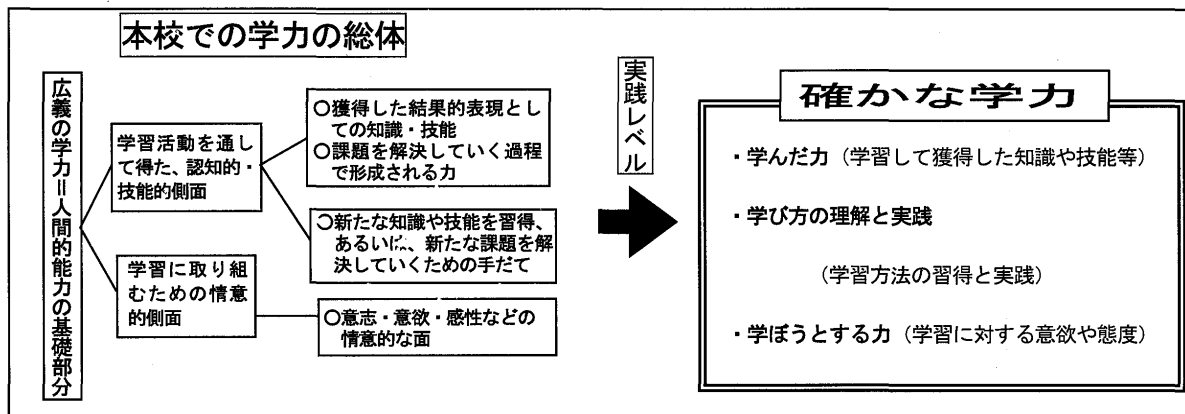


I 研究主題について

1. 本校における「確かな学力」

急激な社会の変化に対応するためには、知識・技能を習得するだけでなく、学ぶ過程を通して、それらを新たな課題の解決のためにうまく活用していく資質や能力を身に付けることが必要になってくる。そのことが様々な状況の変化をとらえ、どのように対応すればよいのか判断して行動にうつせる力、すなわち生きてはたらく力になる。では、その生きてはたらく力となり得るためには、実際に学校教育においてどのような学力を育成していかなければならないのだろうか。そこで、本校では、「新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開」（平成5年 文部省）の中で、学力を「学習の可能態としての資質」、「学習によって獲得された能力」、「習得された能力を応用し、新しい世界を創造する力」と大別している3つの要素を基にし、様々な文献、教育学者によって諸説述べられている学力の要素も参考にしながら、学力の総体について以下の図のようにおさえることが最も適してい

るとした。



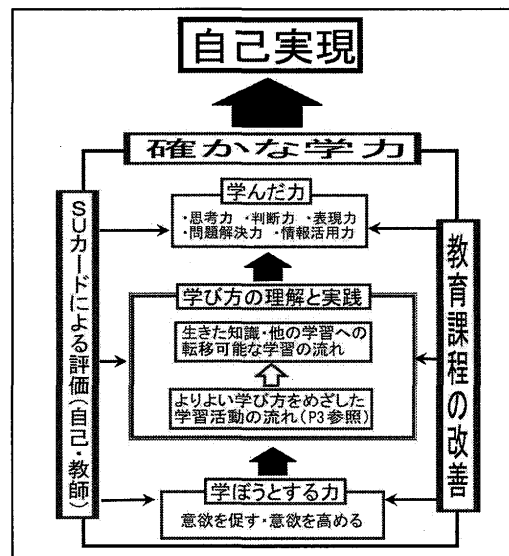
学力を構成する要素として「学習活動を通して得た認知的・技能的側面」と「学習へ取り組むための情意的な側面」を大別するとともに、さらに、「学習活動を通して得た認知的・技能的側面」を二分し、「知識や技能」「手だて」とした。その上で、生きてはたらく力を生徒に身につけさせる実践的なレベルでの「学力」を考える時、本校では学力を「学ぼうとする力、学び方の理解と実践、学んだ力」の3つの要素とし、そのすべてに支えられた力こそが「確かな学力」と考えた。

2. 自己実現とは

「確かな学力」の育成においては、生徒自身が、教師に指導されて学んだり、知識そのものを学んだりするだけでなく、自己の持つ世界を絶えず豊かに組み替え、学び続けることが必要になる。要は、学ぶ主体が問題を感じとり、それを実際に解決していく過程を通し、自らを高めていくという営みこそが自己実現であると考えられる。そこで、本校では自己実現を、「よりよい自分を求める欲求に従って、常に新たな課題を自己の最大の力で追求し達成へと向かうこと」とおさえ、絶えず学び続ける人間の育成が、自己実現できる生徒の育成につながるものとした。

3. 「確かな学力」から自己実現へ

学校教育には、知識や技能、学習方法などの学習内容習得のためのはたらきと、その学習内容習得の過程の中で人間形成の基礎・基本である社会人としての価値体系を会得するためのはたらきがあり、その2つのはたらきを相互に関連させた学習活動が、よりよい自己へと高めることとなる。このことから、本校では、学校の実態に合った教育課程の改善やステップアップカード(SUカード)の活用と、前述した学力の3つの要素を有機的に関連させることによって、「確かな学力」を育成する指導を展開し、ひいては、このことが自己実



現の育成に大きく資すると考えたのである。

前ページの図は、全教育課程のうち教科を対象にした「確かな学力」から自己実現に至るイメージ図である。

II. 昨年度の研究について

1 学び方としての発展的・補足的な学習

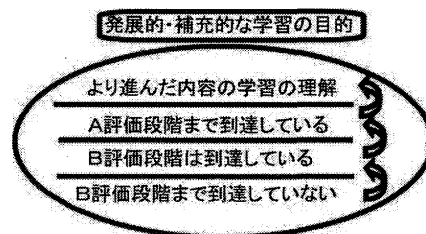
本校では、「学び方」を次の2つに大別する。1つは、知識が学習内容の中でどんな役割を持って使われているかを学ぶことであり、知識の使い方・生かし方を学ぶことである。

2つ目は、知識や技能の身につけ方や効果的な習熟方法などの学習スキルを含んだ、問題解決力など、学習の過程を生かした学習の仕方を身につけることである。どんなに知識が教え込まれても、教えられた知識だけでは新しい生きてはたらく力とはならない。そこには、既習の学習過程を次の学習に転移させ使う力が必要である。

それぞれの学習の場において生きてはたらく力を発揮させ、自分なりの学習方法を体得していくことは、基礎・基本の確実な定着につながるものと期待できる。

このように大きくとらえた学び方をより実践レベルで考えるとき、本校では、自らを高める発展的・補足的な学習においてこそを実現できるものと各教科とも共通認識を深めた。

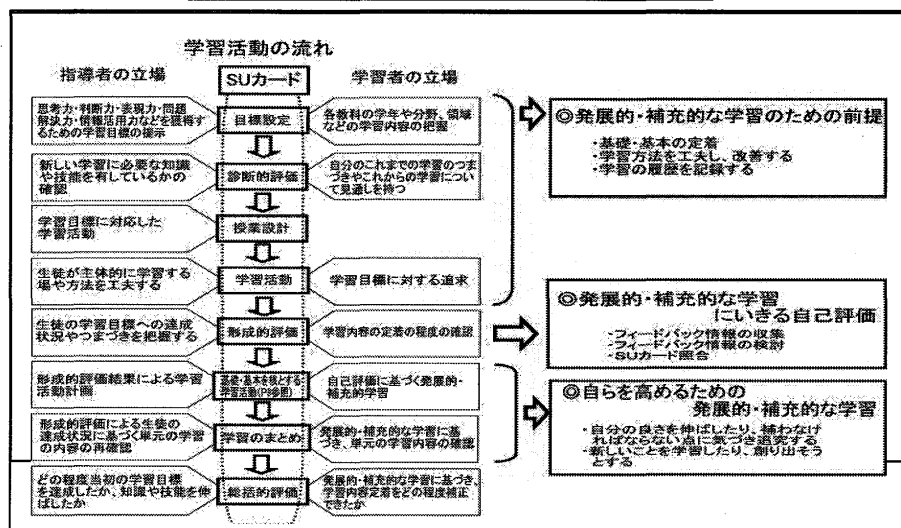
本研究では、基礎・基本の確実な定着を図る効果的な発展的・補足的な学習を、「よりよい学び方」をめざした学習活動」をもとに探った。



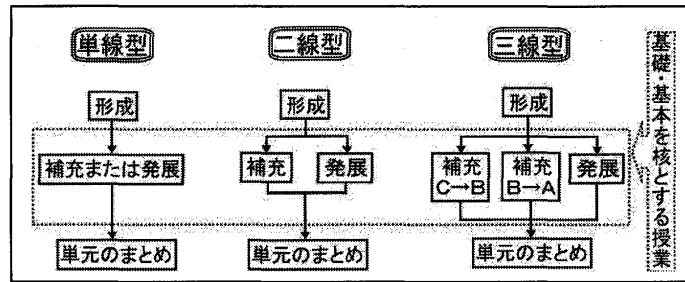
2. 学習活動の流れ

生徒は、まず一連の学習活動を通して基礎・基本を学ぶ。そして、ある一定期間の学習活動を終えた後、ワークシートや作品などから自らの学習の歩みを振り返り、さらに、ステップアップカード（参照P4）と照合することによって学習目標に到達したか、自分の良さを見つけることなどができたかを知る。その結果、補わなければならない点や良さを伸ばせるような点を自覚し、自らを伸ばしていくための課題をもち、追究していくことが発展的・補足的な学習において行われていくことになる。

よりよい学び方をめざした学習活動の流れ



基礎・基本を核とする授業の流れの類型（形成＝形成的評価）



ステップアップカードの例（数学科）

3. 効果的な発展的・補充的な学習

単線型では、形成的評価の結果、学習内容の定着が不十分な場合には、自己評価や教師のアドバイスをもとに一斉指導における補充的な学習を行い、また、全体的に十分ととらえられる場合には、新しい課題を一斉に提示していく発展的な学習を行う。二線型は、単線型の同時進行形である。三線型は、3つのコースの同時展開の授業である。形成的評価の結果を踏まえ、補充C→Bは、基礎・基本の定着を中心として、B評価レベルの目標に未到達な部分についての課題に取り組みせ、補充B→Aは基礎・基本の定着とともにA評価レベルの目標に未到達な部分についての学習を、発展では、A評価レベルをさらに深めた新しい課題を追究していく学習を進めた。

4. 指導方法・指導形態の工夫

- ・教師が協力して指導にあたるTTの導入
- ・各コースごとに教師が直接指導する時間（場面）と間接的に指導する時間（場面）いわゆる複式教育における「わたり」「ずらし」を授業過程に組み入れる工夫
- ・学習内容の理解を深めるためのコース同士の学び合いの時間の設定
- ・一定の学習を終えたグループごとにローテーションしながら教師の確認とアドバイスを受ける機能的なグループ学習の導入
- ・各コースともに生徒の興味・関心を高めるための課題提示の工夫や教材の開発

IV. 研究副主題について

今年度は、「学ぼうとする力をはぐくむ学習指導の工夫」を研究副主題に掲げ、昨年度の学び方の研究を基盤に、いかにして「学ぼうとする力」をはぐくむことが、確かな学力を一層確実に身につけさせることになるのかという視点で実践を行っていく。「学ぼうとする力」は、生徒に内在している、あるいは、内在していなくとも生徒を取り巻く外部からの様々な刺激によって引き起こされる、「知りたい」、「わかりたい」といった気持ちから、積極的に学ぶ姿勢へと表出させようとする力である。すなわち、「学ぼうとする力」こそが、学ぶ意欲を喚起持続させ、主体的に学ぶ態度にまで高める、育てるべき学力ととらえる。

そこには指導者側の育てるべき力としての目標と、その目標達成に向けた課題や指導方法などの手立てが前提として必要となる。そして、どのように生徒の姿が変容していくのかを単位時間、単元、年間といった短期的・長期的なスパンを通してとらえ続けることが必要であり、とらえた結果からさらに「学ぼうとする力」を高めるための指導へとつなげていくことが重要である。

ここであげる育てるべき力としての目標とは、本校がめざす「学ぼうとする力」をもった生徒を育成するための指針であり、各教科が教科目標との関連から設定するものである。これは、指導者側が、生徒が「もっと詳しく知りたい」「もっとできるようになりたい」といった知的欲求を大切にすることや、生徒のめざすなりたい自分に大きくはたらきかけるための課題や教材の選択・提示の工夫をすることを、学びの過程の中に意図的に位置づけることを通して、明確になっていく。このことにより、生徒の内面で「～になりたい」という気持ちが、「～してみよう」という気持ちに変わり、さらに実際に思考する、考えを発表する、考えを文章にまとめる、資料で調べる、制作する、といった学習の活動となって表れる状態、すなわち、学ぼうとする力が引き出された状態になるのである。その上で、意欲が表れる頻度が多くなったり、意欲が表れている状態が持続するなどの「学ぼうとする力」が高まった状態になるために、自らとらえた課題を追究していこうとする意志も育てることが必要である。これは学習の中で、様々な試行したり思いをめぐらせることにより強められるものである。

本研究では、このような「学ぼうとする力」を高めるための効果的な学習を、どのように指導計画に組み入れ、その実現状況をどう評価していくかを、「学ぶ対象」や「他」との関わり、「自己」との関わりを通した学習活動の構築をもとに探っていきたい。



校内研 1年生の数学の授業

1. 学ぼうとする力をもった生徒の姿

本校では学ぼうとする力を持ち、学習に取り組んでいく生徒の姿を、次のような特徴を有していることととらえた。

- ①他から指摘されたり、強制されたりするだけでなく、知りたい、わかりたい、学習したいという気持ちを持ち、進んで学習に取り組む生徒
- ②獲得した知識や方法を駆使して、他の課題や身の回りの問題に働きかけることができる生徒
- ③わからないことがわかる、できなかったことができるようになることは将来にわたって人間としての生き方として必要なことだと自覚することができる生徒
- ④自分の学びをふりかえり、自分なりの見方や考え方、行い方のよさや改善しなければならぬ点に気づき、これからの自分らしい学び方を考えることができる生徒

2. 学ぼうとする力をはぐくむ3つの関わり

一般的に学習は、指導者側の計画のもと、学ぶ側である生徒が、教材や、他の生徒との学び合い、そして自分へのフィードバックという3つの要素の関連の中で、理解が深められる。この3つの要素は極めて密接な関係にあり、相互に影響し合うことによって授業が深まり、生徒の成就感や達成感が高まっていく。

学習の目的は学習者のよりよき変容にあり、その変容を目的として教材は作成され教師から生徒に提示される。つまり学ぶ対象としての教材は、教師が授業をプランニングする段階で教科及び学習の目的を包含した質の良いものでなければならない。それは、授業場面において、教材と直接的な関わりを持つのは生徒自身であるからである。

学習集団における学び合い、すなわち「他」との関わりは、学習効果に大きな影響を与える。授業では、互いに自らの考えを発表したり、グループ等での学習活動を進めたりすることで、自分の良さを発揮し、他の良さをも身近に感じながら、互いの信頼感を深めることができる。また、一人一人がかけがえのない存在として認められる学習集団を形成することができる。そして、学習課題への共有意識を持つことになり、一人一人の学習意欲へ深く影響していくことになるであろう。

そして、生徒自身が、この2つの要素と自分との関連をしっかりとらえることすなわち自己評価を通して、自己を認識することにより、生徒自らも相乗効果を得ることになり、学ぼうとする力をもった生徒像に近づくであろう。

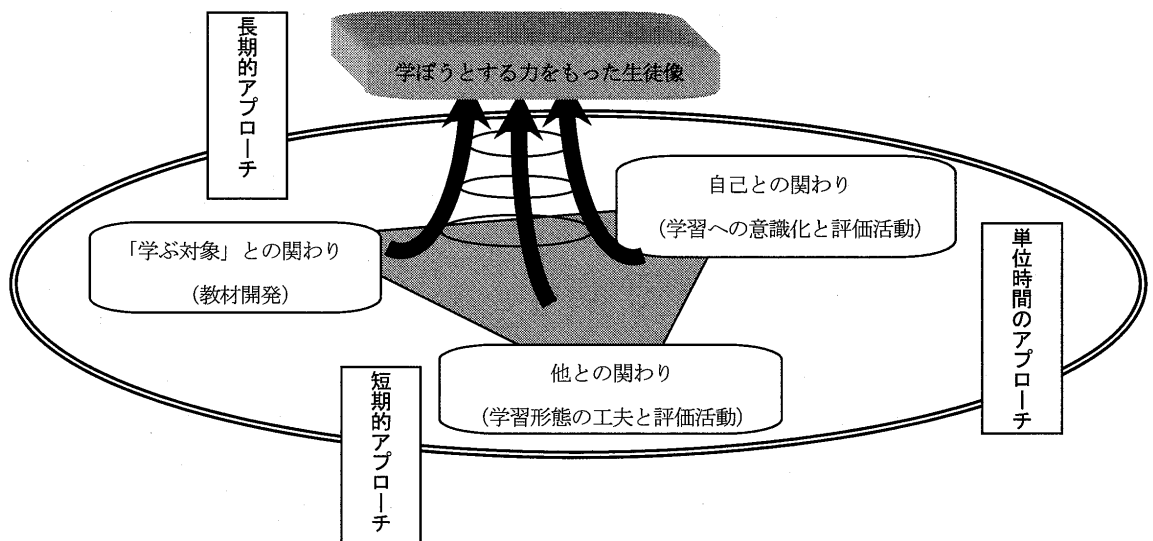
以上のような観点から、3つの関わり（「学ぶ対象」との関わり、「他」との関わり、「自己」との関わり）が、学ぼうとする力をはぐくむためのカギとなると本校では注目している。

3. 学ぼうとする力をはぐくむためのアプローチ

学ぼうとする力をはぐくむために、次のようなアプローチで学習活動を構築していく。

- I. 長期的アプローチ～生徒の発達段階の特性に応じ、教材の系統性や目標の階層性に着目した長期的な指導内容の検討や指導計画の作成
- II. 短期的アプローチ～単元内容の構造化や教材の選定と配列などの単元レベルでの指導計画の作成
- III. 単位時間のアプローチ～1単位時間や小さなまとまりごとの学習のねらいを達成するために有効な教師の指導技術

＊学ぼうとする力をはぐくむためのイメージ図



4. 3つの関わりとは何か

(1) 「学ぶ対象」との関わり

自分が興味や関心を持ったものについてより深く知ろうと模索したり、学習しようとする情意面の育成を図ることが、「学ぶ対象」との関わりで大切なことである。それには、驚き、疑問、矛盾といった対象との関わりをもたせることである。そのため、本校では、その具体的な実践として、多様な学習内容を持った教材開発を試みた。教材開発では、長期的かつ短期的なアプローチの中で指導内容の相互の関連を明らかにする必要がある。提示する教材については、その指導過程の中で、どのように生徒が学習活動を展開していくのかを、できる限り事前に予想し、その手だてを準備しておくことが必要である。

「学ぶ対象」は、次のような条件をバランス良く備えた教材でなければならない。

① 有意義な学びになること

興味・関心をもち、驚きや疑問が強く感じられる教材においては、知識や技能を単に獲得することだけではなく、その獲得が、自分にとって意味あるものとみ

なすことができるように、学ぶ対象が系統的で構造的にとらえることができるような教材。

例えば、理科では、観賞用のホウセンカの発芽の過程とはどんなしくみになっているのかという身近な生活経験に基づいた教材を通して、その受粉のメカニズムについて考えさせ、植物一般の有性生殖まで思考を拡げさせる教材を扱っている。

②様々な視点で考えられること

学ぶ対象には、あいまいで複雑なことがいくつか含まれ、生徒が様々な考えや思いをめぐらせ試行錯誤しながら学びを深めることが求められる。つまり、いろいろな方法で解決できたり、様々な学習活動ができる教材である。例えば、音楽科では、「夏の思い出」を教材として、歌詞と記号との関わりから、どこをどのように表現したら、この曲にふさわしいかということを生徒それぞれに考えさせた。さらに互いの意見を交流させ、表現の仕方について精度を上げるような活動に取り組ませた。また、この授業では、自分たちの授業の最初と最後での歌唱の表現にどれくらいがあったのかを確認させる場面も設定された。

③解決方法の方向性が見えること

興味・関心をもち、様々な考えをめぐらせても、その解決の方策が思いうかばなければ、次の学習へ進もうとする気持ちはわいてこない。そこで、どの生徒にも、既習事項から類推できそうな内容を備えた教材を準備する必要がある。

例えば数学の授業で、座標平面上にある3点を提示し、その3点を結んでできる三角形の面積を求めるといった課題を提示した。生徒は、面積の求め方と座標という数学的な概念を想起し、実際に解決していくための方向性を思い浮かべることができた。座標を移動させたり、公式を適用させるなど合理的に解くための手順や方法を工夫するといった見通しを持てたのである。

(2)「他」との関わり

「他」との関わりとは、ともに学び合う活動を通して、学習に対する目的や問題解決への意識を共通認識し、自らが考えたこと、調べたことに基づき意見を述べ、逆に他の意見も聞く中で、自分の考えに対する疑問点や矛盾点などを見つけ、追究していくことである。

ここでは、自らが発言や発表をした時、自己の追究内容が学習全体の流れの中に位置付いているという自覚を生み、共に高め合っているという満足感が得られる。だから、自己を他の学びに関わらせ比較検討させたり、他へのはたらきかけや承認し合える場を設定したりすることが必要である。それにより、互いの見方や考え方を肯定したり、時には否定したりしながら、個人では考えつかないような思考に達することができる。

自分なりの考えを交流し合うことは、他との関わりを豊かにし、考えを深めるという相互補完的なものである。

そして、この自らの学びに生かす学び合いの学習すなわち相互の学習活動活性化のための一方策として学習形態の工夫を取り入れている。これは教科の特性を踏まえながら、画一的な一斉授業に偏ることなく、生徒が互いに主体性を発揮しながら、多様な学習活動ができる学習形態を設定していこうとするものである。

学習形態については、主体的追究にふさわしく、一人一人が問題を解決するための望ましい環境でなければならない。そのため、まず、一人一人が自力で解決するための時間を十分にとる必要がある。しかし、それだけでは自分の考えを練り上げることはできない。得られた解決方法や結果を客観的に評価すると共に、自力では気づかなかった様々な面について他の生徒と学び合う集団学習があるべきである。この両者が整理され、一つのシステムとして有機的に機能しなくてはならない。

なお、学習形態については、何に着目するかで様々に分類されるが、ここでは学習集団の規模や形態の面から次のようにとらえた。

学習者個人が、二人で学習するペア学習、数人のグループで行う小集団学習、クラス全員が一堂に介する一斉学習がある。この中で、小集団については、どの条件で構成するかによって興味・関心別（生徒自らが希望したテーマや体験活動を中心に行う）、学習課題別（学習課題が同じ、また、似たような課題でグルーピングし理解の深化を図る）、学習方法別（調べ方、取り組み方などの方法別に分かれて、学び合いながら作業を進める）、到達度別（学習内容の理解度に応じて、学習進度の速さや方法を工夫してそれぞれの習熟を図る）などがある。

【学習形態の工夫例】

①ペア学習

英語のコミュニケーション活動の活発化を図った授業の例がある。ここでは、ペアで事前に考えた現在完了を使った会話内容の受け答えの1回ごとに会話カードを蓄積させた。時間内で、どれだけ多く進めることができたかを、会話カードの量の多少によって、教師も生徒自身も容易にとらえられるように工夫した。

②興味・関心別

技術・家庭科の授業では、「生活を豊かにするものを作ろう」という学習課題のもと、日常生活に活用できるような作品（本立てや、調味料入れ、様々な用途を想定したマルチスタンドなど）を生徒一人一人に構想させ、作品の種類ごとにグルーピングし、製作に取り組みさせた。また、できた作品を次年度の学年への意欲付けのために、記録として写真にとり廊下に掲示した。

③学習課題別

数学では、一次関数の数種類の応用問題の中から、自らの実力を高める

観点で自己選択し、その課題ごとに教室を分け、同時進行で授業を進めた。ここでは複式授業のような教師のわたり・ずらしを活用した。内容としては、それぞれの課題ごとに徐々に難易度が高まっていくような学習プリントを用意し、どうしても解決できない場合は、ヒントカードなどを活用して自らの手で解決できるように授業を設定した。

④学習方法別

「現在完了」を題材とした英語の授業では、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4つの学習方法別のコースに分けた。一定時間学習した後、次のコースでの学習に移って全コースで学ぶ形態をとった。

⑤到達度別

これは昨年度の研究内容であった発展的・補足的な学習で取り上げた単線型、二線型、三線型の三種類の学習形態であり、9教科それぞれの特性を生かしながら実践を深めている。

以上のような他との関わりでは、その前提として、授業の中で失敗したり間違った答えを述べた生徒を認め合える学習集団づくりが大切である。

(3) 「自己」との関わり

自己を高めたいという欲求をもたせるためには、何度でも学習課題解決のための活動に取り組み、やり遂げなければならないという必要感や気持ちを喚起させることが大切である。さらに困難な課題に積極的に取り組むために、自分なりの見方や考え方にに基づき解決をめざす主体的な意志を育む情意面の育成を図ることが必要である。このことが「自己」との関わりである。

そのため、学習している内容と「自己」との関わりをとらえたり、学習している「自己」と「他」との関わりから、自己はどのような状態であるのかをとらえたりすることが大切である。

そこで、各教科の特性に沿った指導形態・学習形態を組みつつ、その中でどのように自己評価ができるのか、その可能性を探ってみた。

自己評価の場面では、「自分は何がわかり、何がわからないか」というような学習内容の結果をまとめさせるだけでなく、自分の考えにどんな新しい考えが生まれたのか、学習活動を進める過程でのがんばり具合はどうだったのか、などについての状況を、自己評価カードや学習プリント、ヒント・アドバイスカードなどに記入させ、その活用状況などをチェックすることで、より具体的に自らを把握させ、新たな学習への動機づけを図った。

この自らの学習の実現状況を把握させ、次の学習への動機付けとさせる一方策として、授業におけるプリントの開発を行っている。

①中心視点と関わる関心・意欲・態度を高めるためのプリントの工夫

学ぼうとする力、すなわち関心・意欲・態度の観点は、他の観点との関連が深い
ため、単独で見とろうとすることは難しい。そこで、各教科とも、1時間1時間の
授業で高めさせたいと構想した、その授業での中心となる観点（関心・意欲・態度
以外）との関わりで、関心・意欲・態度を見とり、高めるための工夫を行っている。

例えば、「思考・判断を中心にすえた関心・意欲・態度」といった場合、単元や単
位時間での生徒の思考がどのようになされているのかを見とり、高めようと努めて
いる。理科では、実験の考察の記述をさせる前に、考察するための視点を整理し、
箇条書きさせる欄を設けることによって、考察に至るまでの思考のプロセスを教師
がとらえやすいような試みを行っている。また、社会科では、単元における大テー
マを設け、単元内で学習していく各単位時間での学習内容において、大テーマ追究
に関連すると考えられる事項を学習プリントに書き込んでいく。このことは、様々
な考察視点を蓄積することになり、それらを活用して生徒自身が大テーマの解明に
役立てていけるのである。

②自己評価カードの工夫

自己評価カードとしては、各教科、その特性や授業で扱う分野に沿った内容で、
自らの気づきを促す手だてとしてのプリントを開発し活用している。

美術科では、3種類の自己評価カードを活用している。毎時間、学習目標と予定
ならびに活動内容の反省や感想、質問、アドバイスを書き入れる「制作日誌」、作品
制作のための発想や構想を見直し、統一感や調和のある構成を描くための「制作カ
ード」、そして、できた作品についての説明や完成するまでに具体的に見直した点や
自分の表現がどう変わったのか等を記述する「作品説明カード」を授業にいかして
いる。

また、数学科では、2種類の自己評価カードを用いている。単元の学習前と単元
終了時にコメントを記述させ、比較させるもの。そして、単元内の各節での学習前・
後の学習プリントの結果について比較・考察したことを、各節ごとに記述し蓄積し
ていくものである。単元の終わりには、この2種類の自己評価カードから、単元を
通した自らの学習に取り組む姿勢について、どう変容したかを総括させている。

4. 実践を通して

(1) 学ぼうとする力を高めるための授業実施に関わる視点

各教科とも以下のような点を、授業に取り入れるよう心がけた。

① 単元や1単位時間の学習に入る前の生徒の状況把握

学習は、既習事項と関連づけながら進められることが多い。そのため、生徒がどのようなことに興味をもっているのか、今までどのようなことを学んでいるのか、当該教科と関連する既習事項は何かなど、生徒一人一人の習熟度や興味・関心などを事前に把握する必要がある。これは、導入段階の教材提示、例えば、生徒の予想や期待と矛盾するような課題を投げかけ知的好奇心を喚起することなどにも生かされる。そのため、主題のプレテスト、事前アンケートなどを作成してある程度、客観的なデータを意図的、計画的に収集し、分析することも大切であり、その記録を保持していくことを心がけたのである。

② 学ぼうとする力を高めるための指導

各教科がめざした、学ぼうとする力が、その単元の学習に入る前にどの程度生徒の中にあるのかを把握し、それを徐々に高めていくための意図的、系統的な指導計画を構築していかなければならない。そのために、興味関心が引きつけられるような課題、連続・発展的に追求できるような指導過程を数時間見通した構成、学習するための中心となる観点を明確に持てるような発問・指示、学習形態の多様化など、各教科それぞれの特性が生かされた実践を試みてきた。

③ 指導場面を終えての評価

生徒の変容を見とろうとする場合、必ずしもはっきりととらえられない場合が多い。そのため、次のような視点でとらえることとした。

- ・ 知識や理解、技能のように目標が達成された場合に、期待される状態が、はっきりと見とることができること。例えば「わかる」「できる」など。
- ・ 関心・意欲・態度は、個人内での比較や他の生徒との比較という形でしか進歩あるいは向上・深化などが把握し難いものである。例えば、ここで、こういうことが深まったらこういう姿がみられるのではないかという想定をいくつか準備しておき、判断していく。さらに、単位時間内での評価だけにとどまらず、長期的・短期的アプローチとの組み合わせによる、生徒の変容を見とる積み重ねの評価を工夫した。

(2) 校内授業研を終えて

関心・意欲・態度は、あくまで教科学習に即した評価の観点であり、学習全般についての関心・意欲・態度ではないといえる。それは、忘れ物や提出物の状況、授業中の一般的な姿勢や態度などを評価の対象とするのではなく、当該教科の目標実現や課題解決に向けたものでなければならない。これらを校内授業研実施の際に全教科共通理解し、実践を進めてきた。そこでは、自己実現へ向けた、自律的な学習者を育てるためのアプローチの工夫として、学ぼうとする力の見とり方や高めるための工夫を、各教科とも、その特性を生かし研修を深めようとした。その結果、次のような結果がまとめられた。

①関心・意欲・態度の見とり方

関心・意欲・態度が表れやすいと思われる学習活動の場面を設定し、それぞれの場面であらかじめ予測される生徒の状態を、当該教科の目標に沿った評価基準に照合させながら見とろうとした。しかし、当初は、授業中の観察法を中心に生徒の様相をとらえようとしたため、人数的にも、内容的にも限界があった。また、あまり単位時間で全てを見とろうとすると教科の目標実現というよりも見とるためだけにコストをかけすぎた感があった。そのため、見とりの際には、単位時間だけではなく、短期的、長期的なスパンで見とっていくことが大切で、授業中のエピソードや、生徒のつぶやき内容などの観察メモの蓄積といった、生徒の実態がわかる具体的な資料を地道に収集していくことが必要であることを痛感したのである。また、学習プリントの記述内容からも、新たな課題に挑戦しようとか、課題解決のために多くの資料や情報を集めようなどといった、自らを変えよう、変わろうとしている様子などがうかがえるような箇所を指導者側が見とろうと努めた。

②関心・意欲・態度を高める指導の工夫

いかに生徒の知的好奇心に働きかけ、生徒の内面から湧き上がる「なぜこのようになるのだろう」というような疑問を持たせるための導入の工夫や、「このようなことを知りたい、できるようにになりたい」という目的を持って課題追究のための指導の手だてを試みた。例えば、導入段階での知的好奇心を引き起こす発問の工夫や、自らの力を高めるための課題の選択などである。また、課題解決段階では、生徒一人ひとりの学習がより充実したものになるための各種学習プリントや補助プリントの工夫を行った。さらに、単元や小さなまとまりごとの学習の過程で、生徒自身が、学習内容の定着度合いが向上していることが自らもわかるような学習内容の配列などの工夫を行った。

V おわりに

本校のこの2年間の研究では、評価情報を学習指導に反映し、生徒自らが学習の状況の把握やその把握した内容の解釈、その解釈から、自分がどうありたいかを考える、自己実現へ向けた自己学習力の向上といった生徒の自律的な学習活動の在り方について、各教科を中心に研究を進めてきた。

この研究を通して、評価は、生徒にとっては、自分の学習を振り返り、事後の学習改善の情報を得るため、教師にとっては、目標の実現状況の確認と、その後の指導改善のための情報を得ることという機能を確認することになった。また、評価機能を十分に生かすためには、生徒一人ひとりの評価情報を生徒・教師共に蓄積していくことと、その資料の解釈を丁寧に行い、活用することが大切であることも、あらためて学ぶことができた。

各教科とも、日常の学習活動に意欲的に取り組ませるためにはどのような指導方法や評価方法が有効なのか、また、生徒一人ひとりの力を更に伸長させるための手だてとしての単元の終末段階での発展的・補充的な学習のあり方はどうあるべきか、実践を重ねてきた。この2年間の成果を基に、今後更に研究を深めていきたい。

(文責 油谷 栄次)

【参考文献】

- 1) 『北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要』(平成15年度)
- 2) 『文部科学白書』(平成15年度) 文部科学省編

各教科の実践

教科研究テーマ

国語	<p>確かで豊かな言語感覚と、伝え合う力の育成を目指して</p> <p>～生徒の学ぼうとする力に視点を当てて～</p>
社会	<p>自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学習の追求</p> <p>～評価と教材開発の視点から～</p>
数学	<p>自ら学ぼうとする力を高める学習指導の工夫</p>
理科	<p>論理的な思考力の育成をめざして</p>
音楽	<p>自己実現をめざし、自ら“音楽する”生徒の育成</p> <p>～音楽科における学ぼうとする力とは～</p>
美術	<p>感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方</p>
保健 体育	<p>自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習 Ⅸ</p> <p>～保健体育科における学ぼうとする力とは～</p>
技術 ・ 家庭	<p>学ぶ意欲を高め「確かな学力」へと育てるアプローチ</p>
外国語	<p>コミュニケーションを維持・発展させるための学習指導の工夫</p>

国 語 科

確かで豊かな言語感覚と、伝え合う力の育成を目指して

～生徒の学ぼうとする力に視点を当てて～

附属函館中学校 三津橋ゆかり・黒田 諭

I はじめに

「国語は長い歴史の中で形成されて来た我が国も文化の基盤をなすものであり、また文化そのものである。」1) 国語は学校教育のあらゆる教科やさまざまな学問の基盤をなすものである。国語科では「ことば」に託された意味や思いを理解するとともにそれをいかに表現したらよいかを学ぶ。日常の生徒の言葉遣いからも国語科における「ことば」の扱いについて、改めて考えさせられる。

「ことば」に対してより敏感になり、「ことば」で心を通わせ、自分の思いを積極的に表現できる生徒の姿を探っていきたい。

II 研究の経過

本校国語科では平成12年度から「確かで豊かな言語感覚と、伝え合う力の育成をめざして」を研究主題とし、現行の学習指導要領に対応した年間指導計画の作成や、「三領域一事項」における焦点化の指導の研究、新しい学力観に基づいた評価法の開発に取り組んできた。

「確かな言語感覚」とは、「言語活動の具体的な場面でどのような表現が適切であるか判断したり、与えられた表現を的確に評価したり味わったりする能力を支えるような言語に対する感覚」である。

また、「豊かな言語感覚」とは、「学習者が主体的に言語活動に取り組み、繰り返し経験することを通して育成されていく感覚であり、学習者の情意面が現れてくる感覚」である。

「伝え合う力」とは、「適切に表現する能力と性格に理解する能力とを基盤に、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉によって伝え合い分かり合う力」である。すなわち『話すこと・聞くこと』『書くこと』『読むこと』の各領域の学習において身につけた学びを、自ら言語操作し、実際の言語活動場面において『目的意識』『課題意識』『相手意識』『役割意識』『場面意識』『方法意識』『評価意識』をもちながら、効果的に運用していくことのできる力」2) である。

これまで国語科ではこれらの力を育成するために、視点を絞って研究を深めてきた。

平成12年度	新学習指導要領が目指す教育課程の実現 『確かな学び』を具現化するために～3つの原則と5つの方略～ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の指導の調和
--------	--

平成13年度	『確かな学び』を具現化するために～3つの原則と5つの方略～ 「聞くこと」の指導
平成14年度	絶対評価を重視した指導計画と授業づくり GBカードの活用
平成15年度	発展的・補足的な学習指導の工夫 SUカードを使つての『学び方の理解と実践』

昨年度は「発展的・補足的な学習指導の工夫」という副主題のもと、研究・実践を行ってきた。ここでは、SUカード〈ステップアップカード〉による自己評価を行い、その結果や教師のアドバイスから個々の到達度に合わせ、コース選択学習（三線型一斉学習）を行ってきた。学習目標に対する自己の到達度を確認しながらステップアップしていく「学び方の理解と実践（学習方法の取得と実践）」についてはこのSUカード使つて生徒自身が学習を進めることができるようになったという成果が見られた。

しかし、国語科における「確かな学力」を支える3つの要素のうちの「学ぼうとする力（学習していくための意欲や態度）」については教師の見とり方や方法、また「学ぼうとする力」をのばしていくための具体的な方策が課題として残った。

Ⅲ 本年度の研究内容

1. 本年度の副主題について

国語科では本校の研究内容に則し、『確かな学力』の3つの要素「学ぼうとする力（学習に対する意欲や態度）」、「学び方の理解と実践（学習方法の習得と実践）」、「学んだ力（学習して獲得した知識や技能など）」を次のようにとらえた。2)

①学ぼうとする力

「学ぼうとする力」とは、学習者が目標に向かって進もうとする力である。学習者自身が学習目標を明確にし、「学び方」を知り、学びを深めていくことで目標に迫ろうとする力のことをいう。

②学び方の理解と実践

学習目標に対する自己の到達度を形成的テストやSUカードによる自己評価によって確認しながら常にステップアップしていくための手だてのことである。

③学んだ力

「学んだ力」とは「確かで豊かな言語感覚」と「伝え合う力」のことであり、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」および「言語事項」の三領域一事項を通した学習活動の中で育まれていく力である。

そこで、今年度は「生徒の学ぼうとする力に視点を当てて」という副主題を掲げ「学ぼうとする力」を高めることで国語科の各領域の目標が達成され、それに付随して「国語への関心・意欲・態度」が高まると考える。

2. 「国語への関心・意欲・態度」

(1) 「国語への関心・意欲・態度」とは

文部科学省教育課程課教科調査官は「国語への関心・意欲・態度」を次のように定義している。『「国語への関心・意欲・態度」とは、具体的には①国語そのものへの関心を強めているか（母国語、他国語、両者の比較など）、②言葉がどのように発せられるのか、③人間にとって言葉はどんな役割を果たすのか、④国語の歴史、成り立ち、特性、などである』

それらを達成するために中学校の国語科では、国語科の各領域である「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」に付随させ、それぞれの能力が高めていくものである。

(2) 「関心・意欲・態度」が高まった姿

国語科では次のような生徒の姿が見られるとき、生徒の「国語への関心・意欲・態度」が高まっているとみなす。

それは、

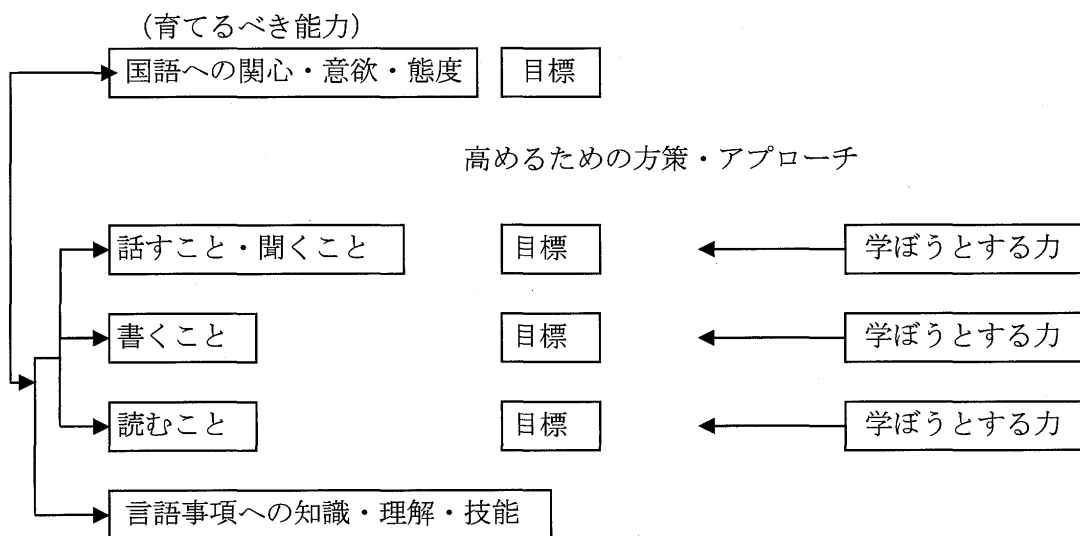
- ① 話す・聞く能力 ～自分の考えを目的や場面に応じて、筋道を立てて話そうとしたり、的確に聞き取ろうとしている姿
- ② 書く能力 ～自分の考えを相手や目的に応じて、筋道を立てて適切に文章に書こうとする姿
- ③ 読む能力 ～目的に応じてさまざまな文章を的確に読み取ろうとしたり、読書に親しもうとする姿

これらの姿が一時的ではなく、継続的に見られなければならない。

そこで、各能力を高めるための方策として、本校国語科では「学ぼうとする力」を活用する。

(3) 「学ぼうとする力」

「学ぼうとする力」とは、学習者が目標に向かって進もうとする力である。学習者自身が学習目標を明確にし、「学び方」を知り、学びを深めていく。それが「学ぼうとする力」である。



学習を開始する際、それぞれの生徒がこれから展開する学習内容に対して、どのような興味・関心・学習経験・知識・技能を持っているか、を把握することが必要である。そして、その情報をもとに、生徒の疑問や関心に着目して目標を設定し、授業を構想していく。授業では「学びあい」を成立させ、生徒自身による評価活動を盛り込んでいく。3)

それは生徒の意識を自分の言語生活に向けさせ、自覚的な学習活動を促すために必要な自己評価能力を育成することである。

そして評価結果を教師から提示し、生徒が自分の学習活動を見直し、振り返ることで学習状況を分析し、さらにこれに対する教師からの助言によって、自分の傾向と学習上の課題を把握させ、次の学習の動機付けを行う。3)

本校では2年前に作られたGBカードをさらに改良し作られたSUカード（詳細については平成15年度紀要を参照）を使い、生徒自身が自らの学習状況の把握、目標の確認、自己評価と行っている。また、毎時間の学習の振り返りや題材が終わっての学習の振り返りを行うために自己評価シートを使用することで、教師からアドバイスという形で助言をもらい、次の課題や進み方などがわかる仕組みで学習が展開されている。

「学ぼうとする力」を高めるためには、教師が生徒の姿を正確に見とらなければならない。見とるためにはいくつかの方法がある。一般的には観察法、質問紙法、発言、作文、ノート分析、ワークシートの記載内容、自己評価、相互評価などである。その中で、国語科として、外の表出されやすいものとしては「話すこと」「書くこと」に関するものがあげられる。しかし、「聞くこと」「読むこと」においても観察やノート・ワークシートなど書かれたものを使って、見とることができる。3)

生徒の姿を見取った上で、生徒の学ぼうとする力を高めるための工夫（手だて）が必要となる。

生徒の学ぼうとする力を高めるためには

- ①生徒に自らの目標を設定させ、自分の学習過程を理解して学習を展開すること
- ②他者からの評価（学びあい）があること
- ③学習の過程を振り返ることができ、情意面で満足感や充実感を味わえることが必要である。

そのために本校では学ぼうとする力を高めるための工夫をする切り口として研究部が3つのかかわりを提案し、国語科でも3つの関わり（「学ぶ対象との関わり」「他との関わり」「自己との関わり」）を踏まえた授業研究を行った。

(4) 国語科における3つのかかわり

学ぶ対象との関わり	自己との関わり	他との関わり
<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標を達成するために効果的な教材を複数の教科書などから選び、提示する。 ・個々の目標を達成するために必要な教材を選択させる機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SUカードを用いて、自己の学習を振り返り、目標到達状況を知る。 ・「自己評価シート」に学習の取り組み状況や次時の課題を記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア学習、グループ学習、などを取り入れ、学習形態を工夫する。 ・相互評価を取り入れ、評価の精度を高める。

IV 実践例

1. 題材名 「近代の俳句」(教育出版 3年)

2. 題材について

「俳句」は3年生で初めて出てくる題材で、2年生では「短歌」を学習している。ここでは、俳句の基礎・基本について理解させ、次に鑑賞へと進めていく。作品の鑑賞では、「短歌」の時と同様に、表現された言葉を手がかりにできるだけ自由に想像をはたらかせ、作者の思いを深く読み味わわせたい。また、生徒同士の意見交換により、自分以外の感性にもふれさせ、読みを深めさせたい。

3. 最終目標

- (1) 俳句のリズムやきまりについて知り、俳句に描かれた情景や作者の思いに迫ろうとすることができる。(関心、意欲、態度)
- (2) それぞれの俳句の情景を、表現の特徴からとらえることができる。(読むこと)
- (3) 俳句の主題や要旨を読みとり、それに対する自分の考えをまとめることができる。
(読むこと)
- (4) 俳句の基本的な事項についてとらえることができる。(言語事項)

4. 指導計画(6時間扱い)

学習内容	指導目標	時間
俳句の基本事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 俳句の基本形のリズム、季語、切れ字、句切れについて理解させる。 ・ 教科書にある俳句で基本事項を確認させる。 ・ 俳句の流れについて理解させる。 	2
俳句の鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> ・ 俳句の鑑賞の仕方を理解させる。 ・ 「俳句の楽しさ」を読み、鑑賞の仕方を理解させる。 ・ 選択した俳句を鑑賞させる。 ・ 鑑賞した俳句を交流させる。 	4 (本時 3/4)

5. 本時案

(1) 学習目標

- ・ 選んだ俳句について、背景や内容について積極的に調べ、解釈しようとしている。
(関心・意欲・態度)
- ・ 俳句に使われている言葉や表現を手がかりに、俳句に込められている内容に迫ることができる。
(読むこと)

(2) 学習の展開

学習活動	教師の働きかけ	指導上の留意点
・本時の学習目標をワークシートに書き、学習内容を確認する。	・学習の手引きを用いて、学習の進め方を確認させる。(観察評価)	・学習の手引きには学習の進め方やポイントを簡単に明記しておく。
・同じ作者や同じ俳句を選んだものでペアを組み、調べる。	・各自が選んだ俳句について、作られた背景や内容について、調べさせる。(観察評価) 調べさせるポイント ①作者のおかれている状況 ②俳句の中に見える物、色 ③俳句の中に聞こえている音 ④においなど ⑤作者の思い	・作者については参考プリントを用意し、参照させる。 ・ワークシートに書き込ませる。
・自己評価シートの記入をする。 ・次時の学習内容を知る。	・本時の学習を振り返り、評価シートに記入させる。(自己評価) ・次時は調べた俳句の鑑賞文の交流会を行うことを告げる。	・記述式なので具体的に書くように指示する。

V 実践を振り返って

この授業は、「読むこと」の生徒の興味・関心を知る手がかりとして、前年度に学習した「短歌」での学習状況を振り返るところから始まった。生徒は前年度のSUカードによる自己評価や前年度のワークシートが個人の国語ファイルに残っているので、それをもとに分析し、自己の到達状況を把握し、今回の題材での個人の目標を設定した。



国語科の各領域の力は螺旋的に積み上げられていくので、今回のように長期的な目標設定も必要となる。また、長期的な学習の展開では、生徒の成長によって指導法の工夫がなされることが大切である。生徒は日々の学習活動の中で、何らかの変容を遂げている。学年が違い、題材が変わっているのに、指導方法がパターン化され、工夫がなされていないとすれば、「学ぼうとする力」も高められない。そこで、今回は前回の「短歌」の学習で調べ方や鑑賞の仕方が理解できたことを踏まえて、さらに200字から400字程度の「鑑賞文」という形に表現できることを目標にかかげた。(「自己」との関わり)

また、解決していく課題についてもいくつか選択肢を用意し、自らが興味のある俳句を調

べ、鑑賞させた。「学ぶ対象」との関わり)

学習過程では、ペア学習を中心に自分と同じ俳句を選んだ仲間と意見を交換したりなどして、読みを深めたり、できあがった鑑賞文をできるだけ多く読み、お互いに鑑賞させる活動も取り入れた。「他との関わり」)

一時間ごとの振り返りについては、自己評価シートを用い、自分の学習への取り組み状況や課題などを書かせた。それにより、次時の学習内容の確認ができたり、教師からの助言によって、次への意欲が喚起され、生徒の課題意識や意欲が題材を通して継続的に高められたことがわかった。「自己との関わり」)

反対に、教師が授業の中でできるだけ多く観察し、生徒の実態を見とることの難しさも痛感した。限られた時間の中で、生徒全員を見とることは不可能である。自己評価シートなどを活用し、手立ての必要な生徒に絞って、観察をし、教師が働きかけをする必要がある。

また、今回は「自己評価シート」の処理についても課題が残った。確かに自己評価シートは生徒も教師も振り返ることができ、メリットはある。しかし、記述式の場合、評価をする時間がある程度必要となり、それを授業の中で保障しなければならない。毎回の授業で評価の時間を保障するために活動時間が制限されることもある。また、記述の仕方がパターン化され、正しい自己評価がなされない恐れもある。そして、提出されたシートは教師が毎回コメントを記載するが、かなりの量をさばくことになり、コストが大きい。このシートを上手に生かすことができれば評価を通じて、教師が指導の過程や方法について反省し、より効果的な指導が行えるようになり、工夫を図っていくことできる。

						日付
						学習目標
						自己評価
6/2	5/31	5/28	5/26	5/17	5/14	(例) 俳句の基本形や○○を知る。
みよう。 友達の鑑賞文をよんで	選んだ俳句の鑑賞 する。	俳句を鑑賞する。	俳句の鑑賞のしかたを 知る。	俳句の基礎事項② (俳句の流れについて知る)	(例) 季語・切れ字・句切れ ① (ハズム、季語・切れ字・句切れ)	(例) 今日は初めて俳句について学習したので、○○、××のことがわかった。自分としてはいつもより真剣に取り組んでいたと思う。
いろいろな解釈のしかたや 鑑賞文があつてよんでいて は、こころもよかった。	以前のときよりも、俳句を 深く鑑賞できるよくなった。 たのでよかったです。	気持ちはよかったです。作者の 解釈の仕方があったし、作者の 意図がよかったです。	俳句で、解釈の仕方がいろいろ あつておもしろいと感じました。 夏③鳥②	俳句が俳諧から生まれたこと について始めて知りました。正岡 子規など知って入る人が出ておもしろい なりました。	季語・切れ字については少し 知っていたけど、ハズムについては 知りなかつたから、深めることか てました。	

「近代の俳句」自己評価シート

3年B組 番氏名

VI 成果と課題

「学ぼうとする力」を高めたことによって、「読むこと」を中心目標とした俳句の授業では俳句にかかれた思いを的確によみとろうとする生徒の姿が見られた。

学習者自身が興味や関心をもったものについてはより深く知ろうとする。そのために生徒みんなが同じ目標で、同じ活動で「学ぼうとする力」を高めることは難しいと思われるので個人の目標の設定の仕方にもう少し工夫がなされる必要があることがわかった。また、生徒が学習の目標や学習の過程、まとめ方など「学び方」が身につけていると「学ぼうとする力」がより一層高まることもわかった。

自己とのかかわりでは、自己評価シートの中で生徒はどこでつまづいたかがわかるようになっていたので、生徒自身が自分の課題を意識化することができた。また、教師も手だてのポイントが明確になった。それにより、次時の学習内容の確認ができ、教師からの助言によって、次への意欲が喚起され、生徒の課題意識や意欲が高められたことがわかった。

他とのかかわりでは、「学びあい」活動を取り入れることで、問題解決の意識を共通認識し、自ら考えたことや調べたこと、感じたことなど意見をのべ、他の意見も聞き、交流の中で追求を深めていくことができた。

今回の実践から、教師の見とりをもとに、生徒個々の学習にあった手だてを講じることで生徒がどのように変容したかをきちんと記録として残しておくこと、またその蓄積によって3年間を見越した学習のステップを整理し、SUカードの見直しをすることなど具体的な幾つかの課題が明確になった。

VII 終わりに

本校の生徒の国語の実態も、世間一般でいわれているように、日常の文化的な生活環境の変化からくる「言語経験の貧困化」や「学習習慣の集中力の弱体化」「興味関心の多様化」などが当てはまる。効果的な学習指導のためには、目標の実現をめざして、どのように学習活動を組織するかという学習計画の重要性、同時にその過程での評価が重要である。(指導と評価の一体化)

今後も生徒の学ぼうとする力を引き出し、確かに豊かな言語感覚を持ち、伝え合う力を持った生徒の育成に努めていきたい。

(文責 三津橋ゆかり)

〈引用文献・参考文献〉

- 1) 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(平成16年2月3日)
- 2) 平成12、13、14、15年度『研究紀要北海道教育大学教育学部附属函館中学校』
- 3) 尾木和英 『評価で変わる国語の授業』三省堂(2001年)
- 4) 文部省 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 国語編

社 会 科

自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学学習の追究

～評価と教材開発の視点から～

附属函館中学校 深見 亘・阿部智子

I はじめに

中学校の社会科の面白さは何だろうか？ 考えること、追究すること、知識を身に付けていくこと、それを活用すること、あるいは物語や紀行文を読むような面白さや複雑な現代社会を解き明かすことだろうか。しかし、教科で扱う内容や評価の仕組みが大きく変化したときには、われわれはその変化への対応、つまり近年であれば評価のシステムや評価基準などの見直しに手一杯となり、生徒たちにこのような教科本来の面白さを体験させることを忘れがちになってしまう。

昨年度は「個に応じた指導の充実」を副主題に発展的・補足的な学習の研究を行い、生徒一人一人の力をいかに伸ばしていくかを考えてきた。そして各分野での内容の厳選、さらに大きく変化した地理的分野の授業研究・実践を行い、生徒が自ら学習を進めていくための学び方の研究に力を注いできた。その結果、わかる授業が生徒の学ぶ意欲を高めるということを確認することができた。今年度は、「意欲」そのものを対象とし、仕組みを見直して、意欲を高めていくための手段に焦点を定め、社会科学学習について考えてみた。

II 研究の経過

本校社会科ではこれまで、主に自己教育力に焦点をあて、「生きる力」の育成をめざして研究・実践を進めてきた。その中で、「個のよさを表出させるため、多様な学習活動の設定が有効である」「学ぶ意欲とともに、思考力、判断力、表現力などの能力の育成が必要である」「個の学習を質の高いものにするために、他からの学び合いが不可欠である」ことが確認できた。また、個と集団のバランスのよい成長を目指し、集団の機能を生かした学習方法にも焦点をあてて研究・実践を進めてきた。

昨年からは、研究主題を「自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学学習の追究」と定め、副主題を「個に応じた指導の充実をめざして」とし主に学び方の理解と実践について追究した。具体的には全単元においてSUカードを作成し、生徒が自分で身についた力を確認し、発展的・補足的な学習に取り組んでいけるような試みを行った。下記の表はこれまでの研究の流れをまとめたものである。

研究年度	主 な 研 究 内 容
2001 年度	「確かな学び」の吟味、年間指導計画の作成
2002 年度	評価のあり方、「評価カード」(GB カード) の作成
2003 年度	「確かな学力」の吟味、発展的・補足的学習のあり方、「STEP UP カード」の作成
2004 年度	関心・意欲・態度の評価の吟味、意欲を高めるための方法 年間指導計画～SU カード～評価 の一連の流れを検証

Ⅲ 研究の内容

1 本年度の研究主題・副主題について

本年度の研究主題は、昨年度に引き続き「自ら学ぶ意欲をはぐくむ社会科学習の追究」である。学ぶ意欲をはぐくむためには、まず生徒が教科の内容を理解することが第一であると考え、昨年度はそのための手立てや仕組みを研究した。教科の内容を確実に理解すること、自分の成長を自分で実感できることは生徒の「学ぶ意欲」を高めるものであることを確認できた。

そこで、今年度は「評価と教材開発の視点から」と副主題を定め、「学ぶ意欲」つまり評価の4観点でいうところの、関心・意欲・態度の部分をいかに評価し、いかにそれを高めていくかという点に焦点を絞った。意欲は生徒の内面にあるもので、目に見えにくいものである。しかし、意欲をはぐくむためには、まず生徒の現状をしっかりと見とることができなくてはならない。そのため、まず社会科における関心・意欲・態度の内容、評価方法などの見直しを図る。そして意欲を高めるための工夫について、主に教材開発の面から取り組むこととした。

2 社会科における「学ぼうとする力」

本校では昨年度、学力を「学んだ力」「学び方の理解と実践」「学ぼうとする力」の3つの要素とし、そのすべてに支えられた力こそが「確かな学力」であるとした。それを受けて本校社会科ではそれぞれの力を次のように定義した。なお文中ではこの「学ぼうとする力」は「学ぶ意欲」、または「意欲」と表現している。

学んだ力

社会的事象に主体的に働きかけて得た知識をもとに自分の言葉で説明できる力。(知識・理解)
社会的事象から課題を見出し、意義や特色を多面的に考え、新しい課題に応用していく力。
(思考・判断)

有用な情報を選択・活用し、追究した過程や結果を適切に表現し、新たな情報を創造できる力。
(技能・表現)

学び方の理解と実践

課題学習を通して基礎・基本を確認し、振り返りシートやSUカードで自己評価し、自分の学習課題を把握する。その課題を学ばせることを通して、思考力や新たな情報を創造できるよう基礎・基本のステップアップを図る手だて。

学ぼうとする力

社会的事象に興味・関心を持って事実やできごとを主体的に受け止め、そこに生活する人々に共感しながら、疑問や意見を持ち、問題の解決を図ろうとする意欲や態度。(関心・意欲・態度)

3つの力の関わりについて、詳しくは総論に述べられているが、適切な「学び方の理解と実践」が生徒に「学んだ力」をつけさせ、それが次に「学ぼうとする力」に結びつくというものである。そして、またその「学ぼうとする力」が次の学習のきっかけになるというつながりになっている。

3 「関心・意欲・態度」の評価

(1) 基本的な考え方

関心・意欲・態度の評価については一般的に、データの少なさ、態度面についての評価の偏り、評価方法の偏りなどの問題点が指摘されてきた。また、授業態度や学習常規全般と混同されることもあった。しかし

本来は、「社会的な事象に対するの関心・意欲・態度」という内容であり、本校社会科においても前項の「学ぼうとする力」のように定義している。

その「解決を図ろうとしている」といったような内面にあるものを評価するためには、外面に表れるようなものに変換しなくてはならない。そのため、比較的外面に表れやすい他の評価の3観点と絡める方法によることにした。その視点から考えると「興味・関心」のある姿は具体的に次のようなものなどが挙げられる。

思考・判断と絡めて	技能・表現と絡めて	知識・理解と絡めて
<ul style="list-style-type: none"> ・課題や問題を自ら解決しようとしている。 ・新しい考えや価値を生み出そうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業的な学習において、形式や内容に独創性が見られる。 ・自らの技能を伸ばそうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で学習を進めていないと持ち得ない知識を持っている。 ・実生活や実体験と関連付けようとしている。

ただし、意欲を評価する際には、基になる能力（思考・判断、技能・表現、知識・理解）に左右されないよう、課題や授業方法を適切に考えていくべきである。その際の関心・意欲・態度の目標は、「能力は十分ではないが、意欲はある」生徒が到達できるような目標でなくてはならない。そして目標にあるような状態に、どれだけ生徒が近づけたかという変容を見とることが評価となる。

(2) 見とりの方法

次に関心・意欲・態度のより見とりやすい方法について、①見とりの切り口、②見とる手段、③見とりの範囲の面から、それぞれ考えてみた。

①見とりの切り口

思考・判断の観点と絡めることが有効ではないか。

⇒意欲はきまりきった上限のある目標を達成するときよりも、生徒の自由意志がより働き、どこまでも追究できる、いわば上限のない目標の際にこそ、より表出するのではないかと考える。それならば思考・判断に絡めた課題に取り組みせることが適切ではないだろうか。

②見とる手段

観察法とワークシートの分析を中心に見とる。

⇒特にワークシートについては、生徒が課題について考えたことを授業ごとに記述できるような欄を設け、生徒がその単元の中でどのような思考を進めて課題に迫っていったのか見とることを試みる。生徒がどのような過程を経てその答えにたどりついたのかは、思考・判断の面から意欲を見とる上で貴重な判断材料となると考える。

③見とりの範囲

見とる範囲を絞り、見とりのコストを削減する。

⇒より妥当な評価ということになるとデータを多く揃えたほうがよいが、毎時間の活動全てを評価すると、意欲の評価のための授業になってしまう危険性がある。そこで、単元（または小単元）の最後に、単元全体の振り返りになるような課題を生徒に与え、その課題への取り組みを評価することとする。評価の対象となるのはその単元全ての学習になるが、評価にかかる時間は主にその1時間になるので、見とりがしやすくコストも低いと考えられる。

以上の3点をまとめると、関心・意欲・態度の評価については、単元の最後に思考・判断と絡めた課題に取り組みせ、観察とワークシートの分析から見とるということになる。

4 意欲を高めるために

意欲を高めるための工夫は、本校社会科においても継続的に研究がなされ、授業内容と学習形態の工夫の必要性、生徒に明確な課題を持たせること、情意面の満足感と知識・理解面の満足感を重ねること、などが明らかになっている。

今年度本校では、「学ぼうとする力」をはぐくむためのアプローチとして、学ぶ対象との関わり、他との関わり、自己との関わりという三つの面から工夫を行ってきた。本校社会科ではこの数年間おもに、地理的分野において学習形態の工夫や自己評価・相互評価について研究してきた。そこで今年度はこれまで重点にしていなかった教材開発を中心に研究を進めていく。あくまで意欲を高めることが目的なので、歴史的分野の中でも生徒の意欲が低い世界史と日本史が交わる部分についての教材開発を中心に授業実践を行った。1・2学年どちらにしても日本史の流れの中に突然世界史の内容が現れ、苦手とする生徒が多い部分である。ゆえに本年度の研究に適した部分と考えた。

学習形態については課題を追究するという授業に適切な活動としてグループでの話し合い活動を考えた。ただし、得た知識を段階的にワークシートに書き込ませ、あらかじめ自分の意見を固めておくことにより、生徒が難しいと感じている話し合い活動に取り組みやすくするという手法を考えた。

生徒の意欲が高まりを見せる場面を考えると、①課題を解決した満足感を得たとき、②自分の常識をくつがえす新しい気づきがあったとき、③既知の事象の間に意外なつながりがあることを理解したとき、④社会的事象の原因や理由を考えることの楽しさを実感したとき、などが挙げられる。

思考・判断と絡めて意欲を評価するということと、上記のような生徒の意欲が高まる場面を併せて考えた場合、世界史と日本史が交わる部分での研究推進では、以下のような授業構築のポイントが浮かび上がった。

- ①生徒の自由な発想を生かし、知識を得るだけではない社会科の楽しさを体験させるため、得た知識を用いて推論を立てさせる。
- ②1時間で解決するような課題ではなく、生徒が毎時間考察を積み上げていくことにより、単元を通して徐々に明らかになっていくような課題とする。
- ③世界史と日本史が交わる内容のなかでも、小学校での既習事項に関わる部分とする。そしてできるだけ生徒の持っている知識をくつがえす課題を与える。
- ④自分の立てた推論を話し合い活動に生かすことができるようにする。
- ⑤単元の最初に学習内容の不完全な情報を与えて興味を持たせ、単元の要所で疑問点を書かせてその後の授業に生かす

以上の5点に基づいて授業実践を行った。

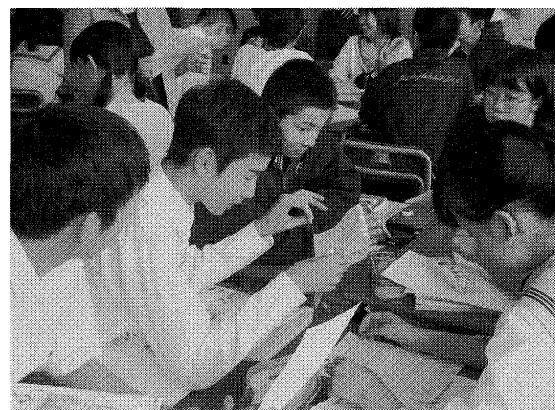
IV 実践例

1 単元名『ヨーロッパの近代の成立とアジアの抵抗』（近代の日本と世界）

2 単元について

現行の学習指導要領では、以前に比べて世界史の内容は大きく削減されている。しかし、日本史との密接な関係付けはますます重要になってきており、この単元において生徒は、日本の明治維新が世界の近代化や産業革命などの大きな流れの中で起こっていったことを学ぶ。世界史と日本史の関係の深い部分は、歴史の学習の中でも興味深い部分ではあるが、そのつながりを考察することは、生徒にとってしばしば難度の高い課題となることが多い。

そこで、市民革命からアジアの抵抗までを学習する中で、「ペリー来航の理由」という生徒にとっては既習の知識を取り入れた課題を設定して、単元を通じて徐々に課題を明らかにさせていく手法をとることにより、生徒の興味・関心を高めることを狙った。主な学習内容のまとめりごとに、ペリー来航の理由を推測させワークシートに書き込んでいき、最後にそれらを話し合い活動によってまとめるという手法をとった。歴史学習の重要な部分をしっかりと理解させつつも、本質的な興味深さも感じさせ学習に意欲的に取り組ませたいと考えた。



3 本時案

題材 「ペリーの来航」

学習目標

- (1)ペリーの来航理由について考えるという課題に対し、自分の答えを見つけ出そうとすることができる。
(社会的事象への関心・意欲・態度)
- (2)ペリーの来航理由について考えるという課題に対し、これまでの推論の積み重ねや話し合いから自分の答えを考えることができる。
(社会的な思考・判断)

学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指導上の留意点
○本時の学習内容を確認する。	○本時の学習課題を確認させる。	
ペリーの日本来航の理由について考えよう		
○「ペリーの日本来航」について、これまで考えてきたことを総合的につなぎあわせ、自分なりの推論を考え出す。	○これまでワークシートに書いてきた個々の推論を総合的に考えて、自分の論を書くように指示する。 資料集の資料も紹介する。 <観察①>	※これまで立てた推論から取捨選択するよう助言する。
○グループでペリー来航の理由について話し合い、より良い推論を考える。 話し合いの内容を記録をする。	○グループで話し合いをさせる。 また、話し合いの様子について、記録させる。 <観察②>	※話し合いの方法について助言する。 ※発表は簡単に行わせる。
○班ごとに結論を発表する。	○班ごとに発表させる。	※生徒の意見に対して寸評を加える。
○一般的に正しいとされている内容と、ペリー来航後の歴史を確認する。	○一般的とされる内容を説明し、ペリー来航後の歴史について質問する。	
○「ペリーの要求の通りに幕府はなぜ開国したのか」を考え、発表する。	○幕府開国の理由を考えさせ、発表させる。 <観察③>	

○次時は開国の影響と幕府が減っていった流れについて学ぶことを知る。	○次時の学習内容を告げる。	
○自己評価シートでこれまでの取り組みを振り返る。	○自分の取り組みを自己評価させる。 ＜自己評価＞	

4 関心・意欲・態度の見とりについて

この授業では、思考・判断と関連させた関心・意欲・態度の見とりを行った。見とりの方法は、主に観察法とワークシートの分析を用い、補助的なものとして自己評価やノート分析も参考にした。

観察は本時案にある＜観察①＞～＜観察③＞の3つの場面で行い、それぞれ、次のように見とった。

観察①	ワークシートを書いている様子を観察する。単に書いているだけではなく、調べたり考えたりしているか、その様相にも注目する。まったく手が止まっている生徒については支援する。何もない状態から考えるのではなく、すでに考える材料となる推論を書き溜めているので、それをまとめる活動となる。
観察②	話し合いをさせ、参加への積極性を見とる。多く発言している生徒、まとめようとしている生徒と、発言もなく聞いている様子が希薄な生徒を見とる。
観察③	挙手するかどうかを見とる。やや発展的な内容だが、考える材料はふんだんにあるので、それほど難易度は高くないと考える。そのため、この発問によって関心・意欲を見ることができると考える。

ワークシートの分析については、単元を通じ継続して推論を書いてきたワークシートを次の①、②の2つの観点から分析した。

観点①	自分なりに論を組み立てようとしているかどうかの観点で判断する。より多くの情報を用いて、複数の角度から論を組み立てようとしていればA、1つの流れで論を組み立てていればB、途中であきらめていればCと考える。思考・判断の能力に左右されるので、できるだけそうならないように、まとめごとで推論を立てさせ、話し合いの時間を用意している。
観点②	段階的に関心を高めていっているかを内容や分量の変化から見とる。

＜生徒が推論を書いたワークシート記述の例＞

	ペリー来航の理由
学習前	中国と貿易するのに、日本に寄って食料などを補給するため。くじらを捕まえるため。
革命の学習	革命をたくさんの国に伝えたかった！？革命を起こした国は他の国と違う考えだから敵が多い。そこで同じ意見を持つ国を増やそうと思った。
産業革命	～省略～
インドと中国	イギリスが中国とインドをのっとして、勢力を上げたので、アメリカも負けじと同じアジアである日本をターゲットにしたんだと思う。アメリカも勢力を上げて強くなろうと思った。
総合的に	革命をたくさんの国に伝え、自国の味方を増やそうとした。また、貿易などをして発展した国になろうとも計画していた。本当のお目当てはイギリス同様、インドと中国だったが、手前にいる日本が食料などの補給に役立つそうなので、開国させようと思った。さらに自国の革命の成果を伝えて日本も同様に（後略）

5 関心・意欲・態度を高めるための手だて

関心・意欲・態度を高めるための手だてについては、Ⅲ-4においても記述したが、実践したものについて本時における工夫と単元を通しての工夫に分け、改めてまとめる。

本時	<p>①その単元で得た知識とそれまでに立てた自分の推論を用いて課題に取り組みさせた。</p> <p>②「ペリー来航」という小学校で一度学習した内容を課題とし、生徒の持っている知識を覆した。</p> <p>③先に自分の意見を数多く書いているため、話し合い活動がしやすくなる。難しい活動がしやすいと、取り組みに一生懸命になる。</p>
単元	<p>①単元の始めに、「フランス革命」や「アヘン戦争」など学習する事項についての不完全な情報を与えた。また、生徒の疑問を単元の要所で書かせて、次時に取り上げた。</p> <p>②「学習前」「市民革命」「産業革命」「インドと中国」の各所で課題「ペリー来航」に対しての推論を立てさせ、単元を通して徐々に明らかになっていくような仕組みにした。</p>

6 実践を振り返って

(1) 関心・意欲・態度の評価

関心・意欲・態度の評価については、①見とりの切り口、②見とる手段、③見とりの範囲について、それぞれ実践を試みた。

① 見とりの切り口

思考・判断の観点と絡めることが有効ではないか。

⇒多少難易度の高い考える課題に取り組みさせたが、難易度を下げる手立てをとったことにより、思考・判断の能力に大きく左右されずに見とることができた。しかし、手立てをとってもなかなか取り組めない生徒のための、支援の手立てなどについてはこれからの課題として挙げられる。

② 見とる手段

観察法とワークシートの分析を中心に行う。

⇒観察法に偏らないようにし、見とる部分の学習形態も記述・話し合い・発表と3種類とし、偏りが生じないように工夫した。話し合い活動を見とるために、ワークシートに記録させる手法をとったが、生徒はほとんど記述できなかった。話し合い活動の見とりについては相互評価など他の方法に拠るべきだったと考える。

③ 見とりの範囲

見とる範囲を絞り、見とりのコストを削減する。

⇒範囲は適切であったが、もう1つ単元を通して他の観点と絡めて見とったほうが、より適切な評価になったと考えられる。また、生徒を様々な面から評価するためには、意欲を見とる学習形態も見とりの方法についても種類を増やしていかななくてはならない。

(2) 意欲を高めるための工夫

意欲を高めるための工夫として、①教材開発、②学習形態、③自己評価の面からそれぞれ実践を行った。

①については、今回特に重点をおいたが、1つの学習課題に対し単元の学習を進めながら推論を積み重ねていくという授業を実践した。結果は、単元の授業が進むごとにワークシートの記述内容が増えていっている生徒が多く、世界史と日本史が交わる学習内容と「理由を考える」という活動に対して意欲を高めていったと考えられる。

歴史的分野においてこの手法を用いることができる題材は、古代の律令国家の成立や元寇、鉄砲の伝来な

どがあると考えられるが、内容をしっかりと精査し教材開発を進めていかななくてはならない。また、地理的分野においては各地域の調べ学習の単元において、公民的分野においては国際問題の単元においてこの手法を用いることができると考える。

②の学習形態については、話し合い活動を取り入れたが、自己評価の用紙から、他の生徒の意見を聞くことや意見交換すること、徐々に複雑な考えを出せるようになったことに楽しさを感じたと書いている生徒が非常に多いことがわかった。導き出された意見についても、十分に練られ妥当な内容がほとんどだったため、この工夫については、一応の成果を得ることができたと考える。

しかし、思考・判断の面から生徒の力を伸ばしていくことを考えると、話し合い以外の活動を取り入れることや、本校で行っている発展的・補足的な学習、特に発展的な学習との効果的なつながりも考えていかななくてはならない。

③の自己評価については、今回は、見とりの対象となった活動について、生徒自身がどう評価しているかを教師側が掴むためにおこなった。特に、全てを見とることができない話し合い活動について、ワークシートからは満足な情報を得られなかったが、自己評価からある程度の情報を得ることができた。また、感想としてさらに学習したい事項、疑問が解けていない内容を毎時間生徒に書かせたことも、教師側の指導計画の見直しと、生徒への支援に役立てることができた。

今回行った自己評価の問題点は、取り組んだ全ての活動1つ1つを細かく文章で振り返らせたため、書く分量が多くなり、授業時間内におさまらなかつたことである。本当に評価させたい活動に絞らなくてはならない。そして自己評価能力については研究をさらに継続し、SUカードを活用させ、特に思考・判断、知識・理解の面での自己評価能力の育成を図りたいと考えている。

学ぶ意欲が高まった結果、学ぶ力や学んだ力が高まったかどうかは、短期的な振り返りでは判断しにくい。ただ「疑問を持つ」姿勢や「謎を解く」ことの興味深さ、また自分の頭や学級の仲間と共同で課題の解決にあたる楽しさ、こういったことを繰り返し授業の中で意図的に体験させていくことが、自ら学ぶ意欲を高めていくことにつながることは確かである。今回の実践を基に生徒の意欲を高める授業の実践を続け、さらに学ぶ力や学んだ力を高めていきたいと考える。

V 終わりに

今年度の研究を行って、自らの学ぶ意欲に対する認識の曖昧さや、学ぶ意欲を高める授業を系統だてて行っていなかったことを改めて実感した。これからも生徒の学ぶ意欲を意識しつつ、知識や技能を習得するためのより効果的な方法を追究していきたい。

そして、そのためにも、私たちは1時間1時間の授業を大切に、生徒1人1人を育てる授業を行っていかなくてはならない、ということを再認識した。

(文責 深見 亘)

<参考文献>

- 1) 澁澤文隆・佐伯真人・大杉昭英編著『改訂 中学校学習指導要領の展開 社会科編』(明治図書 2000)
- 2) 澁澤文隆・佐伯真人・大杉昭英編著『中学校新教育課程の解説 社会科編』(第一法規 2000)
- 3) 北尾倫彦・祇園全禄編集『観点別学習状況の新評価基準表 中学校社会』(図書文化 2002)
- 4) 北俊夫編著『社会科「関心・意欲・態度」の評価技法』(明治図書 1993)
- 5) 『研究紀要北海道教育大学教育学部附属函館中学校』(平成13年度、14年度、15年度)

自ら学ぼうとする力を高める学習指導の工夫

附属函館中学校 福井 博志・油谷 栄次

I はじめに

本校数学科では、過去4年間（1年次「解法が多様な学習問題の工夫」2年次「解答が多様な学習問題の工夫」3年次「問題づくり」4年次「発展的・補足的な学習」）にわたり「創造性の育成」を主題に研究を続けてきた。今年度は、過去の研究実践を踏まえつつ、意欲的に学習に取り組む生徒の育成のためには数学的な活動との関連からどのように学習問題に反映させたらよいか、どのような学習形態や学習プリントが効果的であるのかなどを探っていきたいと考えている。また、4年間「創造性」を研究主題としてきたが、学ぶ対象に対して、自ら学び自ら考え主体的に働きかけることを大切にしたいという観点から、研究主題を「創造性の育成」から、さらに焦点を絞り、実践を進めたいと考え、上記の主題を掲げた。

II 数学科における「学ぼうとする力」

数学科における「学ぼうとする力」すなわち関心・意欲・態度での指導と評価について考えるとき、まず、生徒指導要録の観点別学習状況が1つの指標になるのではなかろうか。ここでは、関心・意欲・態度の評価の観点は、他の観点と並んで1つの観点になっているだけでなく、1番目の評価の観点到位置づけられている。これは、他の観点的向上にも大きな役割を果たすと考えられると同時に、それぞれが独立して育成されるのではなく、相互に作用し合って向上すると考えられるからである。このような点から、数学科では、「学ぼうとする力」を、他の観点と関連させた関心・意欲・態度の指導と評価の方が実際的であろうという点から実践を試みようとした。それには、当然、学習指導要領の教科目標や生徒指導要録に求められる数学科の関心・意欲・態度の評価の観点などに基づいて進められる必要がある。

学習指導要領における数学科の目標は、「数量、図形などに関する基礎的な概念や原理・法則の理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさ、数学的な見方や考え方のよさを知り、それらを進んで活用する態度を育てる」となっている。また、生徒指導要録の数学への関心・意欲・態度では「数学的事象に関心をもつとともに、数学的活動の楽しさ、数学的な見方や考え方のよさを知り、それらを事象の考察に進んで活用しようとする」とある。これは、未知の課題に直面したときに、既知の知識や技能を活用し、数学的な見方や考え方を生かしながら、いろいろな観点から論理的に解決できる力を育てることをめざしているものととらえることができる。その根幹をなす数学的な見方や考え方は、ある程度の基礎的・基本的な知識、理解、技能を習得した上で成立するものであるので、まず、それらを確実に身につけさせることが重要と考える。その習得は、「数学的活動の楽しさ」を通して培われるもので、この楽しさとは「わかる楽しさ」「できる楽しさ」「活用する楽しさ」であり、それらを体感させてこそ、自らやる気をもった学びにつながるものと考えられる。

ところで、生徒が学ぶことに興味・関心を持ち、主体的に学習に取り組む姿勢を身につけていくためには、

認知心理学において、自分で学習した内容を実感でき、納得し、そこに満足感や充実感を得ることができた時であるといわれている。つまり、生徒が学習内容を心から十分納得し、実感できたときに、その生徒は学習に意欲的に立ち向かおうとし、自らやる気をもって学習に取り組むことができるようになるということである。そのためには、指導者は学習指導を内発的動機づけの面から工夫していくことが大切であろう。

以上から、数学科で考える「学ぼうとする力」を育成するためには、指導者が学習者におもしろそうだ、わかりそうだ、わかりたい、という気持ちを、「わかる」→「できる」→「活用する」といった一連の学習活動の流れを通して、喚起させ、自分もできそうだという実感をもたせることである。それは、当然、次の学習の取り組みへの意欲づけとなる。

そこで、この学ぼうとする力を、次の3つの視点「学ぶ対象との関わり」、「自己との関わり」、「他との関わり」から実践を進めた。

Ⅲ 研究内容

1 学ぶ対象との関わり

生徒の知識や技能を獲得する過程を考えると、興味・関心の高い対象に積極的に関わり、既習の知識や経験を基に、自分なりの見通しをもって、考えたり試したりするなどの学習活動に取り組み、課題の解決に成功したり思い通りにいかなかったりすることを通して、学習した内容や学び方について新たに関連づけたり、構築・修正したりしていくと考えられる。このような学習を重ねながら自らのものとして獲得された知識や技能は、その後の学習や生活に活用され、学びをより確かにより豊かにすることが期待できる。

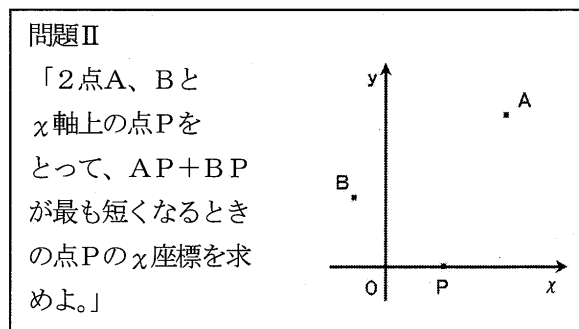
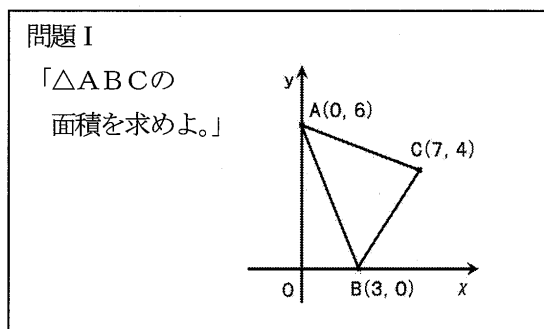
このようなことから、学習のための最初の出会いである学ぶ対象との関わりでは、好奇心を刺激したり、成功経験を味わわせたりすることができる教材の工夫として以下の点を実践で試みた。

(1) 学習問題の内容

生徒一人ひとりに個性、能力の違いがあるので、できるだけ多くの解決方法が可能な問題ならば、生徒も柔軟に対応できる。また、1つの方法のみでなく、視点を変えて挑戦すると別の方法でも解決できるということは、問題解決への意欲と能力を高めると共に、自己学習への大きな力となっていく。

このような観点から、解法が多様な学習問題を単元の後半部分でできるだけ提示するようにしている。

例えば、下のような座標平面上の三角形の面積を求める問題Ⅰと、最短距離に関する問題Ⅱを授業で扱った。面積の問題は、分け方や移動の工夫ができたり、距離の問題は、対称な図形や作図の発想など、何通りかの追究の仕方があり、多様な解法が考え出された。



(2) 学習問題の設定の仕方の工夫

意欲を高めるためには、自律性を高める必要があり、その1つの方法として自己決定させることだと言われている。本当の意欲とは、まず自分で課題を決定し、解決するまでねばり強く取り組む姿勢に表れるのである。

そこで、数学の学習内容で苦手意識の高い、一次関数に関して、次のような実践を試みた。自分の力を高めたいと思う課題について、事前にアンケート調査(右上の数学アンケートの抜粋は一次関数に関して、テストなどで正答率の低かった、「双曲線と一次関数の交点」、「一次関数と図形の性質」、「一次関数と面積」、「図形の移動と一次関数」の4種類の課題から選択させ、その選んだ理由も記述させるもの)を行った。その結果、人数の多い問題を、授業で進める学習内容として2つピックアップし、その中から、生徒自身にさらに考えさせて、1つを選ばせ、同一時間内でその選択した学習問題を、その問題ごとに同時に授業を展開した。

数学アンケート

◆次の①~④は一次関数の問題です。一次関数に関して、自分の力を高めるためには、①~④のうち、どの問題に取り組みたいかを選び、番号で□に記入しなさい。また、選んだ理由も書きなさい。

① 下の問題は、双曲線と一次関数との交点に関する問題です。
右の図で直線*l*は関数 $y = ax + b$ 、双曲線*m*は関数 $y = \frac{c}{x}$ のグラフである。AとBは*l*と*m*の交点で、Aの座標は(3, -4)、Bのx座標は-2である。a、bの値を求めよ。

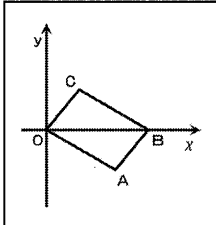
② 下の問題は、一次関数のグラフと図形の性質に関する問題です。

(3) スモールステップ型の学習内容

主体的に学ぶということの一番の基本は、生徒が学習問題を解決できたときや学習内容がわかったときである。特に、わからない問題を考え抜いて最後に理解できたときに、充実感や満足感が湧いてきて、それが次の学習に取り組みたいという意欲になる。その解決の過程では、今までに身につけた基礎・基本となる知識や考え方を自分の中でつなぎ合わせていくことを通して、新しい問題をなんとか解決しようとする。そうすることで、数学の学習内容を心から納得し、他の問題解決に生かしていく力がついていくのである。その基本となる「わかる」「できる」「活用する」の一連の学習の中で、指導者側として次のような段階を追った理解を助けるためのスモールステップ型の学習を大切にしている。

課題

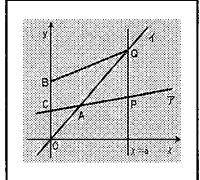
右の図の平行四辺形OABCにおいて、頂点O、B、Cの座標は、それぞれ(0, 0)、(8, 0)、(2, 3)であり、OBはこの平行四辺形の対角線となっている。



(1) 頂点Aの座標を求めよ。
(2) x軸について直線BCと対称な直線の式を求めよ。

類題

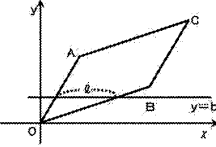
右の図において、直線ア、イはそれぞれ方程式 $x - 3y = -7$ 、 $3x - 2y = 0$ のグラフで、点Aは直線ア、イの交点、点Bは座標が(0, 4)の点、点Cは直線アとy軸との交点である。また、P、Qはそれぞれ直線 $x = a$ と直線ア、イとの交点である。



このとき、四角形BCPQが平行四辺形になるとき、aの値を求めよ。

練習

右の図で、四角形AOBCは平行四辺形である。辺OAは、関数 $y = \frac{3}{2}x$ ($0 \leq x \leq 4$) のグラフと一致し、点Cの座標は(12, 9)である。x軸に平行な直線 $y = b$ をひき、原点Oを通る位置から点Bを通る位置まで平行移動するとき、この直線が平行四辺形AOBCの辺によって切り取られる線分の長さ*ℓ*を*b*を用いて表せ。



この課題では、座標平面上の平行四辺形の特徴と一次関数との関連、一次関数どうしの交点を文字で表すことの習熟を目的とした授業である。授業の生徒の感想には、次のような内容のものが多く見られた。「苦手とする一次関数の応用問題についても段階を追って学習することにより、自分にもできるという自信が少しずつたがった。また、このような問題を、解きたいと思う。」

2 他との関わり

基礎的・基本的な内容を身につけたり、個性を生かし、伸ばしたりしていくための一方策として、学習のねらいに応じた学習形態の弾力的な活用がある。全体で共通の学習問題を追究しようするときには、一斉学習が必要であり、個々の課題や解決への道筋が違う場合や同じ課題でも解決方法が異なる場合などは、グループ学習が効果的となる。授業を進めるにあたり、指導者側として大切なことは、いつも一斉学習に偏ることなく、単元や一時間の授業の中でねらいを明確にして、多様な学習形態を取り入れた授業展開を図っていくようにしている。本科では、このように問題追究に適した学習形態の実践を以下のように試みた。

(1) ペア学習

基本的に席が隣同士のもので構成する。簡単な前時の確認や小テストの答え合わせを行うこともあるが、共通の課題を個人で追究した後に、解法の見通しや、解答したことについて自分の考えを隣の生徒に説明するなどの交流を行わせる。これにより自分自身の思考が深まり、また、考えを式や図に表現したり、表現した式や図から、相手がどんな考えなのか推測し話し合うなどの、互いの考えを比較検討させる中で、思考の過程を振り返らせ、互いの考えのよさや新たな解法の方角性を得るヒントを見つけるなどの新たな解法の発想にも生かされる。その後、一斉学習の中で、交流した意見をもとに、自ら数学を作り上げていく意識を持たせる。

	<p>ご石を左の図のように並べて正方形をつくる。1辺のご石の数が n 個のとき、ご石は何個必要か求めなさい。</p>	<p>この問題の式は、$4n - 4$、$4(n - 1)$、$4(n - 2) + 4$、$n^2 - (n - 1)^2$ などのようにいくつか考えられるが、その立てた式を互いに交換し、どのように相手が考えたのかを類推し思考を深めさせることを意図した授業を行った。</p> <p>形は他に三角形や、マッチ棒で正三角形や正方形を作る場合も可能である。</p>
--	---	--

(2) 習熟度別の学習形態

授業の基本的な流れとしては、SUカードをもとに生徒自身が自分の理解度に応じて、その単元の学習内容の確認と練習を行う『補充コース』、単元の学習内容の理解と習熟を深める『標準コース』、問題づくりと、その作った問題を標準コースとともに学び合いとして取り組ませる『発展コース』を選択させ、学習を進めていく形態を活用している。

(3) 課題別による学習形態

課題別のグループ学習の場合、問題づくりを中心とし授業を展開している。問題づくりは、いくつかの種類の原題となる問題から1つを選択し、まずは自分で、次に、その選んだ原題ごとにグループになり問題づくりを進めていく。原題となる問題の構成要素や仕組みを考えたり、原題を利用した問題を作り、解決する方法を考えたりすることは、一人ひとりの生徒にとって、自然に問題意識を持つことになり主体的な活動となっていく。また、グループにより話し合うことで、1つの原題について、自分が考えつかなかった発想や意見を聞くことになり、考え方を深化・拡充することになる。

例えば、2年生の単元「連立方程式」の問題づくりについて、次のように行った。まず、連立方程式の原題を「整数に関する問題」「金銭に関する問題」「個数・人数に関する問題」「速さに関する問題」「割合に関する問題」「濃度に関する問題」の6種類を提示し、それらを解かせる。そして、その中で自らの数学

的な見方・考え方を高めるという観点から1種類を選択させ、個人個人で問題を作らせる。作成した種別にグルーピングし、「原題と比べどこを変えたのか」「自分オリジナルの部分と思われるところはどこか」など作成した問題と共に交流し、それらを基にグループ内で新たな問題とその解答を作らせた。さらに、グループごとにつくった問題を相互に解き合い、解答を各グループごとによる発表形式で行った。

3 自己との関わり

自己のその教科における力の高まりが自覚できた時に、生徒は満足感や成就感で心が満たされ次への意欲がわき起こり、追究しようとする気持ちが高まってくる。授業や活動の初めにもっていた、あるいは途中で喚起された学習意欲が、さらに増幅されて、次への大きなエネルギーとなっていくわけである。

そのためにも、自己の学習の振り返りや教師による評価などにより、自らの学びの高まりを教師や生徒自身がとらえ、「こういうことがわかった、できた」「こんなふうに、こんなところまで考えられた」「こういうときはこうすればよかった、もっとやってみたい」というようなことを自覚させたいと考えている。

自己の学習の振り返りによって、自分の学びの力の高まりを自覚し、相互評価によって、互いの学びのよさが確認されたり、賞賛されたりして存在感、連帯感などが醸成されることになる。

また、教材のもつ基礎的・基本的な内容の習得や個性の発揮、伸長など授業や活動の本質に関わる教師の評価によって、生徒は自分の新しいよさを発見できたり、自信や勇気を与えられたりする。

(1) 学習内容蓄積プリント

「自分はこれまで、この単元の学習を、このような課題を通して、このように勉強してきた。そして、その中で、この点は理解しできるようになった」、あるいは、「この点は、まだ疑問点が残ったり、理解が浅い」、「この点についてもう少し頑張れば、きっと応用問題も解決できるようになるだろう」という自覚がでてくる。このように自分が学習した内容を吟味検討する一つの手だてとして、単元内での学習に対する自らの学習の足跡がわかるような工夫が必要である。その1つの例が学習内容を蓄積していくプリント類である。

次に示すのが3年生の単元「平方根」で活用しているプリント類である。

まず、「単元のはじめと終わり」というプリントでは、単元に入る段階での自分の平方根に対する知識や理解の度合いを確認させる。このプリントは、単元の最後にも、自分がどれだけ平方根について知ることができたのかを振り返らせるものである。

次に、各節ごとの学習の前と後にCP（比較）シートというプリントを活用する。

各節の授業の前に、「Before」の問題に取り組ませる。「Before」の問題は、できるだけ既習事項を用いて解答できる問題や予想させる問題など、答えやすい問題を設定している。ここでは、これからどのような学習を進めるのかという学習の方向性や、これからの学習内容がこの問題の解明にどうつながるのか生徒自身に目的意識をつかませることを意図とした内容の問題である。そして、授業後に「After」の問題に

平方根・単元のはじめと終わりに	
【単元のはじめに】	
◎平方根について、知っていることを何点か書きなさい。	
①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	
【単元の終わりに】	
◎平方根について、知っていることを何点か書きなさい。	
(問題を書いてもよい)	
①	
②	

取り組ませる。「After」の問題は授業で学習した内容の定着具合を自ら認識させるために設定したもので、わからなければ授業プリントの活用も認めている。

ST（蓄積）シートには、このCPシート終了後、「Before」と「After」の記述内容の振り返りやその違いなどの考察を記述していく。この1つ1つの積み重ねにより、最初の自分の理解度や疑問が、後の学習で更に深まったり、解消されたりする。

単元終了時の生徒の感想にも「最初の段階で理解していると自分自身が思っている、それは機械的な記憶だけで、活用できるま

CPシート No. 3

～平方根の大小・循環小数

Before

1 $\sqrt{7} < n < \sqrt{19}$ を成り立たせる自然数 n はいくつあると思いますか。

2 $0.999\dots = 1$ は成り立つと思いますか。成り立たないと思いますか。

After

1 3つの数 $\sqrt{\frac{2}{5}}$ $\frac{\sqrt{6}}{4}$ $\frac{1}{\sqrt{3}}$ を大きいものから順に並べなさい。

3 循環小数 $0.3\dot{4}$ を分数で表しなさい。

平方根STシート		
月 日	C P No	各CPプリントでBeforeとAfterを比較しての感想・考え(!) 疑問点(?) など、平方根の学習について思ったことを書こう。
例		BeforeとAfterを比較すると、平方根の乗除計算の基本的な進め方はわかっていたが、なぜ、そのような方法で計算ができるのかわかりました。しかし、まだ、応用問題になると難しい部分もあるので、複雑な問題にもこれから取り組みたい。
1		

平方根 3-1

M 平方根の大小と値の求め方 (2)

ex 1 筆算で $\sqrt{2}$ を求めよ。

授業プリント

①
②
③
④
⑤

ex 2 $\sqrt{5} < n < \sqrt{60}$ を成り立たせる整数 n を全て求めよ。

で納得した状況になっていなかった」、「今までの自分の学習がこのように積み上げられてきたので自分の頑張りの足跡が見られて良かった」などが見られた。

(2) 学習プリントの工夫

①ある観点に絞った「学ぼうとする力」の把握

学習問題に取り組ませる前に、その問題の特性、例えば、多様な解法をめざす課題の場合は、「数学的見方や考え方」に関する「学ぼうとする力」についての質問項目を最初にチェックする。

I 「いろいろな解き方」を考えることについて、今の自分に最も近いものに○をつけましょう。

① 解き方を1つ見つけました。

② 解き方を1つ見つけたけれど、他にも浮かびそうです。

③ 2つ以上の解き方が思い浮かびました。

II 「いろいろな解き方をしなさい」と言われると、あなたは、いつもどう思いますか。

学習後、さらに、いろいろな解き方について、次のような項目にチェックさせる。

この時間を終わって、自分の「いろいろな解き方」についての取り組みは、次のどれか選びなさい。

① 自分一人で解法を考えようとしてきました。

② 他の人の考えも取り入れて解法を書きました。

③ 他の人の考えをヒントにしなが、別な解法を考えました。

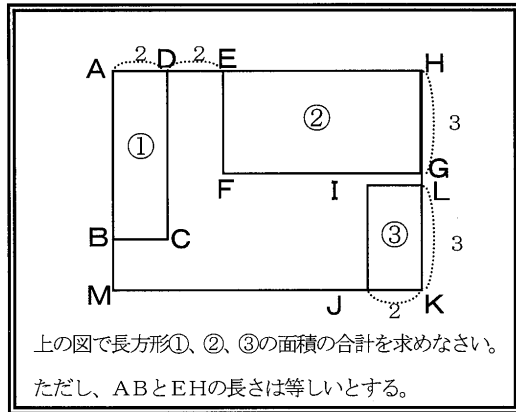
④ 他の人と相談しながら解法を考えました。

⑤ 難しかったので先生の教えてくれたことやヒントカードで解法を考えました。

数 7

このことにより、数学的な考え方である多様な解法に関して、自ら新たな問題に挑戦しようとしているか、解決のためにより多くの発想をしようとしたか、自ら情報を数多く集めようとしたかなど、前向きな姿勢であったかどうかを見とるための質問項目をプリントにのせるようにしている。これは、当然、評価の参考程度のものである。

III 実践例



下の学習指導案は校内研のもので、左にあるのは、その際の学習問題である。これは、数学的な見方・考え方に関する関心・意欲・態度をはぐくむための学習指導の展開であり、この問題は、1年生の単元「文字の式」の導入段階で扱ったものである。

条件が揃っていない問題なので、最低限何がわからなければ問題を解くことができないのかを、共通の課題として考えさせ、文字の有用性について気づかせた。その後、本題である面積の合計を式に表すときに、①、②、③の長方形を、大きな長方形AMKH内で移動させるなど、様々な

視点で、1人でいくつかの式を作らせ、互いに交流し、最後のまとめでは、どんな式も1つの文字式にまとめられることなどを確認した。

〈本時の展開〉

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
・ 本時の学習問題を把握する	・ 問題「長方形の面積の合計を求めよう」を提示し考えさせる【観察評価】 ・ 不完全な問題であることを確認させる	・ 知的好奇心を揺さぶる発問を心がける
・ 問題解決に必要な条件を決定する ・ 既習事項の確認をする ・ 本時の流れを確認する ・ 問題を再度取り組ませる ・ 文字の有用性を確認する	・ 問題を解く上で必要な条件を確定する ・ ワークシートに文字について知っていることを書かせる ・ この時間の学習の仕方を知らせる ・ 文字を使って問題を解かせる ・ ペアになり、解法を言葉で説明させる【観察評価】 ・ 学級全体で解法を交流し合う【観察評価】 ・ 文字を使うことの有用性を意識させる	・ 文字ではなく、□などを使う場合もある ・ 他の解法がないか考えさせる ・ 相手にとってわかりやすい説明をするよう促す
・ 次時の予告の確認をする ・ 自己評価し、本時のまとめをする	・ 次時から、文字を使って式を表すことなどを学習することを告げる ・ ワークシートに本時の学習の振り返りを記入させる	・ 自己評価の理由も記入させる

この授業では、関心・意欲・態度を高める方法や見とる方法を次のような視点で進めた。

【関心・意欲・態度を高める方法】

- ・ 問題は面積を求めるものなので、あまり難しさを感じることは少なくスムーズに取り組めるように設定した。
- ・ 不完全な問題を提示することにより、解きやすそうだが、なぜ、解けないのかという疑問を持たせ、知的好奇心をゆさぶり、問題に対する「関心・意欲・態度」を高めることになる。
- ・ 解法が多様な問題であるので、何通りかの方法を考え出すことができるとともに、ペアをくむこと

で自分では考えつかない解法を知ることができ、互いの考えのよさに気づき思考を深めさせることになる。

【関心・意欲・態度を見とる方法】

観察法	自分の力で何とか解こうと集中し、解答をいろいろと考えながら書こうとしている状態か、ただし、解決できないときには、そのままにせず、教師やヒントカードのアドバイス、お互いの話し合いによって、何とか自らの解法を考えようとしているかを見とる。
プリント	学習問題解決について、わかっていることを図に書き込み、さらに、自分なりに、いろいろと考えたあとが見られたり、また、自分の解法ばかりでなく、友達から提示された解法を自分なりに論理的に記述しているかも見とる。

以上のような視点で授業を行ったが、この授業の主な課題として、次のような点が指摘された。

- ・問題の解法を交流する場面では、人の考えをなるべく多く集めよう、文字の性質をつかもうなどのより具体的な動機づけがあれば、もっと生徒の動きが活発に見られ、観察法でもみとりやすかったのではないかと。生徒に動きを起こさせる工夫を授業の中に仕掛けることで、さらにのびのびとした授業になったと思われる。
- ・ワークシートに自らの関心・意欲・態度を選択し記入させると、それらの集計、記録にかなり手間がかかる。
- ・指導者の期待通りの内容しか書かないというワークシートの内容の精度が問われる。

IV 終わりに

意欲とは気持ちや意志であることから、指導者が、生徒一人ひとりの内面をどうとらえるか、心の奥を感じ取り見抜く目をどう鍛えるかなど、生徒に対する観察力や洞察力の向上を図る必要があると共に、今回の研究で用いた自己評価カードの内容を見直し、長期的なスパンでいかに見とるかなど課題は山積みである。

作り上げられた数学を学ぶという受け身的な姿勢ではなく、自ら数学に関わり数学を作り上げていくといった、学びに対する生徒の意識がポジティブに変化する1つのきっかけになってくれればと思う。今回の研究を進めてきた経緯からも、関心・意欲・態度に関わる研究は今年度で終わらせることなく、残された課題を、これからの実践の中で1つでも多く解決していきたいと考える。

(文責 油谷 栄次)

〈引用・参考文献〉

- 1 平成12、13、14、15年度「研究紀要 北海道教育大学教育学部附属函館中学校」
- 2 数学の授業を感動の連続に 玉置 崇・鈴木良隆 他著 明治図書

論理的な思考力の育成を目指して

附属函館中学校 辰巳 哲治・松下 賢

I はじめに

平成15年に示された「教育の構造改革」の理念として「画一と受身から自立と創造へ」の転換が謳われている。先に行われた教育課程実施状況調査でも、理科の学習において、観察や実験における目的意識をしっかりと持たずに、受動的になっているという実態が見られた。さらに「科学技術離れ」「理科離れ」が指摘されている昨今、「科学技術創造立国」を目指し、平成14年度より「科学技術・理科大好きプラン」が行われている。このプランでも掲げられているように、今まさに、科学技術・理科に対する関心を高め、学習意欲の向上を図り、創造性、知的好奇心・探究心を育成することが求められている。

本校理科では、ここ数年「自らの学びを意識した理科の学習」を研究テーマに、理科における「確かな学び」を探究してきた。その中で学習過程を効果的・機能的に構築することで指導と評価の一体化を無理なく行い、確かな学力の習得へ十分生かしていくための見通しをもつことができた。

そこで、今年度は、研究テーマを新しく「論理的な思考力の育成を目指して」とした。先の中央教育審議会答申のなかでの「特定の課題に関する調査」の提案で、理科において、「予想や推論を立て、それを確かめるための観察や実験方法を考案し、観察や実験の結果から実際の結論を導き出す力を把握する調査」が言われている。ここでは、まさしく科学的な思考力が問われている。理科の主要な目標である科学的な思考力は、その思考の働きが客観的かつ論理的であり、それを論理的思考と直感的思考とに分けることもある。しかしこれら2つは別々に働くのではなく相互に助け合いながら思考が進む。すなわち、科学的な思考力を育成する上で、論理的な思考は重要な要素ということになる。

そこで理科では、観察・実験の結果、結論、根拠の関係を意識させることで、論理的な思考力の育成を目指した。さらに科学的な思考に関わる学ぼうとする力（関心・意欲・態度）についてもはたらきかけることで、科学的な思考力を高めるとともに、科学的な見方・考え方を養い「確かな学力」の向上を目指すこととした。

II 研究の経過

理科では、ここ数年研究テーマを「自らの学びを意識した理科の学習」とし、理科における「確かな学び」を育むためには何が必要なのかを探ってきた。その中で、「確かな学力」について、以下のように「学ぼうとする力、学び方の理解と実践、学んだ力」の3つの要素からとらえ、よりよい学び方をめざした学習活動を探究してきた。また、指導計画の改善および明確な到達基準であるステップアップカード（SUカード）を作成し、以下のように指導計画の中に有機的に位置づけることで、自己評価能力を高めながら個々の学習意欲および学習意識を高め、「確かな学力」の習得に向けてのより効果的な学習を可能とした。

「確かな学力を支える3つの要素」

○学ぼうとする力

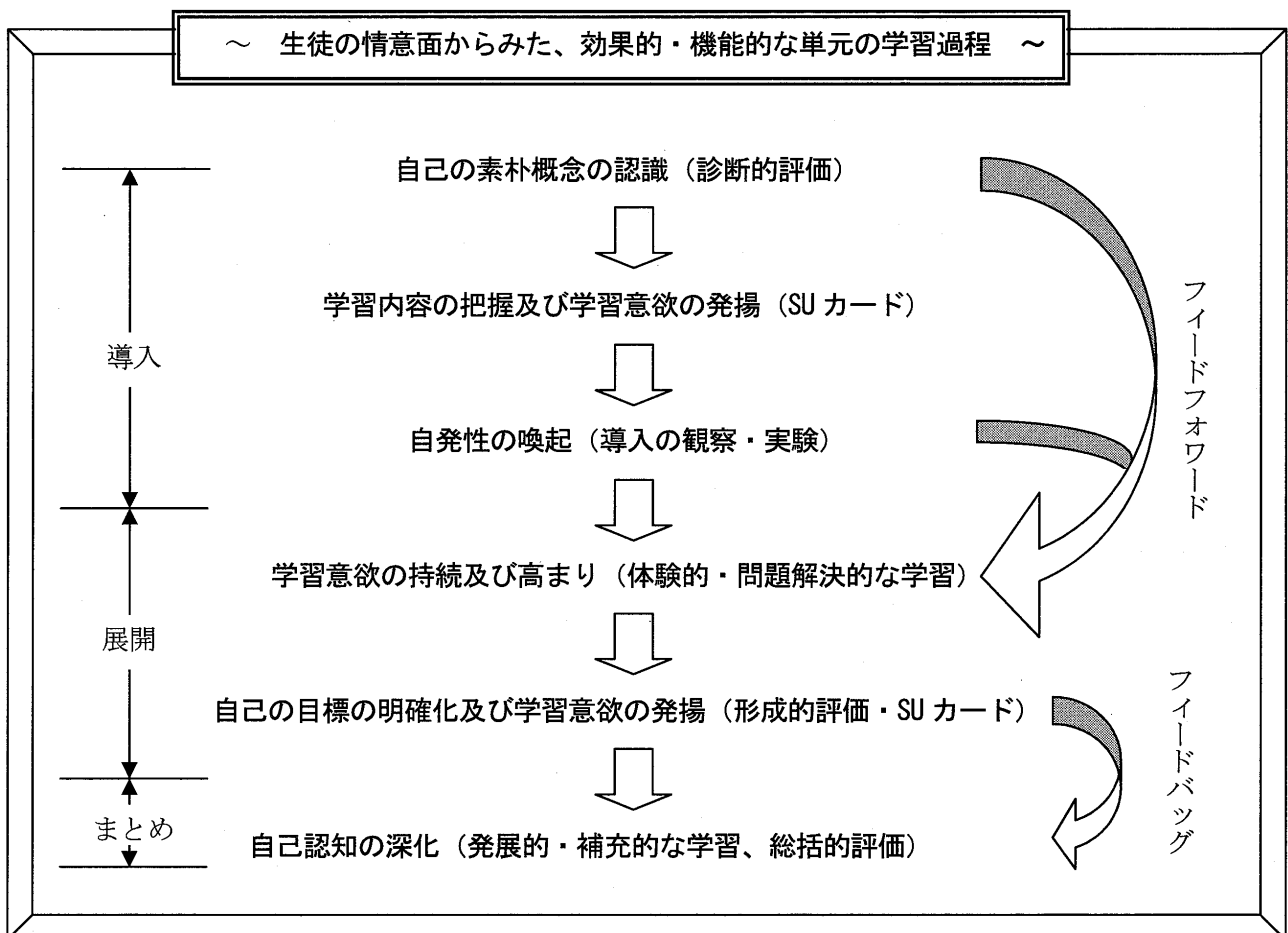
観察、実験等を通して、自然の精妙さを感じとる中から、自然に対する疑問を見出し、問題解決に積極的に取り組む知的な好奇心や探究心を高めようとする意欲や態度

○学び方の理解と実践

単元の導入部分で診断的評価を行い、各自の素朴概念を認識させる。学習の展開場面では、形成的テストとステップアップカードをリンクさせ、各自の学習状況を振り返らせる。学習後半では、自己評価をもとに発展的・補足的な学習をコース選択し、各自の学習を深化・発展させていく。最終段階として総括的評価を行い、学力をより確かなものとしていく。

○学んだ力

- ・ 科学的概念を理解する基礎的な能力（知識・理解）
- ・ 問題解決過程のスキルを使用する能力（技能・表現）
- ・ 科学的に判断する能力（科学的思考）



発展的・補足的な学習における具体的な手立

3年理科 SU カード

単元:「生物と細胞のふえ方」(14時間)

組 番号 氏名

題材名	学習目標	教材の形態	評価	A	振	近	評	B	振										
				身近な細胞の観察・スケッチからその特徴を調べようとし、さらにその環境と結びつけて考えようすることができる。				身近な植物の観察・スケッチからその特徴を調べようすることができる。											
生物と細胞のふえ方	科①	扶⑦	原形質流動を観察しよう。 身近な生物についての観察・実験を通して、細胞のレベルで見た生物の体のつくりと生殖について理解しよう。 観察の特徴から伝わる意味について理解しよう。	植物と動物の細胞のそれぞれの特徴を見出し、その生活の仕方と結び付けてとらえることができる。	身近な細胞の観察・スケッチを通して、観察結果をまとめ、発表することができる。 適切なプレパラートを作成し、細胞つくりを正確に調べることができる。 細胞の観察やスケッチの仕方及びそのまとめ方についてわかっていて、説明することができる。 植物と動物の細胞のつくりがわかっていて、その共通点や相違点について、説明することができる。	教科書「植物と動物の細胞のつくり」の基礎	植物と動物の細胞のそれぞれの特徴を見出すことができる。	身近な植物の観察・スケッチを行なうことができる。 プレパラートを用いて、細胞を観察することができる。 細胞の観察やスケッチの仕方、及びそのまとめ方についてわかっていて、説明することができる。 植物と動物の細胞のつくりがわかっていて、説明することができる。	教科書 P28~32 ワーク P62~63 ワークシートを振り返る。										
		扶⑧								生物の成長の仕方と細胞分裂のはたらきを関連付け、身のまわりの現象と結び付けてとらえることができる。	細胞分裂を観察するために適切なプレパラートを作成し、正確に調べることができる。 細胞分裂についてわかっていて、図を用いて説明することができる。 染色体についてわかっていて、説明することができる。 遺伝と遺伝子、形質、染色体の関わりについてわかっていて、説明することができる。	教科書「細胞の分裂」の再実験	生物の成長の仕方と細胞分裂のはたらきを、関連付けてとらえることができる。 染色体についてわかっていて、説明することができる。 遺伝と遺伝子、染色体の関わりについてわかっていて、説明することができる。	教科書 P33~37 ワーク P62~63 ワークシートを振り返る。					
		知⑩													有性生殖と無性生殖の特徴を見分け出し、それぞれの生活環境と結びつけ、繁殖の視点からとらえることができる。	無性生殖や有性生殖について正確に調べ、まとめることができる。 花粉管の伸張を時間を通して観察・記録し、まとめることができる。 単細胞生物と多細胞生物の違いがわかっていて、説明することができる。 無性生殖の特徴がわかっていて、説明することができる。 動物、植物の有性生殖についてわかっていて、説明することができる。 減数分裂についてわかっていて、説明することができる。	教科書「花粉管の伸び」の再実験	有性生殖と無性生殖の特徴を見分け出すことができる。 単細胞生物と多細胞生物の違いがわかっていて、説明することができる。 無性生殖の特徴がわかっていて、説明することができる。 動物、植物の有性生殖についてわかっていて、説明することができる。 減数分裂についてわかっていて、説明することができる。	教科書 P38~46 ワーク P64~65 ワークシートを振り返る。
		知⑪																	

III 研究の内容

先に行われた教育課程実施状況調査でも明らかになったように、本校でも理科の学習において、観察や実験における目的意識をしっかりと持たずに受動的になっている様子が見られた。観察・実験の結果から考察をしっかりと書けない生徒が少なくないということでもある。これは、結果と考察の区別をしっかりとつけることができない、すなわち論理的な思考力が十分に育っていないことに大きな要因があると考えられる。このことは、科学的な思考に関わる意欲の低下をももたらすと思われる。すなわち、論理的な思考力を高めることで、科学的な思考力も高まるだけでなく、それに関わる関心・意欲・態度も高まっていくと考えた。

1. 論理的な思考力の背景

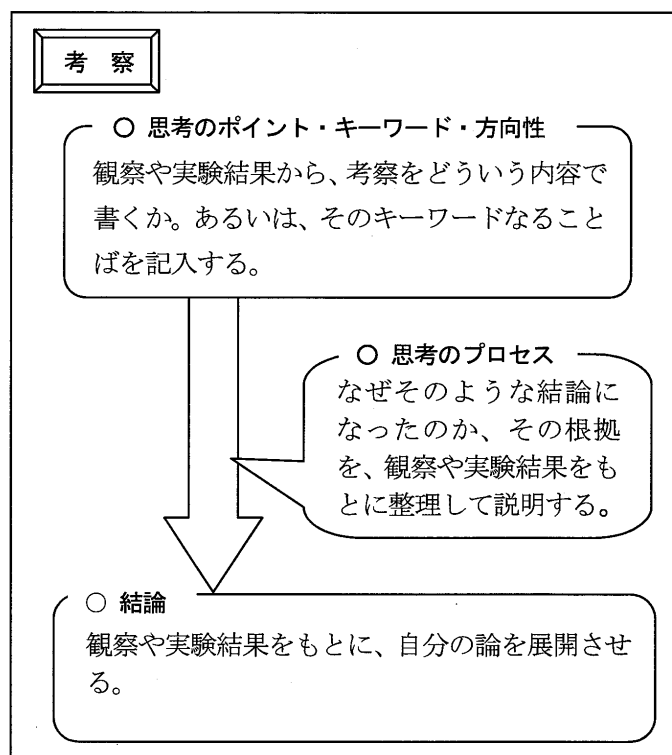
先に大学入試センターが国立大学学部長に行った調査では、学力の課題として、主体的に課題に取り組む意欲、論理的な思考力・表現力をあげており、対策としては、高校以下の教育で論理的な思考力や表現力などの基礎的な能力を身に付けることが重要であるとしている。また、企業に対して行った調査でも、ビジネスの基礎・基本能力として今後必要となるものとして、問題発見能力、論理的な思考力、行動力・実行力などを上位にあげている。これらからも、論理的な思考力の育成が今、求められていることは言うまでもない。

また、ピアジェの認知発達段階から見ると、11歳以後の形式的操作期に入ると、具体的な思考から抽象的な思考への変化が可能となる。これは事物や事象から共通性や同一性などを導き出した後、一般的で普遍的な命題を引き出すという論理的な操作が可能となる段階であることを示している。このことは、12, 3歳である中学校1年生のこの時期から論理的な思考力を継続的に高めていくことが、非常に重要であることを示

している。

2. ワークシートの開発

論理的な思考力を高めるためには、観察・実験の結果から考察を行う過程で、論理的な思考を意識させることが重要であると考えた。そこで、ワークシートを用いて、観察・実験の結果、結論、根拠の関係を意識させることで、論理的な思考を高めていくこととした。ワークシート中で文章にすることすなわち表現することで、頭の中ではおぼろげであった思考をより明確にさせることもできる。これは、自分の思考を客観的に振り返ることにもなる。そこで考察を、右図にあるように、「思考のポイント・キーワード・方向性」、「結論」と「思考のプロセス」(根拠)に分けて考え、表現させた。このように3段階に分けて考え・表現させることで、自分の考えを整理・表現しやすくなるだけでなく、自然と論理的な思考を意識させることが可能となる。



3. 科学的な思考に関わる学ぼうとする力(関心・意欲・態度)へのはたらきかけ

「学ぼうとする力」すなわち「関心・意欲・態度」が授業において重要であることは言うまでもなく、学習における原動力ともいえる。また関心・意欲・態度の観点、他の3観点(科学的な思考、技能・表現、知識・理解)との関連が深く、単独で見取ることは難しい。そこで、問題解決的な理科の学習での中心的な目標となる、科学的な思考に関わる関心・意欲・態度へのはたらきかけについて考えてみた。観察・実験の結果から考察を行う過程で、科学的な思考に関わる関心・意欲・態度は大きくその活動を左右する。当初、論理的な思考力の育成からも、ワークシートにおける考察を、「結論」と「思考のプロセス」(根拠)に分けて考え、表現することで、観察や実験の結果からスムーズに思考を展開できるのではないかと考え、試みた。ところが、生徒の活動の様子から、科学的な思考に関わる学ぼうとする力(関心・意欲・態度)について調べてみると、その結果として、「何を書いていいのかわからない、思いつかない」などの意見が多く見られた。これは、観察・実験の結果が十分に、自分のものとしてつかめていないことが大きな要因ではないかと考え、「思考のポイント・キーワード・方向性」を「結果」から「考察」への過程で新たに意識させることが重要ではないかと考えた。

さらに限られた時間内で、観察・実験の結果を十分に、自分のものとしてしっかりつかむためには、自分が得たものを「表現」し、他と「共有化」することが大切である。このように共有化を図ることで次の過程である「思考のポイント・キーワード・方向性」への展開をスムーズにさせることができるのではないかと考えた。具体的には、各グループの結果を他の班のメンバーと確認するという学習形態を形成することで、観察・実験の結果を共有化でき、より深く認識することができる。これにより、各自の学びへの「意識」と「自覚」を高め、学ぼうとする力が高まっていくものと思われる。

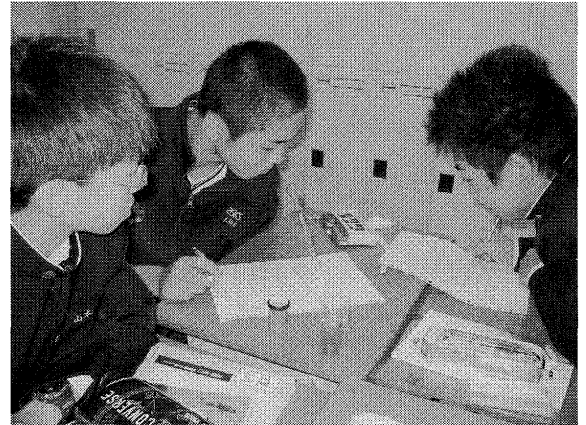
IV 実践例

1. 題材名

「運動とエネルギー」

2. 実践の概要

「斜面を下る物体の運動」を調べる実験において、結果のみをワークシートに整理するだけでなく、その結果から「思考のポイント・キーワード・方向性」、「結論」と「思考のプロセス」(根拠)に分けて記述させた。また、ワークシートへの記入の前に、各グループの結果を他のメンバーと確認させることで、表現・共有化させた。



実験結果を表現・共有化している様子

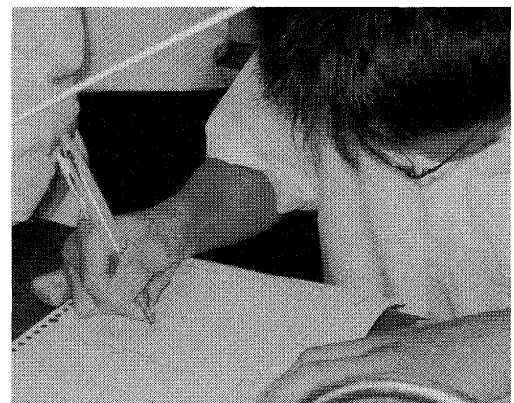
3. 指導計画 (21時間扱い)

学習内容	指導目標	時間
いろいろな運動について	・様々な運動の様子から、その特徴について気づかせる。	3
運動の速さについて	・速さと移動距離について理解させる。	2
運動と力について	・加速する運動とはたらく力について理解させる。 ・減速する運動とはたらく力について理解させる。 ・等速直線運動について理解させる。 ・慣性の法則について理解させる。 ・2つの物体間での力のはたらき合いについて理解させる。	5 本時 (1/5)
エネルギーの変換と保存について	・位置エネルギーと運動エネルギーの変換、力学的エネルギーの保存について理解させる。 ・様々なエネルギーについて理解させる。	4
化学変化とエネルギーについて	・化学変化と熱エネルギーの関係について理解させる。 ・化学変化と電気エネルギーの関係について理解させる。	5
発展的・補充的な学習	・単元学習を振り返り、基礎・基本の定着を図るとともに、より発展的な学習へと高めさせる。	2

4. 実践の成果

この実践を通して次のような成果が見られた。

(1)論理的な思考を意識させるようなワークシートを行うことで、論理的な思考力が高められるだけでなく、観察・実験を行っている段階から、考察すなわち「思考のポイント・キーワード・方向性」や「結論」までを意識するようになってきている様子が見られた。これは観察・実験を常に主体的に取り組もうとしている表れであり、まさしく今、求められている姿である。このような学習過程を経験して



ワークシートを記入している様子

いくことで、理科の目標である科学的な見方・考え方を養っていくことができると思われる。

(2)論理的な思考は、集団活動を通して養成され身につけていくと言われているように、観察・実験の結果を表現・共有させることで、内発的・外発的動機づけが感化される。自らの学びへの振り返りの時間を得ることで、学びへの「意識」と「自覚」が高まり、思考の深まりを促すことができる。論理的な思考力の高まりは、自分を客観的に見ることでもある。これは、他と自己との関わりを見ていくことでもある。常に自己の学習を振り返ることで、自己評価能力が高まり、自己教育力の育成へと結びついていくと思われる。

V おわりに

私たちの身のまわりでは、情報量も加速度的に増え、変化と多様化の激しい情報化社会の中で、自らの判断で情報を分析、選択していかなければならない。すなわち自ら考え、行動していくことが求められている。その中で、様々な問題を解決していく過程では、理科教育が担うところは大きく、その中で論理的な思考力は重要となる。

今回、思考を「記述」させるという形で論理的思考力を客観的に目に見える形で鍛え、育成していこうとした。論理的な思考を高めていくには、自らの主体的な活動が大切であり、これからは、生徒が主体的に取り組んでいけるよう問題解決型の授業において、帰納的推論と演繹的推論とのバランスをとりながら学習に取り入れていくことが大切である。

論理的な思考力の育成においては、今年度始めたばかりであり、これからも継続的な探究を進めながら検証していきたい。

考察

○ 思考のポイント・キーワード・方向性
台車にはたらく力と速さの関係。

↓

○ 思考のプロセス (なぜそのような結論になったのか、
頭の中を整理して説明しよう)

① Nが大きくなると速さが速くなっているから
② テープの点と点の間の長さも計っていくと
時間がたつ(距離がのびていく)い
つれて、点と点の間隔が広くなるから

↓

結論

① N (斜面方向にはたらく力)が大きければ、速さを
比例して大きくなる。
② 斜面を下る場合下れば下るほど、どんどんスピードが、
上がる。
坂をくだるだけじゃなくスピードが上がると、
垂直に落下してくる物体もスピードが上がると、
だから低い所から落ちたスピードはまたおそいから
はたらく力は弱いから、そのすぐ高いところから落ちれば、
そのすぐいスピードで地面にぶつかるので、体が
はたらく力にたすられなくちゃぐちゃになって死んでしまう。
宇宙から落ちる隕石が、空気のおかげで止まらないうちは、
速度が速く空気のおかげが大きくなるからたすらぬと思う。
つまりスピードを遅くせば、空気のおかげが減り、
燃え尽きないで地球上を出入りできるんじゃないかと考えた。

ワークシート

(文責 辰巳 哲治)

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省 『「教育の構造改革」画一と受身から自立と創造へ』 (2003)
- 2) 文部科学省 『科学技術・理科大好きプラン』 (2004)
- 3) 国立政策研究所 『教育課程実施調査報告書』 (2003)
- 4) 文部科学省 『中央教育審議会答申』 (2003)
- 5) 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
『平成12、13年度研究紀要 確かな学びと、「生きる力」の育成を目指して』 (2002、2003)
- 6) 村重和 秋山幹雄 編 『理科 重要用語 300 の基礎知識』 (明治図書 2000)
- 7) 益田 裕充 『理科教育の責任』 (東洋館出版社 2003)
- 8) 小林公夫 『論理的思考の鍛え方』 (講談社現代新書 2004)

自己実現をめざし、自ら"音楽する"生徒の育成

～音楽科における「学ぼうとする力」とは～

附属函館中学校 嶋 田 歩

I はじめに

作曲家の三善晃氏は「教育展望」の2004年6月号の巻頭言で、母国語に結び付いた「心」という能力と題し、『生後二日目の新生児が、母国語の発音、語調などを「知っている」。これは、「心」というものが、「生まれ」に結び付いた能力として在ることを、物語ってはいしまいか。教育を考えると、このことは重要な視点ではないか。』と述べている。これは、心の教育の重要性が学校教育の課題として叫ばれていることに鑑みて、改めて音楽科のあり方についても考えさせられる言葉である。昨今、生徒のまわりには、好むと好まざるに関わらず、様々な音や音楽が氾濫している。それゆえに、義務教育において、それらの中から、自分にとってどんな音や音楽が生涯に渡って親しんでいくきっかけとしてなり得るのかを主体的に見極めていく力を育てていくことが大切となってくる。そして、音や音楽が自分の心や生活とどのような関わりをもたらすのかということを実体験させることが音楽科の役割として重要になってくるのではなかろうか。そのためにも、本科の目標に、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」とあるように、情意面の起点となり得るような様々な音楽活動を系統的に整理して体験させることが必要である。また、それによって獲得された音や音楽に対する内的リソース、すなわち「学んだ力」を用いて、主体的に聴いたり、歌ったり、楽器を演奏するといった学習活動を行う場面を授業の中でどう組み立て、それらをいかに保障していくかということが求められよう。そして、これらの積み重ねが音楽科の目標の具現化につながっていくものであり、生徒の音楽への関心・意欲・態度、すなわち「学ぼうとする力」を培っていくものと考えられる。

II 研究の経過

前年度は、研究主題「自己実現をめざし、自ら“音楽する”生徒の育成」、副主題「音楽科における発展的・補足的な学習のあり方」のもと、音楽科における「確かな学力」のとらえと自己実現とのかかわり、また、学び方としての発展的・補足的な学習のあり方について研究実践してきた。この実践を通して、本校がとらえる生徒の「確かな学力」を支える3つの要素である「学んだ力」「学び方の理解と実践」「学ぼうとする力」を有機的に関連づけるために、本科では、さまざまな音楽活動を体験させること、授業の中で生徒が主体的に自己実現できる場を保障していくことの大切さ等が確かめられた。すなわち、単位時間における自己実現のスマールステップで得られた充実感や成就感が、次のステップへのエネルギーとなり、「学ぼうとする力」が育まれることで、広義の意味での自己実現、つまり、生徒自らの中に生涯にわたって音楽を愛好しようとする心情や豊かな情操が培われていくことに結びついていくものと考えたのである。今年度は、これら前年度の研究を踏まえ、研究主題「自己実現をめざし、自ら“音楽する”生徒の育成」を継続し、副主題は「音楽科における『学ぼうとする力』とは」とした。

Ⅲ 研究の内容

1. 音楽科における「学ぼうとする力」

具体的に音楽科では、「確かな学力」を支える3つの要素の1つである「学ぼうとする力」を以下のようにとらえなおした。

『学ぼうとする力』

・学習を通して得られた成就感、満足感といった自己実現のスマールステップを、次の学習へのエネルギーの源として、自己の感受力、思考力、判断力、表現力などを最大限に発揮して、音楽の美しさとは何かを求めようとする心の働きや、音楽活動の基礎的な能力を伸長させようとする意欲や態度。

この「学ぼうとする力」は、学ぶ意欲を喚起持続させ、主体的に学ぶ態度にまで高める、育てるべき学力の1つの要素である。それら育てるべき学力の目標は、いうまでもなく学習指導要領に示されている情意面に関する目標から設定される。第1学年の目標(1)では、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を養い、音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる」ことが、第2学年及び第3学年の目標の(1)では、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」とある。ここで求められているのは、まず、生徒が主体的に楽しく音楽とかかわるということであろう。しかも、その「楽しさ」とは、短絡的な「楽しさ」ではなく、音楽の構造的側面を知覚し、感性的側面を感じ取ることによって得られる、より深まった「楽しさ」をさす。そして、それら音楽活動の楽しさを体験することで導かれるであろう音や音楽への興味・関心が第1学年では養われ、第2学年及び第3学年で高められた上で情意面の基盤となり、義務教育の最終段階として、生涯にわたって楽しく音楽とかかわっていくことのできる態度を培うというところに集約されていくものととらえている。

さて、「学ぼうとする力」を育む上で大切なことのひとつに、生徒の内面にある「知りたい」、「わかりたい」、「～になりたい」といった知的欲求に大きくはたらきかけるための課題や教材の選択・提示の工夫などを、学習過程に意図的に位置づけることがある。これらを通して、生徒が自ら「～してみよう」という気持ちに変化し、自己の感受力、思考力、判断力、表現力などを最大限に発揮しようとして課題を解決しようとする「学ぼうとする力」が内面から引き出される状態に導くことが大切である。そのような状態こそが、生徒の主体的な音楽への関わりそのものであり、そこから得られる成就感、満足感といった自己実現のスマールステップが、次の学習へ向かうエネルギーの源となり、音楽の美しさとは何かを求めようとする心の働きや、音楽活動の基礎的な能力を伸長させようとする意欲や態度を育まれていくものと考えた。

2. 音楽科における「学ぼうとする力」をはぐくむためのアプローチ

前述した「学ぼうとする力」をはぐくむためには、様々なスパンでのアプローチが必要となる。具体的には長期的なアプローチ、短期的なアプローチ、単位時間のアプローチで学習活動を構築していく。長期的なアプローチは、長期的な指導内容の検討や指導計画の作成をさす。ここでは、生徒の発達段階の特性に応じた題材の配列、教材の厳選を含め、「いつ、どのような力を、どのような手だてで育てるのか」といった3年間の見通しをもって、教材の系統性や階層性に着目した年間指導計画の作成にあたった。短期的なアプローチは、題材内容の構造化や教材の選定と配列、題材計画の作成などの題材レベルでの指導計画の作成である。ここでは、まず、題材ごとにおさえるべき指導内容の中核である基礎的・基本的内容をあきらかにした上で、題材の評価規準をもとに、より具体的に「どの場面で何をどのように見取るか」といった評価プランを念頭に入れた授業設計を心がけた。さらに、設定した到達基準から、生徒一人一人の学習に対する力を高めるた

めの具体的な手だてやどのような学習内容をもって発展的な学習や補充的な学習とするのかを記述した表(ステップアップカード, 以下SUカード)を活用し, 教師・生徒の自己評価と教育課程の改善にあたった。

単位時間のアプローチは, 1 単位時間や小さなまとまりごとでの学習のねらいを達成するために有効にはたらく教師の指導技術をさし, ここでは, 指導と評価の一体化を図りつつ, 単位時間における学習のねらいの具現化に伴う生徒の学習活動に対する個に応じたフィードバック機能と, 生徒の関心・意欲・態度の変容の状態や要因を捉えるべく自己評価表の内容の工夫を試みた。これらのさまざまなアプローチが相互に機能していくことにより, 「学ぼうとする力」が育まれていくものと考えた。

3. 「学ぼうとする力」をはぐくむための3つの関わり

(1) 「学ぶ対象」との関わり

自分が「知りたい」、「わかりたい」、「～になりたい」といった興味や関心を持った物事についてより深く知ろうとするなどの情意面の育成を図ることが, 「学ぶ対象」への関わりである。ここでは, 驚き, 疑問, 矛盾といった感情をもたせる教材の開発が中心となる。この「学ぶ対象」としてなり得る教材は, ①有意味な学びとなること②様々な視点で考えられること③解決方法の方向性が見えることがバランスよく備えられていることがもとめられる。ここでは言うまでもなく, 学習指導要領に照らして, 音楽の学習活動が多様な展開となるために, その題材に適した表現教材および鑑賞教材を選ぶこととなる。しかし, どんなに素晴らしい教材であっても, 指導者が教材としての捉え方やアプローチの仕方を間違ってしまうと単なる楽曲指導で終わってしまい, この「学ぶ対象」にはなり得なくなってしまう。したがって, ここで十分に留意しなければならないことは, 教材として選んだ音楽を多面的に分析することであり, その題材の中で, その教材曲を媒介として, 音楽の何をどのように学習させるのかという明確な指導目標をもち, より具体的な授業構想のもと単位時間の中心観点を明確にすることである。

(2)他との関わり

他との関わりは, 学習形態の工夫と評価活動であり, 本科の目標にある「音楽に対する感性を豊かにし, 音楽活動の基礎的な能力を伸ばし」の部分において, 教科としての特性とも深く関連しているところである。具体的には, 音楽の豊かさや美しさに対する感性, すなわち一人一人の感じ方を互いに交流し, 共有することによって, 自分の感じ方が深化するとともに, 新たな感じ方が自己の内に促されること。また, 音楽を形作っている諸要素を感受する能力を高めるために, グループやペアといった学習形態で学び合う活動を通して, 学習に対する目的や問題解決への意識

2年 組 番 氏 名

音楽とイメージII

○ 学習のポイント
 ・曲を聴いて, それぞれの曲のイメージや音楽の特徴をつかもう。
 ・オーケストラや合唱がつくり出す, 豊かな響きを楽しもう。

ホルスト作曲
 ○ 組曲「惑星」から
 組曲「惑星」は, ホルストが占星術(星占い)にヒントを得て作曲した, 「火星」「金星」「水星」「木星」「土星」「天王星」「海王星」の全7曲からなる組曲です。(作曲された当時, 「冥王星」は発見されていませんでした。)演奏は大規模なオーケストラで行われます。

● これから, この組曲「惑星」から3曲(初めの部分)を聴取します。それぞれ浮かんできた曲のイメージや音楽の特徴をまとめてながら, どの星か, あててみましょう。

ヒント: それぞれ占星術によるサブタイトルがついていますよ!
 A 鉄塔をもたらすもの B 神秘なるもの C 戦争をもたらすもの
 ※ただし, 順番は…。

例えば, 明るい, 輝い, 暖かい, 冷たい, 静やか, 不安, 悲壮, 星原など

曲のイメージ	音楽の特徴	星A	星B	星C
①		()星 A・B・C	()星 A・B・C	()星 A・B・C
②		()星 A・B・C	()星 A・B・C	()星 A・B・C
③		()星 A・B・C	()星 A・B・C	()星 A・B・C

【授業を終えて】あてはまるものに○をつけよう。
 A かなり, イメージが浮かんだし, 音楽の特徴もつかめたので, すごく楽しく鑑賞できた。
 B まあまあ, イメージが浮かんできたし, 音楽の特徴もつかめたので, 楽しく鑑賞できた。
 C どちらかというとイメージが浮かんでこなかったし, 音楽の特徴もつかめなかったのでも, 楽しく鑑賞できなかった。
 D 全然イメージが浮かんでこなかったし, 音楽の特徴もつかめなかったのでも, 楽しく鑑賞できなかった。

「鑑賞の能力」を中心観点としたワークシートの例



学び合いの様子

を共通認識した上で、交流し追究を深めていくこと。これらを通して共に高め合っているという満足感や成就感が得られるとともに、自分の感受力・思考力・判断力・表現力などの深化や他との関わりの深化もなされるということである。この自らの学びに生かす学び合いの学習の一方策として本科では、授業内容に応じてグループ活動やペア活動などの学習形態を工夫することや、課題追究のために主体的にコースを選択しグループ学習に取り組ませる三線型を基本としたローテーション型などを取り入れている。これらは、いずれも生徒が互いに主体性を生かしながら多様な学習活動ができる学習形態を進めていこうとするものである。

(3)自己との関わり

自己との関わりは、学習への意識化と評価活動とが核となる。ここでは、中心観点と関わる関心・意欲・態度を高めるためのワークシートの工夫と自己評価カードの工夫を行った。「学ぼうとする力」すなわち関心・意欲・態度の観点は、他の3観点との関連が深いので、単独で見るとは難しいと考えられる。そこで、単位時間で高めさせたい、中心となる観点を明確にし、その関わりから、関心・意欲・態度を見取るとともに、高めるための工夫を行うように心がけた。例えば、「音楽的な感受や表現の工夫」を中心観点とした場合、生徒の表現の工夫に関する思考がどのようになされているのかに着目した。それには、まず、自分なりの考えを持とうとしているかどうか、それが意見交流という他との関わりを経て、どのように広がりや深まりをみせたかといった思考の変容の過程から関心・意欲・態度を見取れるような工夫を試みた。

【3 段目】みずばしょうのはなが さいている ゆめみてさいている みずのほとり		
<p>自分の考え 花のかわいらしさを表現するために、PPを使っている。 みずのほとりは風で水面がゆらゆらゆれている感じがdim.とえさまで表している。</p>	<p>交流から得られた考え はくろでスタートしている みずばしょうのかいらいかんじを思いつく。 はくろたんたくさんごを思いつけている</p>	<p>全体から得られた考え 体質がきれいさを表現している ほとりの静けさ 夢中で花を見ている 夢に出てくるくらい美しい花が一面に広がる よみを残す 清らかなささる</p>
【4 段目】しゃくなげいろに なそがれる はるかなおせ とおいそら		
<p>自分の考え しゃくなげいろ〜がPは、後半の「はるかな〜」が盛り上がるために、その差がわかるようにしたと思う。また、落ちついて静かななそがれていく、もうすぐ夜に変わっていくことを、はくろの記号で表している。</p>	<p>交流から得られた考え はくろ〜の記号で長く花畑の風景も思い出している感じ はくろで静かななそがれている感じが思いついている</p>	<p>全体から得られた考え なつかしい感じ くり返しているところ 思いついたところ 短い美しさを表す また見たい、という思い 落ちついた感じが植木をアパレルを閉じていく感じ</p>

思考の変容の過程から関心・意欲・態度を見取ろうとしたワークシートの例

また、自己評価については、学習している内容と自分との関わりや学習している自分と他との関わりから、自己はどのような状態であるかをとらえさせるために、SUカードを活用し、その授業で高めさせたい観点の内容を具体的に生徒に把握させた。また、それに対する関心・意欲・態度を4段階でMusic check sheet (自己評価表)に授業の初めと終わりに記録させ、さらに、授業の終わりには、自己の学習の振り返りを記述させるなどの工夫を試みた。これら短期的なスパンの積み重ねが、中・長期的にも生徒の「学ぼうとする力」の育成に役立つのではないかと考える。なお、このチェックシートは、SUカードとのリンクを

考えて、SU カードの裏に印刷している。これは、自己評価の際に、生徒が総合的にその題材や単位時間で自分の学習の軌跡を振り返ることができるようにしているものである。

<Music Check Sheet>

日付	① 題材名 ② 学習目標	関心・意欲・態度		授業を終えて（身についたこと、わかったこと and 授業の初めと終わりでの変化、次時の目標、 疑問、質問、感想など）
		授業の初め	授業の終わり	
/		4・3・2・1	4・3・2・1	

「次の時間（題材）では～したい」といった次のステップにつながる決意表明を書くように指導

単位時間における状況（授業への参加状況、向上・成長の状況、自分自身の全体的あり方等のさまざまな評価側面から）を記述

4. 「学ぼうとする力」の見取り方

(1) Music Check Sheet（自己評価表）からの見取り

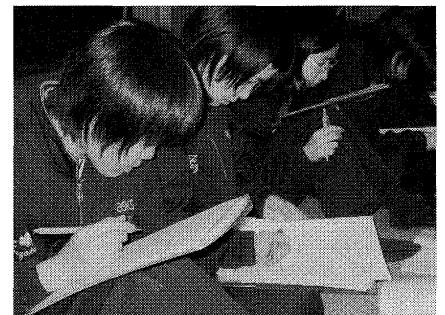
単位時間の「学ぼうとする力」すなわち関心・意欲・態度を見取るために、前述した Music Check Sheet（以下MCシート）を使い、生徒の記述内容と授業の始めと終わりでの関心・意欲・態度の数字の変化に留意している。また、数字に変化があった場合は、何がプラス・マイナスの要因となったのかを見取るように努めている。加えて、できるだけ生徒の記述に対してコメントを添えて返却している。

(2) 観察からの見取り

観察にあたっては、授業の構想の段階で、あらかじめ観察する生徒の数を特定し、具体的な基準となる様相を想定しておくことで、観察の精度を高めることができる。また、普段の授業から、生徒に教師の方をしっかり見て歌うように指導しておくことにより、生徒とアイコンタクトをかわしながら、必要に応じて、即時的なフィードバック（例えば、口の開け方、表情等が理想的なものであり、意欲的な歌唱の様相であれば、うなずきを本人に返し、消極的な歌唱の様相であれば本人を凝視し、注意を促す）をするように心がけた。いずれにしても、単位時間だけではなく、題材ごとや学期ごとといった様々なスパンで、中心観点ごとに集積された観察結果を総合して、関心・意欲・態度を見取っていくことが大切と考える。

(3) ワークシート（記述）からの見取り

ワークシート（記述）からの見取りは、単位時間の関心・意欲・態度の中心観点を軸に行う。具体的には、学習過程（グループや全体といった他との関わり）を経て、どのように変容したのかを見取るためにワークシートの工夫をし、その記入状況から見取っていく。ここで留意しなければならないのは、国語力、つまり語彙が豊かで文章記述に優れている生徒は記述量が多くなるのが起こりうることであり、そのような力を問うのではなく、あくまでも自らを変えよう、変わろうとしている様子などが、うかがえるような箇所を見取ろうと努めることである。



ワークシートへの記入の様子

IV 実践例

1. 題材名「音楽のしくみ」(2年生)

教材・「夏の思い出」(江間章子作詞/中田喜直作曲)

- ・「踊る少女」(武鹿悦子作詞/作曲者不明, 梶山三郎編曲)
- ・「もみじ」(高野辰之作詞, 岡野貞一作曲, 関谷涼編曲)
- ・「小フーガト短調」(J.S.バッハ作曲)

2. 題材について

本題材では、1年で学習した音楽を特徴づける要素(旋律・調・音色・速度・形式・拍子・強弱・リズム・音と音とのかかわり合いなど)と前題材「音楽とイメージ」で学習した音楽とイメージとのかかわり合いをふまえ、教材「夏の思い出」を用いて、情景を想像し、歌詞のまとまりと旋律の結びつきや諸記号の意味を学習させ、それらを生かした表現の工夫をさせる。また、教材「踊る少女」・「もみじ」では、各声部の特徴や役割を感じ取らせるとともに、かけ合いの楽しさを表現させ、声部の役割を理解させる。さらに教材「小フーガト短調」では、複数の旋律が巧みにかかわり合う多声音楽の魅力味わわせるとともに、パイプオルガンの音色や響きにも親しませていくなど、表現と鑑賞の関連を図りながら、音楽の感性的な側面と構造的な側面の関わりから、音楽のしくみについて学習させていく。

3 最終目標

- (1) 音楽を特徴づける諸要素の関わり合いに関心をもたせ、主体的に表現や鑑賞に取り組ませる。
… (音楽への関心・意欲・態度)
- (2) 旋律の流れや声部の役割を感じ取らせ、それらを生かした表現の工夫をさせる。
… (音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 感じ取った旋律の流れや声部の役割を、諸記号やかけ合いの楽しさを生かして表現させる。
… (表現の技能)
- (4) 多声音楽やパイプオルガンの音色・響きの魅力を味わわせながら聴かせる。
… (鑑賞の能力)

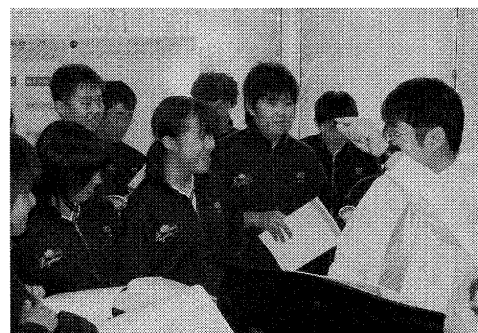
4. 指導計画

学 習 内 容	指 導 目 標	評 価 方 法	時 間
旋律の流れ 「夏の思い出」	・歌詞のまとまりと旋律の結びつき、諸記号の意味を学習させ、それらを生かした表現の工夫をさせる。	MCシート, 観察, SUカード, ワークシート	3 (2/3)
声部の役割 「踊る少女」「もみじ」	・各声部の特徴や役割を感じ取らせ、かけ合いの楽しさを表現させる。		1
多声音楽・パイプオルガンの魅力「小フーガト短調」	・多声音楽の魅力味わわせ、パイプオルガンの音色や響きに親しませる。		1
発展的・補充的な学習	・課題に取り組ませ、SUカードで総括的評価をさせる。		1

5. 本時案

(1) 学習目標

- 歌詞のまとまりと旋律の結びつきや諸記号とのかかわりに関心を持ち、意欲的に歌唱したり、表現



の工夫を考えたりしようとする。(音楽への関心・意欲・態度)

- 歌詞と諸記号のかかわりや旋律の流れから、曲にふさわしい表現の工夫を考えることができる。

(音楽的な感受・表現の工夫)

- 諸記号を生かして、曲にふさわしい表現をすることができる。(表現の技能)

(2)学習の展開 本時 (2/6時間)

学習活動	教師の働きかけ	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習内容を振り返り、「夏の思い出」を斉唱する。 ・本時の学習目標の把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習内容を振り返らせ、全体で「夏の思い出」を斉唱させる。 【観察評価】 	<ul style="list-style-type: none"> ・休符、発音、鼻濁音、ブレスの位置に気を付けさせる。 ・意欲を喚起させる言葉かけ。 ・本時の学習の見通しをもたせる。
<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>さまざまな記号の意味を理解し、歌詞とのかかわりを考えて、表現の工夫に生かそう</p> </div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・MCシートに目標等を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・MCシートの記入状況を挙手させ、確認する。【自己評価】 	
<ul style="list-style-type: none"> ・諸記号について、ワークシートにまとめる。 ・表現の工夫について、各自ワークシートの課題に取り組む。 ・各自が考えた表現の工夫について、交流する。 ・全体で、各段ごとの表現の工夫について、まとめる。 ・表現の工夫を意識して斉唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートへの記入を指示し、諸記号を確認させる。 ・各自、ワークシートの課題に取り組ませる。【観察評価】 ・各自が考えた表現の工夫について、グループで交流させる。 【観察評価】 ・各段ごとに、表現の工夫について発表させ、まとめていく。 ・まとめた表現の工夫を意識して斉唱させ、授業の冒頭の斉唱と比べさせる。 【観察評価】 	<ul style="list-style-type: none"> ・確認時に、パワーポイント使用する。 ・補助プリントを用意し、活用させる。 ・交流できない生徒がでないように配慮する。 ・積極的な発言を促すとともに、発言に共感する言葉かけ。 ・自分たちの表現に変化があったかを確認させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・次時の予告を聞く。 ・自己評価をし、本時のまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時は、より曲にふさわしい表現となるように練習していくことを告げる。 ・MCシートに本時の学習の振り返りを記入させる。【自己評価】 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時につながる言葉かけをする。 ・記入状況を挙手させ確認する。

6. 実践を終えて

授業後の研究協議の中で、以下のような意見が出された。

- 観察とシートを上手に使っていて、見取りやすかったのがよかった。生徒にもポイントが伝わり、互いのよさを認めたり、助け合ったりしやすいのがよかった。
- AとCを中心に観察評価する形でよいのではないだろうか。全体と個別をどのように評価していくのが大切。全体の反応(挙手、起立、返答など)を見ての評価と個別の評価のあり方が課題であり、指導内容との関わりがポイントであろう。

- それぞれの意見を交流した後に、自分の意見にフィードバックすると、もっと自分の考えもふくらむであろう。
- ワークシートに書く時間が多いと、「いっぱい歌った」という歌う時間が少なくなってしまう。どこかで「いっぱい歌った」「満足した」と思える時間が必要である。
- 丁寧に学習の流れに沿って場面を作っており、大変効果的に時にドラマティックに積み上げられていたので、生徒の変容が非常によくあらわれていた。ステップがとてもよく練られたものであることがよくわかるものだった。
- 「自分で調べる」「自分で考える」といった課題は、関心・意欲・態度を見取るのに適している。
- 自己評価と観察評価の組み合わせがとてもよいと感じた。最後の自己評価の交流が次時の関心や意欲を高めている。

今回の授業は、「学ぼうとする力」をはぐくむ3つの関わりから授業を設計し、合わせて関心・意欲・態度をどの場面でもどのように見取っていくのかということを確認にしようと努めた。結果として、関心・意欲・態度を「表現の技能」と「音楽的な感受・表現の工夫」の2つの観点からアプローチしたため、見取りに追われる授業展開になってしまった。本時の目標からすれば、中心観点は、「音楽的な感受・表現の工夫」であり、その観点到絞ったほうが、見取りに余裕が生まれたものと反省している。また、ワークシートの記入状況の観察評価に関してもAとBの見取りの区別がはっきりしていないなど、より具体的な基準を設定する必要性を痛感した。さらに、表現の工夫について考えるところにウェイトをおきすぎたため、ワークシートに考えをまとめ記入している時間や意見を交流しているの時間の方が、歌唱表現する時間より長くなってしまった。授業の初めと終わりで、歌い方に変容があったということは、生徒が主体的に学習に取り組んだ証であり、その意味から考えても、生徒が「学ぼうとする力」を主体的に引き出そうとする場面は、各自が他との関わりによって深化・共有した表現の工夫についての知識を、実際に活用する、すなわち試し・練り上げる活動のところであり、その場面を十分に保障することが、より一層満足感や達成感を高め、自己実現につながっていくものと考えている。

V おわりに

今年度は、「音楽科における『学ぼうとする力』とは」を研究目標に据えて、研究実践を進めてきた。この実践を通して、あらためて、生徒に対して学ぶことの意義付けをきちんとすること、すなわち、学ぶことの意味が見える課題や活動を位置付けすることの大切さを痛感した。今後とも、生徒が獲得した「学んだ力」を活用して、「学ぼうとする力」を高め、自己実現していくための一助となれるように研鑽に努めていきたい。

(文責 嶋田 歩)

<参考・引用文献>

- 1) 『教育展望6月号』教育調査研究所(平成16年)
- 2) 文部省『中学校学習指導要領(平成10年12月) 解説 音楽編』(平成11年)
- 3) 『北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要』(平成15年度)
- 4) 吉富功修 編集『音楽科 重要用語300の基礎知識』明治図書
- 5) 市川伸一 著『学ぶ意欲とスキルを育てる』小学館
- 6) 梶田叡一 著『教育評価〔第2版補訂版〕』有斐閣双書

感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方

附属函館中学校 佐々木 善憲

I はじめに

美術は、人間が心豊かに暮らすために様々な美的要素、造形原理を学び、多様な造形活動を通じて感性、創造性、発想力などを育成するとともに、自分の在り方を考え、将来への自分づくり、人間形成をしていくために必要なものである。目に見える美的造形的な存在だけでなく、自然やものの美しさを感じ、とらえ、考えていく態度、そこから得る感動や考え、美しさを求めようとする心、先人たちが残した文化遺産、すべて人間の意思があって生まれるものである。内発的な刺激や外発的な刺激をもとに、動機づけられ、個人があるいは集団で創ろうとする、自分や他と関わろうとする主体的な意思から生まれてきたのである。

しかし、現代社会の様々な場面において、人間が本来もっている力（人間がもつ資質・能力）が、弱まってきていると指摘されるようになった。自己をプロデュースし、自己実現のために様々な能力を育成することが強く求められるようになったのも、“自分探し”にあえぎ、“自分づくり”が困難な人間が増えてきたからであろう。豊かで便利になりすぎた社会の陰で、自分で“自分”を考え、他を見て“自分”を考え、お互いに理解し合うことなどの方法論さえ求められるようになったことは、嘆かわしいことである。

そして、教育においては、「自ら学び、自ら考える力、主体的に判断する力、感動する心、豊かな人間性の育成」など「生きる力」の育成を目指し、私たちは、この社会に主体的に生きるための人間の資質・能力をいかに育て、高めていくかを見通し、日々実践し、子ども達と共に歩んできた。

このように、一人一人が将来を生きていくための様々な力を身につけ、歩むためには、社会変化の激しい不透明な時代背景の中だからこそ、人間が本来の持っている感性や創造性をより豊かなものとしていく必要があるのではないかと、美術科では考えている。学習指導を通して、子ども一人一人をいかに育てていくべきなのかを明確にししながら、その具現化を目指して研究実践を進めていきたい。

II 研究の概要

1. 研究の経過と内容

平成14年度	「感性・創造性豊かな美術の学習指導と評価のあり方」
平成15・16年度	「感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方」

昨年度は、本校の研究主題「『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成～発展的・補足的な学習はいかにあるべきか～」のもと、美術科のテーマ「感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方」において、美術科における“確かな学力”や“発展的・補足的な学習”について実践してきた。そして、自らの感性・創造性を豊かに育もうとする学習態度、心豊かな生活を創造していく意欲・態度・情操の育成をねらいとして、自己実現できる生徒の育成を目指した。

美術科における発展的・補足的な学習の中で、「確かな学力」を身につけさせ、自己実現を図るためには、

教科の固有性、独自性をもつ基礎・基本の確実な定着を図る、より効果的な学習を目指し、学習指導計画と評価情報の収集の見直しを行った。また、各題材において、学習指導要領から導き出される基礎的・基本的な資質や能力をしっかりとおさえて、育成し、高めていくために、以下を授業改善のための視点とした。

- (1) 基礎・基本を身につけさせる学習指導
- (2) 基礎・基本を「総合的にはたらかせたり、関連させたり、活用できる資質・能力」へと高めていく学習指導
- (3) 限られた題材の授業時数で行える学習指導
- (4) 自己確認・自己評価・自己実現を図れる学習指導

今年度、美術科では、本校の研究主題「『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～」のもと、特に本校の研究副主題について、美術科での学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫を中心として、昨年度に引き続く同テーマ「感性・創造性豊かな美術の学習指導のあり方」を実践してきた。

2. 美術科における「確かな学力」と「学ぼうとする力」について

美術科では、「確かな学力」を次のようにとらえた。

【確かな学力を支える3つの要素】

	学ぼうとする力	学び方の理解と実践	学んだ力
美術	主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、その喜びを味わったり、よさや美しさを感じ取ったり、理解しようとする意欲や態度。その活動に価値意識を持ち、新たな自分の価値をつくりだそうとしたり、求め続けようとする意欲や態度。	①主題に応じて発想、構想し、感性、想像力、美的直感性、視覚的思考力などをはたらかせて、美的、創造的に表現するための資質・能力、技能を育成し、高めていく手だて。 ②生涯にわたって創造活動の喜びを味わったり、美的・造形的表現や美術作品などのよさや美しさなどをとらえたり、考えたりする態度や方法、心情を養う手だて。	表現や鑑賞の学習を通して得られる基礎的知識や表現方法、技能、知識の獲得から育成され、高められる資質・能力をいう。(感性、美的感覚、美的直感性、観察力、発想力、想像力、表現力、視覚的思考力、抽象的思考力、構成力、コミュニケーション能力、審美眼、空間立体の把握力、集中力など)

美術

3. 美術科の「学ぼうとする力」を高めるための3つの関わり

(1) 学ぶ対象との関わり (教材開発の視点)

有意義な学びになること	<ul style="list-style-type: none"> ・美や表現活動に関する学びや心の豊かさを獲得すること (生涯へとつづく感性・創造性・情操の獲得) ・美術は生活と関わって存在していること (生活に生きて働く美術) ・人間・文化尊重と価値感を創出すること (人間の尊重)
様々な視点で考えられること	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な表現方法を用いて創造的に表現すること ・豊かな発想と試行錯誤により、表現すること ・様々な作品の鑑賞と自分の感受性との比較、分析、共有化、深化などにより、感性を活性化し、獲得すること
解決方法の方向性が見えること	<ul style="list-style-type: none"> ・道具や材料の準備と選択、材料操作を学び、計画的に学習すること ・表現方法の理解とその選択により、学習すること ・ワークシートの活用により学習すること

美 3

(2) 「他」との関わり (学習形態の工夫と評価活動)

①一斉・個別などの学習形態から、他の作品や作者の表現方法や考えをとらえ、味わうことで、発想、構想、表現、鑑賞などを共有するとともに自己評価する。

②個別指導のためのワークシートの工夫と自己評価

(3) 自己との関わり (学習への意識化と評価活動) ～ 制作日誌と自己評価、アドバイス

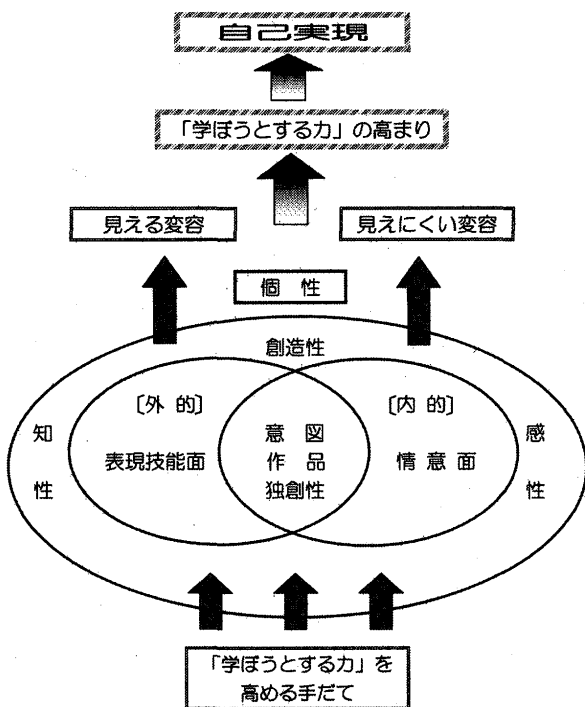
4. 「学ぼうとする力」と自己実現

学習では、学習者のよりよい変容が求められるが、美術では、知識を用いた表現活動、表現技能面として表われる目に“見える変容”、感性や心の内面の“見えにくい変容”があると考えた。さらに、これらの変容がともに包含された、学習の成果としての“作品”の存在を忘れてはならない。

“作品”には、作者の考えや思いが凝縮されているが、そこには表現途中の経過が、色や形、量感、構成などの目に見える外的なもの、作者の思い、表現にいたった理由や意図などのように目に見えにくいものもある。特に、制作途中での作者の表現過程での情意面などは見えにくい。

そこで、「学ぼうとする力」を高めるために、2つの側面からアプローチすること、2つの側面が融合した資質・能力の集合体としての“作品”の制作の過程からのアプローチを行った。また、情意面は、“感性” (心に価値や心情などを読みとる力) にもとづくもの、目に見える表現技能面は、“知性” (表現するための方法、技能、理解、知識等の知的な力) にもとづくものとしてとらえることができよう。“作品”は、作者のこれら2つの側面が融合、総合化されてできた“創造性” (新しい価値をもつものを見いだしたり、作りだしたりする能動的な能力・態度) にもとづくものであり、資質・能力の集合体である。これらはいわゆる“個性”をかたちづくるといえよう。

このように、美術において「学ぼうとする力」を高め、自己実現できる生徒を育成するためには、人間のもつ感性、知性、創造性というベーシックな資質・能力に教師がどのように働きかけ、生徒に関わりを持たせるかが重要になってくる。

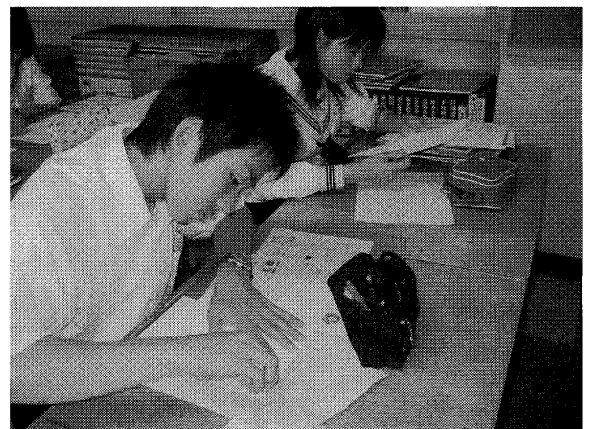


Ⅲ 実践例：「空間構成の不思議」3年生～ 校内授業研より

1. 「学ぼうとする力」(関心・意欲・態度)を高める指導

生徒は、どうすれば表現がうまくいくか、簡単に表現できる方法はないのか、というノウハウを知りたがる。そこで「表現意図」を見直し、表現の構想を明確にすることで、よりよい発想を促し、自己の表現に対し成就感、達成感を高めさせる。

主体的に創造活動に取り組むことが、情意面の活性化につながり、関心・意欲・態度を持続し高めていけるものと考えた。



「学ぼうとする力」を高めるための3つの関わりのうち、特に「学ぶ対象とのかかわり」(教材開発の視点)、「自己との関わり」(学習への意識化と評価活動)に視点を置き、表現技能と情意の2側面から個別指導を軸に、授業実践を行った。

(1) 指導のポイント

【表現技能の側面】

○題材の中に自己決定・自己選択の内容を設定する。

テーマの選択、素材の選択と操作、表現技法の選択など

○構想の確認・見直しによる表現意図の明確化 ～ 自分はどんな表現を行いたいのか

(表現方法の改善のヒント、ポイントの提示) → 表現意図を記述し、生徒自ら確認 (ワークシート)



制作意欲を持続、高める

【情意の側面】

○個別指導による助言、ワークシートや制作日誌に、自己評価、コメントを記入する。

①自分の表現技能面の改善点を理解させ、表現欲求を高める。

②具体的な改善により表現に対する自信を高める。

③表現活動への励ましを心がける。

・頑張った点、成果、努力を認める助言 ～ 「ユニークなアイデアだね」

・表現や技法に関する助言 ～ 「ここをこうすればもっとよくなるよ」

・個性に応じた助言 ～ 「君の場合はここが素晴らしいね」

○価値意識の変容、新たな自分の価値の創出、深化を促す学習経験。

・表現の成就感や達成感による喜び、味わい ～ 「自分にもできた」「やればできる」

・自己理解による表現欲求の高まり～ 「もっと別な表現でやってみたい、違うテーマでつくってみたい」

・自己実現への期待 ～ 「新たな自分をつくりだそう、求め続けよう」「今度も頑張ってみよう」



自主的・主体的な表現への姿勢 (関心・意欲・態度) の表出

【制作日誌の活用と自己評価】

・課題の認知・分析 (内発的動機付け) ・学習の遂行 ・学習の自己評価 ・表現技能への質疑 ・情意面の表出 (表現技能・情意面の 理解、刺激) (評価・見取り) ・自己認識・自己理 解・疑問 ・課題の認知、意欲 化	(授業始め) 自分の学習目標と予定を具体的に記入する。 ↓ (制 作) ↓ (授業終わり) 自分の活動内容や様子・反省・感想を記入する。 自分の疑問点、質問、聞きたいことやコメントなどを記入する。 ↓ (授業後) 教師がコメント、アドバイスを記入する。 ↓ 生徒にフィードバックする。 ↓ 次時への意欲の継続化を図る
---	--

(2) 制作日誌の活用と自己評価～見取りの方法～

【制作日誌の工夫】

- ①質問やアドバイス、その他生徒自身の制作についての表現技能面や情意面の情報を書かせ、教師が短いコメントを添えながら、経過を双方向で確認、助言することから、生徒の授業への関心・意欲・態度を高めていこうとしている。同時に情意面や表現技能面での情報をやりとりする中で、「関心・意欲・態度」の度合いを見取っていく。
- ②制作日誌は、毎時間後見取る。質問・アドバイス欄に、特になければ何も書かないのではなく、一言コメントを書くようにさせる。関心・意欲・態度に関する、特徴的な記述を見取るようにする。

③【自己評価】

計画的、意欲的に授業に取り組み、学習意欲を持続、高めるために、制作日誌を継続的に記入する。

授業毎の学習予定や目標に対し、自分はどうのように学習を進めるのか、単位時間の学習目標と予定を具体的に書く。授業後に制作の様子や感想・反省を記録させ、自分の関心・意欲・態度をとらえさせる。次回において、その様子、反省を確認することから、授業への意欲づけを図っていく。

④題材終了後の記入状況から、総合的に関心・意欲・態度を見取る。

《制作日誌の評価基準》

- A 「制作日誌を具体的に記入して自分の制作過程、授業を振り返っている記述が見られる」
- B 「制作日誌を毎時間分、きちんと記入している」
- C 「制作日誌の記入漏れがあったり、振り返りの具体性が乏しく、大雑把である」

制作日誌《空間表現の不思議》3年A組 番氏名 No.

（自己評価） A：大変良い・よくできた B：良い・できた C：あまりよくない・あまりできない D：よくない・できない		
★今日の学習目標と予定 ※具体的に記入しよう	活動内容の様子・反省・感想	
6/18	全体のバランスも見直し、配色等も考えて、ケント紙に入る。 色をぬる。 ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。	色をぬる。色ぬり終わって、後は細部をきれいにしていくだけ。 活動内容の自己評価 A B C D ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。
6/25	色ぬる。 ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。	色ぬる。色ぬり終わって、後は細部をきれいにしていくだけ。 活動内容の自己評価 A B C D ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。
6/28	色ぬる。 ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。	色ぬる。色ぬり終わって、後は細部をきれいにしていくだけ。 活動内容の自己評価 A B C D ★質問・アドバイスがほしい！ ※表現などに関して、困ったこと、聞きたいことなどを記入しよう。

☆「空間表現の不思議」制作カード【 / 】 A組 番氏名

私の制作意図（発想・構想）を見直し、変化と統一、調和のある構成を描こう。

図法名「一点透視図法」による空間表現	構成
美の秩序	<input type="checkbox"/> リズム <input checked="" type="checkbox"/> リピテーション <input checked="" type="checkbox"/> バランス <input type="checkbox"/> コントラスト
構成美の要素	<input checked="" type="checkbox"/> 形のグラデーション <input type="checkbox"/> コントラスト（形の大小） 形の變化
調和のある配色	<input type="checkbox"/> アクセント <input type="checkbox"/> プロポーション
仕上げる方法	<input type="checkbox"/> ベンによる点描 <input type="checkbox"/> サインペン、マーカー（蛍光色はダメ）
使用する画材	<input type="checkbox"/> 色鉛筆 <input type="checkbox"/> 水彩絵の具 <input type="checkbox"/> 点描と線の具 <input type="checkbox"/> アクリル絵の具 <input type="checkbox"/> その他（ ）

【イメージ・構想の見直し】 ※具体的に見直した点を書こう。こんなイメージで、このように作りたい、など全体の色の感じやバランスを見直した。遠近感をつけたために近くを明るい茶で、遠くを少し暗めの茶で作っていました。

☆「空間表現の不思議」私の作品説明【 / 】

図法名「一点透視図法」による空間表現	構成
美の秩序	<input checked="" type="checkbox"/> リズム <input checked="" type="checkbox"/> リピテーション <input checked="" type="checkbox"/> バランス <input type="checkbox"/> コントラスト
構成美の要素	<input checked="" type="checkbox"/> 形のグラデーション <input type="checkbox"/> コントラスト（形の大小） 形の變化
調和のある配色	<input checked="" type="checkbox"/> アクセント <input type="checkbox"/> プロポーション
仕上げる方法	<input type="checkbox"/> ベンによる点描 <input type="checkbox"/> サインペン、マーカー（蛍光色はダメ）
使用する画材	<input type="checkbox"/> 色鉛筆 <input type="checkbox"/> 水彩絵の具 <input type="checkbox"/> 点描と線の具 <input type="checkbox"/> アクリル絵の具 <input type="checkbox"/> その他（ ）

【作品についての感想・反省】 ※具体的に見直した点と比較し、自分の表現、などがどう変わったのかなどを書く。色ぬり終わって、後は細部をきれいにしていくだけ。活動内容の自己評価 A B C D

2. 成果と課題

- 成果
 - ・制作日誌を活用し、毎時間自己評価を行わせ、コメントさせることで、意欲の継続化を図れた。
 - ・表現技能面からのアプローチは、情意面の活性化へとつながった。表現意図の明確化により、試行錯誤による表現と課題の達成へとつながった。
 - ・表現技能面と情意面は両輪であり、情意面のみからのアプローチだけでは、表現技能に関わる面を高めることはできない。また、単純に技能に関するものの場合も、自分との関わりが存在し、自ら主体性を発揮し関わる必要がある。
 - ・「学ぼうとする力」を高めることにより、学習者の知性、感性、創造性への刺激となり、それらが活性化される。

- 課題 ・生徒自らが、美的発見や工夫をしようとする主体的な学習態度を育てるための工夫。
 ・「できていない」ことへの指導と「できていること」への指導の工夫（言葉がけ、発問）
 ・日誌記入の工夫（的確なアドバイス、コメント）

IV おわりに

今年度、美術科は、「学ぼうとする力」に研究の視座をおき、自己実現と共に感性の豊かさ、創造性の豊かさなど個々の資質・能力を向上させるために実践してきた。その結果、「学ぼうとする力」の様々なアプローチの観点や工夫が役立った。また、「学ぼうとする力」は、美術でいうなら、「創ろうとする意欲・態度」、「感じ取ろうとする意欲・態度」、「伝えようとする意欲・態度」など、能動的な意思の力により生み出されるものであることを改めて確認することとなった。また、授業では、自己実現を目指すべく、教師がいかに生徒の知的好奇心に働きかけ、生徒自らが“自分づくり”のひとつの手だてとして自覚して学習してきたかが重要であった。この実践を通じて、感性や創造性を育て、「人間が人間として豊かに生きようとすること」「能動的に生活し、日常生活を豊かなものにしようとすること」、将来に向けた豊かな人間の姿を今一度、原点に戻ってとらえ直していく必要があると感じた次第である。



今後も、創造の源、感性の源は、我々人間の意思の中に存在していることを原点として、人間の資質・能力の育成、向上を目指して、「学ぶ対象」との関わり、「他」との関わり、「自己」との関わりを大切に実践研究に取り組んでいきたいと考える。

ご参会の皆様には忌憚のないご意見をいただければと願っている。

（文責 佐々木善憲）

〈参考・引用文献〉

- 1) 文部省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—美術編—』（開隆堂出版株式会社 1999）
- 2) 遠藤友麗 編著『中学校新教育課程の解説 美術』（第一法規 1999）
- 3) 辰野千尋 著『学習方略の心理学 — 賢い学習者の育て方 —』（図書文化社 1997）
- 4) 市川 伸一 著『学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策』（小学館 2004）
- 5) 『北海道教育大学教育学部附属函館中学校 研究紀要』（平成15年度）

保健体育科

自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習 (IX)

～保健体育科における学ぼうとする力を育てる学習とは～

附属函館中学校 池田 靖秋

I はじめに

『自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習』という教科テーマを設定して9年目になった。『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成」とした学校テーマの下、昨年度は発展的・補充的な学習はいかにあるべきかを探った。実践の中では、評価基準の客観性と妥当性、信頼性を追及し、C評価の生徒をBへ、Bの生徒をAへ、さらにAの生徒をスーパーA (SA) に向上させる方策も工夫した。

しかし、評価基準を明確にして客観性を高めようとするほど、関心・意欲・態度などの情意面のあいまいな評価は排除されつつある。これら「学ぼうとする力」は、生涯にわたって運動に親しむ生徒を育てることを目標とする保健体育科としては、決して軽視できない学力要素である。評価の客観性や妥当性、信頼性を失わず、『学ぼうとする力』をはぐくめるような学習活動を展開したい。このような2年間のジレンマをこの実践で解消していきたい。

II 研究の概要

今年度の学校研究副主題『学ぼうとする力をはぐくむ学習指導の工夫』にそった保健体育科の研究構想を考えた時に、最初に悩んだ事は、『学ぼうとする力とはいったい何か』ということである。

この答えは、本紀要総論ページにもあるようにメインテーマである『確かな学力の3つの構成要素のうちのひとつ』であろうし、本校保健体育科における中心的な教科目標でもある。

もちろん、学習指導要領にも『関心・意欲・態度』面の観点別目標は記載されているし、それは授業の補助資料として分かりやすく書き換えて生徒に配布している。しかし、これら情意面の指導の難しさは、目標自体が抽象的ではっきりと目に見えないというところにあり、保健体育科だけに限らない悩みであろう。

ところが、『目に見えないもの』を『目に見える形』に変換しなければ指導・評価活動はできない、もしくは教師の独りよがりのあいまいなものになってしまう。

そこで、最も目に見えやすい観点項目である『技能』面で『学ぼうとする力』が持続しやすいように工夫した。具体的には、技能が向上しやすい重要な指導事項を単元の後半に配置するように改善した。

このことにより、技能面の向上が停滞することなく右肩上がりになり続けることによって、『学ぼうとする力』を維持し続けようと考えたのである。また、他の2つの観点とも関連させて『学ぼうとする力』を育てようと考えて、実践を重ねてみた。

Ⅲ 研究の内容と方法

1. 保健体育科における『確かな学力』とは

(1) 『確かな学力』の3つの要素

『確かな学力』を構成している3つの要素である『学ぼうとする力』（学習に対する意欲や態度）、『学び方の理解と実践』（学習方法の習得と実践）、『学んだ力』（学習して獲得した知識や技能等）を保健体育科としては、以下のように捉えた。 <1997年本科研究紀要より抜粋>

学ぼうとする力（学習に対する意欲や態度）

保健体育科における『学ぼうとする力』とは、『自己の運動課題』を『解決する意欲』を持てることである。さらに、楽しみを継続するため、『新たな運動課題』を認識することができることでもある。『解決しようとする意欲』とは、『自己の運動課題に適した課題の解決や個人生活における健康・安全に関心をもって意欲的に学習に取り組むことができる』と言い換えることができる。『新たな運動課題』とは、『運動の特性と運動の合理的な実践に関する基礎的な事項の中で、自分にとって未習の部分を認識することができる』、と言い換えることができる。

具体的には、今できないことをできるように取り組もうとする姿勢のことである。技能的な事柄に限らず、声を出すこと、行動が機敏なこと、授業への準備性や提出物の期限を守ること、仲間と協力してより楽しい活動にしようとする意欲などのことである。まとめるなら、自分の現状から向上した姿へ変わろうとする態度のことである。【関心・意欲・態度】

学び方の理解と実践（学習方法の習得と実践）

保健体育科における『学び方の理解と実践』とは、『自己の運動課題』の解決の方法を『探究し、実践し、楽しむこと』である。解決の方法を『探究する』とは、『自己の運動能力に適した運動の課題の解決を目指して、活動の仕方を考え、工夫する』と言い換えることができる。『実践する』とは、『運動の楽しさや喜びを味わうために必要な技能や体力を高めるための運動の合理的な行い方を身につける』、と言い換えることができる。『楽しむ』とは、『自ら進んで運動を実践し、運動の楽しさや喜びを体得しようとする』、と言い換えることができる。

つまり、形成的な自己評価活動の中で、SUカード（昨年度本校紀要参照）などを活用しながら自分に不足している個人課題をとらえることである。【思考・判断】

また、単元後半に、いくつかの場面設定された学習コースの中でこの課題解決を通じて、学び方の理解と実践を図っている。【技能】

具体的には、単元のオリエンテーション時にSUカードを活用して全体構想をつかませる。毎時間の思考・判断面での形成的評価は学習カードを活用している。技能面の評価は、スキルテストを単元の終わりに設定し、それに対する練習時間は毎時間確保し、学習カードで報告させている。知識・理解面の評価は期末テストで行っているが、口頭試問等も実施し、確認作業をしている。

学んだ力（学習して獲得した知識や技能等）

保健体育科における『学んだ力』とは、『自己の運動課題』を認識することができることである。『自己の運動課題』とは、『自己の運動能力に適した課題』と言い換えることができる。個人やグループで計画を立てることができ、自分の能力にあった課題を設定できることである。【思考・判断】技能を高めながら楽しく活動でき、仲間と協力して練習や競技ができることである。【技能】各種目の特性、練習法、ルールなどについて理解し、練習や記録会に活用できる力のことである。【知識・理解】

体
育

体 3

これら3つの要素のうち、「学び方の理解と実践」と「学んだ力」の詳細については、昨年度の研究紀要を参照されたい。今年度の研究テーマである「学ぼうとする力」について以下に詳しく説明する。

(2) 「学ぼうとする力」を高めるためのアプローチの工夫

『学ぼうとする力』をはぐくむ具体的な方策として、3つのアプローチ法を考えた。この3つは、レベル1<関心>、レベル2<意欲>、レベル3<態度>と階層的に分類し、それぞれの場面で以下のようなアプローチを試みた。特に本科としては「自己とのかかわり」を重視して実践を重ねている。

レベル1 <関心>

単元の導入時に取り扱う種目の機能的特性を学習カードに生徒が記入する。また、事前学習として種目の関連事項を調べ学習させる。このことにより、種目に対する生徒の関心を高め、個人課題設定時のデータとなることをねらいとしている。

レベル2 <意欲>

毎時間学習活動を記録させる。成長している自分を意識させる。前時より変化があって初めて意欲的と言えるのだと指導していく。体育の授業で努力することが天性の才能よりも重く評価しているということを伝える。このことにより、体育における意欲とは動きがなければならないのだということと、才能がないと感じた生徒も努力して自信を持って課題に取り組むことをねらいとしている。

レベル3 <態度>

子供が自分は変わったと実感できるまで技能を鍛える。ただし、要求する共通の指導事項は、すべての生徒が取り組める課題に厳選する。成功の判断基準が他人との比較でなく、個人としての成長や課題の習得状況にあることを伝えていく。このことにより、技能レベルの低い生徒も含めたすべての子供が種目に対する姿勢が目に見える行動に改善されることをねらっている。

本科としては、単元の運動種目に対して、レベル1の関心を持ち、レベル2である意欲がわき、レベル3の態度としての行動にまで表われて初めて「学ぼうとする力」が高まったといえると考えている。つまり、目に見えづらい「関心」や「意欲」という評価項目が「態度」という目に見える形にまで行動化されなければ、「学ぼうとする力」を高める授業は成功したとはいえないとおさえた。

IV 研究の視点と実践例

1. 学ぼうとする力を評価するための場面の設定

(1) 他観点とリンクさせた関心・意欲・態度の評価

① 技能面とリンクした関心・意欲・態度の評価

スキルテストやレディネスチェックをふまえた技の構成の仕方、技能面の伸び率等から関心・意欲・態度面の評価をリンクさせて行っている。また、自由参加を明言している水泳の補習やスキルテストの再チャレンジも関心・意欲・態度面の評価として加点している。

例えば<水泳>では向上点として授業開始のレディネス把握時でスキルがC規準の生徒はA規準へ向上すれば技能点とは別に15点加点評価している。同じくBからAで10点加点。CからBで5点加点。変化なしは加点0点である。また、補習参加点としては補習に参加すれば授業欠席等にかかわらず10点加点している。

同じく<器械運動>では、技数又は難易度を評価する観点として、跳び箱運動は切り返し系の技と回転

系の技を規定されているので、それをこなしていれば10点としている。さらに難易度の高い技が含まれていれば5点加点。技ファミリーの難易度表はオリエンテーション時に配布している。また、再テスト点として、スキルテストで満点を取った生徒以外で再テストを希望する生徒は、1回につき5点加点している。最高3回まで再チャレンジの権利を与えている。

② 思考・判断面とリンクした関心・意欲・態度の評価

学習カードの文章内容からも関心・意欲・態度面の評価をリンクさせて読み取っている。(実際は授業の様相を想起している単元もある)

例えば<水泳>では学習カードを期限内に提出すれば10点。記述内容に意欲的な文章が記入されていれば5点加点。実際は、水泳中はメモを持ってないのでカードの文章を見ながら授業の様相を思い出している事が殆どである。

同じく<器械運動>でも学習カードを期限内に提出すれば10点。記述内容に意欲的な文章が記入されていれば5点加点。実際は、PDA(本科昨年度紀要参照)に記録しているので、カードの文章を見ながら授業の様相を思い出している事が殆どである。

(2) その他の関心・意欲・態度の評価

体育は、心の中でいくら意欲を持っていても、運動量を確保できなければ体育の授業として成立しない。よって、授業への参加数も関心・意欲・態度点として加点している。

具体的には<水泳>では出席点として1回出席すれば4点。ただし全回出席は15点加点している。見学をした場合はレポートを提出させて、半分の点数を与えている。

2. 学ぼうとする力の評価の仕方

(1) 3年生2学期における関心・意欲・態度の評価の実際

上述のように、体育の関心・意欲・態度の評価は、簡単にまとめると授業時の様相チェックがほとんどということができる。ただ、それを授業中に補助簿を持って行っているのではなく、学習カードや技の構成の仕方やスキルテスト時の粘りなどを色々な方法で記録しておいて、後でそれを頼りに思い出していることになる。この方法で長い間評価を行ってきたが、生徒にもオリエンテーション時で事前に説明できるし、結果として教師が望んでいる理想的な体育授業時の生徒の姿に近づいていこうと子供達が変わっているの

2年生 陸上競技 学習カード					
		組	番 氏名		
1. 学習計画(学習の見通しをしよう) 12時間扱い					
	ステージ1(4種競技)	ステージ2(選択種目)	ステージ3(練習・記録会)		
1	砲丸投げ	○走り幅跳び	ステージ1・2を振り返って自分が探してみたい種目を集中的に練習し、記録を向上させたり、仲間と競走したりすることを楽しんでみよう。		
2	400m・200m	○100m走			
3	走り高跳び	○800m・1500m走			
4	ハードル走	○400mR から1種目選択			
2. 4種競技記録と得点記入表					
種目	砲丸投げ	4(2)00m	高跳び	ハードル	合計得点
記録					
得点					
3. 選択種目学習記録欄					
選択種目名	選択理由				
自分の課題	課題設定理由				
課題解決の練習方法	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	
学習の反省欄	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	
4. ステージ3学習(体育祭へ向けての練習)記録欄					
個人専門種目名	選択理由				
体育祭での記録目標	目標設定理由				
目標解決の練習方法	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	
学習の反省欄	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	(C・P・E)	
* 直時授業内で記入を終らせ体育委員に提出します。					

体 5

有効であると考える。

具体的例として、本校平成15年度3年生男子2名の2学期の保健体育の評価項目の概要を記載する。

<評価項目全体>

氏名/項目	関心		思考		技能					知識		評価		
	出席	評価	カード	評価	水泳	切返	回転	マット	合計	評価	期末	評価	合計	評定
A君	50	B	50	B	75	75	75		225	A	54	B	579	5
B君	75	A	50	B	50	75	75		200	A	46	B	646	5

2学期は水泳と器械運動のマットと跳び箱の選択、そして柔道の各単元を扱った。(柔道はスキルテストの関係上3学期評価扱い)

その中でも、関心・意欲・態度で「出席」と書かれている項目の内訳を説明する。

<関心・意欲・態度の評価項目>

氏名	水泳				器械運動			合計
	出席	学習カード 提出・内容	補習 参加	対抗 触	学習カード 提出・内容	対抗 機数・難度	スキル 再テスト	
A君	15	10	0	5	10	5	5	50
B君	15	15	0	0	15	15	15	75

各データは15点満点。(ただし水泳の補習は10点)

<水泳> 出席点：A君もB君も全回出席したので15点。

学習カード：A君は加点10。B君は15点加点。

補習参加：二人とも出席していないので加点0。

向上点：A君はCからB、B君はAのまま、ということである。

<器械運動> 学習カード：A君は加点10。B君は15点加点。

技数又は難易度：A君は求められている技数より少ない技で演技。しかし、難易度の高い技が含まれている。B君は完璧。

再テスト：A君は1回、B君は3回再テストを受けた。

<合計> 以上より、A君は100点満点の50点を獲得、よって評価はB。B君は100点満点の75点を獲得、よって評価はA。

3. 授業実践(2年生バスケットボール)

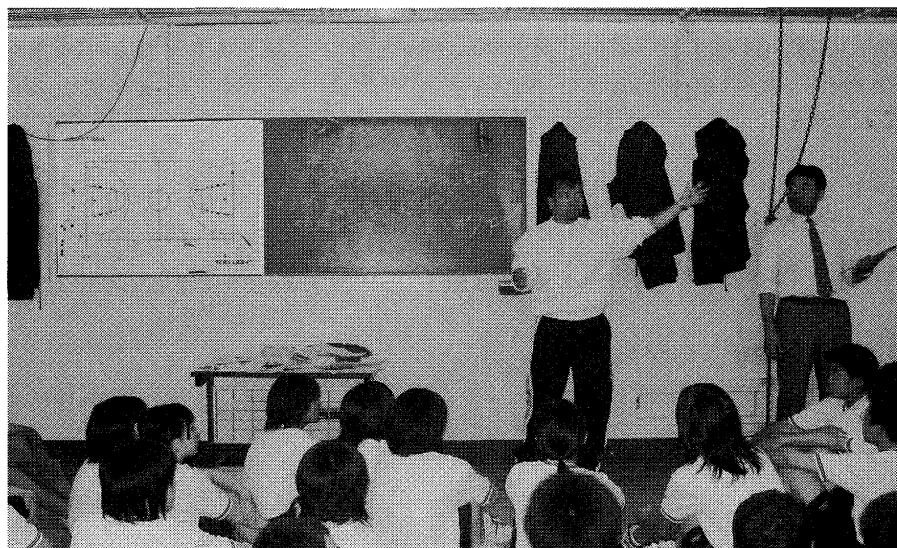
球技の学習指導は、各種目の機能的特性にせまるため、チーム内の仲間(ヒト)とのかかわりや、ボールやコートなどのモノ、ルールや戦術(コト)とのかかわりを重視した内容になっている。バスケットボールにおける機能的特性としては、攻守の切り替え(トランジション)が一瞬であり、技能が低い初期の段階でもゲームの中でシュートを決める楽しさを味わえるということがあげられる。

よってゲームの中でもその特性に生徒が十分触れられるように、各種の技能的特別ルールを設けて全員が参加できるように配慮することによって、『学ぼうとする力』の向上を狙った。

また、生徒の実態として、学習カードに記述してくる課題は、チームのインサイドワークに関するものや、戦術的な事柄よりも、ボールコントロールやシュートのテクニカルポイントなど個人に関する技術的事項が

多くなる傾向にあった。

以上のことにより、この単元に関する『学ぼうとする力』に直結する重点的指導事項としては、生徒レベルでのゲームで最も必要なシュートスキルであると捉え、単元の最初の時間から毎時間一番初歩的なシュート練習の時間を確保し、継続して技能の向上が見られるように、段階的にテクニカルポイントを生徒に指導した。



(1) 生徒の実態

平成16年度1学期に2年生のあるクラスで授業を行った。このクラスは、活発な男子とおとなしい女子という感じの学級である。バスケットボールの技能的には、男子の技能レベルは中学2年生としては、平均的なレベルであり、女子は平均以下である。よって、男子のゲーム内容は、ある程度バスケットボールの機能的特性に迫ったものとなっているが、女子については後一步技能レベルを上げていきたいという段階である。ただし、男女とも体育授業に対する「学ぼうとする力」には教師の主観として高いものが感じられた。

そこで、クラス全体としてはノーマークでのシュートシーンがゲームで多く出現するように「マンツーマンノーヘルプディフェンスルール」やトランジションが連続して起こることによりバスケットボールの機能的特性により触れられるように「ノータッチラインシステム」などの特別ルールを採用した。

(2) 指導計画（12時間扱い）

技	主な学習内容	指導目標
個人的技能	<ul style="list-style-type: none"> ・チェストパス、バウンズパス ・スピードドリブル、ドリブルチェンジ ・ゴール下セットシュート ・レイアップシュート ・ミドルシュート 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボディスルーパスの感覚を感じさせる。 ・コントロールドリブルへ発展させる。 ・スキルテストへの意欲を喚起する。 ・ゲームレベルの向上に合わせて指導する。 ・選択肢の一つとして取り組ませる。
集団的技能	<ul style="list-style-type: none"> ・パスラン ・フラッシュ ・スクリーン ・ファーストブレイク ・セカンドブレイク 	<ul style="list-style-type: none"> ・難易度が低い戦術として紹介する。 ・難易度が中位の戦術として紹介する。 ・難易度が高い戦術として紹介する。 ・発展課題としてシステムを説明し選択して取り組ませる。

体 7

ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・マンツーマンディフェンス ・ノータッチラインシステム ・ノーマルルールゲーム ・ハーフコートゲーム 							<ul style="list-style-type: none"> ・導入段階ではノーヘルプ制度で行わせる。 ・導入段階では真中以外はスローイン無し。 ・学習進度が順調であればハーフコートでノーマルルールのゲームを経験させる。 				
	時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11

(3) 技能指導項目の配列の工夫

個人へのアプローチとしては、スキルテスト種目である1分間のゴール下連続シュートのテクニカルポイントを単元の後半になるほど重要なものに配列し直し、記録の向上が続くことによって「学ぼうとする力」も育てることをねらった。下表は、6時間経過時点での生徒のスキルテスト結果経過とゲーム時の技能評価である。

#	skill 1	2	3	4	5	6	game
1	6	7	11	19			
2	9	10	12	16			
3	8	17					
4	12	24				25	
5	12	24	25	27			a
6	4	8	12				
7	9	18					
8	8	15		20			
9	7	14	15	18			
10	13	25					a
11	11	22					
12	7	13		18			
13	7	8	11	17	20		
14	9	10	15	19	18	23	
15	19	27					
16	9	18	23	25			
17	14	18	23	25			
18	8	16	19				
19	11	22			24		a
20	9	18	22		25		

#	skill 1	2	3	4	5	6	game
21	0	2		4	5	9	
22	3	7	8	13	10		
23	7	14			18		
24	5	10	14				a
25	10	20					
26	6	12				14	
27	6	12	15				
28	8	9	14				
29	7	14	15				
30	6	11	12				
31	6	11	14	16			a
32	8	9		10			
33	6	12	13	20			
34	9	17	21				a
35	0	2	4	6	10		
36	6	11	12	15			
37	5	10			18		
38	6	11		12			
39	8	9				11	
40	6	11	17				

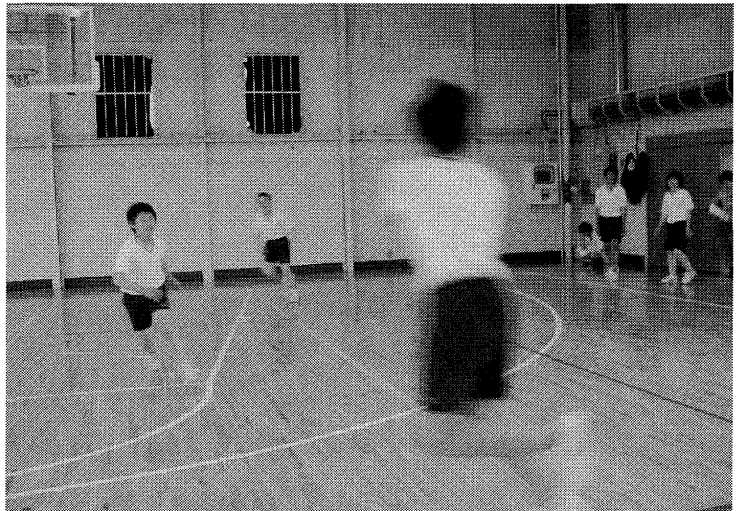
男子20人(#1~20)、女子20人(#21~40)の40人学級である。評価基準は、A評価25回以上、B評価15回以上、C評価14回以下である。よって、A評価が7人、B評価が22人、C評価が11人である。ゲームの様相チェックでは男子3人、女子3人の生徒にA(上表中ではa)評価をつけた。球技は触球時間に正比例して技能面が向上していくという面が見られる。単元中に常にボールに触りたいという意欲を持ち続けさせることが出来たことがスキルテスト記録の向上につながっていると分析している。

V 研究のまとめ

1. 研究の成果

今年度の研究で得られた成果は以下の通りである。

- (1)生徒が成功体験を得られるように課題や活動を構造化することで、「学ぼうとする力」を高めることができる。学習の初期段階だけでなく、すべての時期に成功経験を味わえることは、「学ぼうとする力」を高めると共に、技能の習熟も高めることになる。



評価のウェイトバランスの40%を関心・意欲・態度面で見ているということ伝えることにより、持って生まれた才能よりも自信も持って課題に向かって努力する姿が大切だという意識が浸透し、「学ぼうとする力」を高めることができた。

- (2)絶対評価基準を生徒に明示することにより、他者との比較でなく自分の成長度合いや課題の解決状況に着目できる生徒が増えた。特に技能的に下位の生徒においても「学ぼうとする力」を高めることができた。

2. 今後の課題

今年度の研究で積み残した課題は以下の通りである。

- (1)アンケートなどによるレディネスの把握をふまえて授業の内容や計画、並びに場面設定などの工夫を実践することが出来なかったこと。
- (2)基礎・基本をすべての生徒に徹底していくことを通じて「学ぼうとする力」を高めることねらったため、年間指導計画における生徒選択種目数を減らすことになり、生徒の興味・関心に即した種目設定ができなかったこと。

VI おわりに

評価の客観性や妥当性、信頼性を失わず、『学ぼうとする力』をはぐくめるような学習活動を展開することを目標に実践を重ねてきた。自信を持って、このジレンマを解消できたとはいえないが、目に見えづらい評価項目である関心・意欲・態度の活動が、生徒や保護者に説明責任を果たせるものになっているということだけは明言できると考えている。

今後も、「確かな学力」を身につけ自己実現できる生徒の育成を目指し、自ら学ぼうとする保健体育学習を実践できるように、研鑽に努めていきたいと考えている。

(文責 池田 靖秋)

技 1

技術・家庭科（技術分野）

自ら学び主体的に生活を創造する技術科 ～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導のあり方～

附属函館中学校 秋山 範光

I はじめに

技術・家庭科という教科には「作る」すなわち「生み出す」楽しさがある。素材を加工したりアイデアとなっているものをコンピュータ等を用いて情報という形にすることで、「作り上げることができる可能性」を伝えることのできる教科であると感じている。学習指導要領技術分野の目標からとらえると、「生活の範囲におけるものづくりやコンピュータの活用において適切に活用する『態度』を育成する」ことが必要であり、実践しようとする意欲や態度を学習の中で育成できるよう展開する必要がある。

生徒一人ひとりが自分自身を見つめたり、自己を「かけがえのないもの」として捉えていくためには、学校における教育課程において「気づく」ための場面を設定し、短期・中期・長期のそれぞれの視点において継続的に評価を与え、教師も生徒も学習に対してお互いに関わり合っていくことが必要であると考えられる。

そこで、本校研究副主題である『学ぼうとする力をはぐくむ学習指導の工夫』を踏まえ、今年度は「指導方法や学習形態のあり方」や「情意面における評価とその見取り」について研究を進めた。

II 研究内容与方法

1. 技術分野における『確かな学力』のとりえ

前述した研究副主題をもとに、15年度の研究として行った『『確かな学力』の技術分野としてのとりえ』のうち、「学ぼうとする力」に研究の視点を当てた。教材開発と評価の充実の観点から、4つの観点別評価のうち「生活および技術に関する関心・意欲・態度」の部分の評価を教師がいかにとらえ、学習者である生徒にどのように還元し、学習意欲をいかに高めていくかという点に研究内容を絞ることにした。昨年度、単元における評価基準やAB評価の到達基準とそれぞれの段階到達までの具体的な手だてを記載した「Step Upカード（以下SUカード）」を用いて学習を進めているが、関心・意欲・態度の評価はどうしても判断基準が抽象的になり、どんなに評価項目を細分化してもABC評価のカットインが教師の主観に頼らざるを得なくなってしまう。さらに、学習常規と区別して考えていかなければ、「技術分野」の学習課題への関心・意欲・態度であるのか、学習活動自体へのものであるのかもあいまいになる。関心・意欲・態度は学習時に表出しないものも多いが、『形や行動でとらえにくいもの』をできる限り、評価として『形や行動でとらえる』工夫をすることが情意面の評価には欠かせない。

そこで、情意面の評価を形や行動でとらえるために、15年度研究『『確かな学力』を支える3つの要素』としての「学ぼうとする力（＝学習に対する意欲や態度）」の押さえを見つめ直した。そこで技術分野としての関心・意欲・態度（以下、意欲）を高めるためには、工具や（情報）機器の活用能力や技能の習得が大切であると考えた。

学ぼうとする力（＝学習に対する意欲や態度）

製作・話し合いおよび課題解決的な学習等を通じ、素材の持つ特性や先人の創意・工夫、工具および機器の合理性を感じ取り、自らそれらの情報や技術を活用しようとする意欲や態度。
(15年度研究紀要より抜粋)

（「確かな学力」を支える3つの要素については15年度紀要を参照）

2. 技術分野における3つの「かかわり」

本校では学習への関心・意欲・態度を高めるための工夫・具体的な手だてとして3つの「かかわり」（「学ぶ対象とのかかわり」「自己とのかかわり」「他とのかかわり」（→総論参照）を意識し学習指導を進めてきた。技術分野でもこの3つのかかわりをとらえて授業実践を行った。

学ぶ対象とのかかわり	自己とのかかわり	他とのかかわり
<ul style="list-style-type: none"> 教科や単元の目標を達成させるために題材の選定やワークシートなどの教具を工夫し提示する。 製作する形状や機能等について、技能等の到達度に応じた選択幅を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自己評価欄」に学習の成果や自分の考え・次時への課題を記録する。 (+添削による考えの深まり) SU カードにより、学習状況を振り返り、単元の目標に対する到達度を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ペアおよびグループでの学習を取り入れ、製作物や活動の様子からアドバイスや評価等の活動場面が表れやすいようにする。

3. 「関心・意欲・態度」の評価

○「学ぼうとする力」の評価の場面

〔行動観察による評価〕

<p>生徒の関心・意欲・態度が表出しやすい場面は</p> <p>ア 加工体験など作業後に自己課題を設定するなど、自らの学習成果を振り返る場面</p> <p>イ グループによる課題設定等の話し合い活動の場面</p> <p>ウ 課題解決に向けての再調査・再体験場面</p> <p>と考えた。ただし、工具・機器の熟練度や日頃の興味・関心、教科書等から得た知識量などにも左右されやすいので、ワークシートの記述とも整合させる必要がある。</p>

〔ワークシートによる評価〕

<p>ア 課題に対する解決方法の具体的な記述</p> <p>イ 再調査・再体験時に学んだ内容の記述</p> <p>ウ 自己評価欄への具体的な学習内容および感想の記述</p> <p>等、記入内容で判断する。多く記述すればよいのではなく、既習内容がくわしく書かれているかや学習時間内で解決できる量であるか等も判断する必要がある。</p>
--

加工体験や製作およびそこに関わるグループによる話し合い（交流・評価）には、生徒の向上心や探求心等が働きやすい場面であると考えられる。学習中における仲間同士のアドバイスや作業の様子の観察から、知識を再確認し、お互いの工夫している点を理解し合い自分の活動に還元することも十分考えられる。意欲の高まりは、単元初めの加工体験や製作よりも、つまづきや仲間との交流等を踏まえたあとにより見られると考える。そのため、各単位時間の学習における評価のみならず、単元を通しての変容にも十分目を向けなければならない。しかし、1単位時間および単元を通しての評価にコストがかかりすぎないように、1単位時間での評価場面を絞ったり、単元内の区切りの場面（活動～課題設定～自己（相互）評価等）で記録を残す等の工夫が必要である。

特に今年度は評価の手だてとしてワークシート自己評価欄の記述内容に評価の視点を当てた。学習後記入された自己評価内容に簡単なアドバイスを付け加える。作業や話し合い・課題解決への手だての設定等の活動後は、自己評価として本時における気づきや仲間からのアドバイス、生徒各自の技能面での高まり等について文章による記述を行ない、教師が添削を行なう（2～3単位時間ごとが多い）。

「よく取り組んでいたね」等の単なる賞賛もあるが、主はさらに細かく調査することを促したり、学習時の

技 3

生徒の気持ちを再確認させたり、仲間のちょっとしたアドバイスに気づかせる等学習内容を深めることを目的として行う。添削の内容を受けて生徒は次時への課題を記入しておき、次時の学習に備えることで、「学習者である生徒の学習状況」「教師の評価」「生徒の次時への意欲の高まり」が継続的に行われるのではないかと考えている。

Ⅲ 実践例

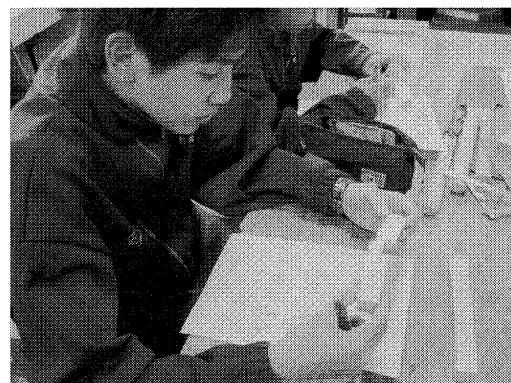
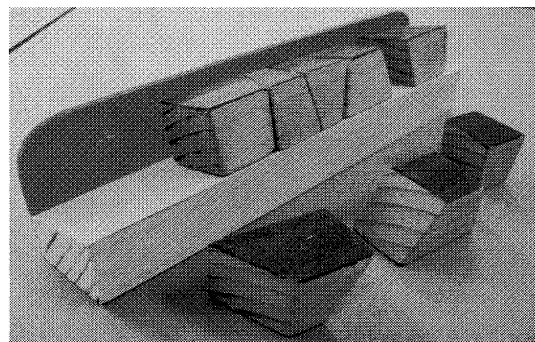
1. 単元名 木材でパズルを作ろう（第1学年）

2. 実践の概要

第1学年では「技術とものづくり」の導入部分として、作品や加工方法について仲間と交流しあい、その出来や仲間の工夫などについて知る機会をできる限り多く設定したいと考える。

本題材では「いすか切り」を用いたパズルの製作を通して、木目と木材の割裂性およびのこぎりが切削の原理によって材料を切断することについて学習する。その形状や使用工具等の制限をもとに、小学校で学んだ技能や知識を活用し、「自分の考え」を明確にさせ、木材を活用したものづくりの奥深さのみならず、学級全体でものづくりを行う雰囲気を育てる。

本時は「いすか切り」体験後、教師が作成したサンプルの切断面と比較したり、生徒自身の作業効率等をふり返り、どのような技能や知識が必要であるかを考え交流し合う。生徒各自の課題をもとに班内でグルーピングをし、各グループごとに教科書等を用いて再調査をしたり、加工体験を行なう。



3. 単元計画

学習内容	指導目標	評価方法	時間
けがきの方法	・けがきの必要性と、さしがねおよび直角定規の名称基本的な使用方法等について学習させ、測定やけがきをできるようにさせる。	○ワークシート ・記入状況	2
材料の切断 (パズルピースの製作)	・両刃のこぎりによる加工体験を通して、工具の安全な管理および切断の原理、名称、切断の手順等について理解させる。 ・「いすか切り」を加えたパズルピース作りの学習を通して、木材の特徴を意識した切断の方法について理解させ、のこぎりびきの技能を深めさせる。	○自己評価 ・今日の Step Up ○授業観察 ・話し合い活動の様子 ・加工体験の様子 ・安全面/整頓の様子	4 (本時 3/4)
発展・補充	・「材料の切断」についてふり返り、基礎・基本の定着を図るとともに、より高度な切断方法についても学習させる。	○技能テスト	1
仕上げの方法 下地作りと塗装	・下地作りから塗装までの作業を通して、サンドペーパーや木工やすりを用いた研磨と下地作り、ワックス塗装の特徴について理解させる。	○パズル作品	2
まとめ	・生徒作品の交流を通して、加工時の仲間の工夫点やよりよいものづくりに必要な技能と心構えについてお互いに深めさせる。		1

4. 本時案

(1) 学習目標

- ① グループでの意見交流を通して、よりよくのこぎりびきを行う方法や木材の性質を意識した加工等について知識を再確認したり、理解を深めることができる。(「技能」に関する関心・意欲・態度)
- ② 両刃のこぎりをを用いた木材の加工について、けがき線に沿って正しく行うことができる。(生活の技能)

(2) 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
<p>●本時の学習課題について確認する。</p>	<p>・前時に行った「いすか切り」について、目的や加工方法等についてパズルピース及びワークシートで確認させる。</p>	<p>○安全面の視点から、けがきの方向や材料の固定について必ず触れる。</p>
<p>正確なのこぎりびきのためにはどんな知識や技能が必要か考えよう</p>		
<p>●より高い精度でのこぎりびきを行うための方法等について、自分が学習すべきことを考える。</p>	<p>・パズルピースのサンプルを各班に渡し、各自の作品と比較させ、より精度の高いのこぎりびきに必要な技能の習得や木目の選択等について自分なりの考えを持たせる。</p>	<p>【評価】 (関心・意欲・態度)</p> <p>A 自分の力で具体的に記入ができています。</p> <p>A ヒントカードを用いて自分なりの考えが具体的に記入できている。</p> <p>B ヒントカードを用いると何について学習すべきか簡単に記入できる。 《行動観察》</p>
<p>●各自の意見をもとに、班で本時に調査・体験する内容を決定する。</p>	<p>・班でワークシート記入後、班長に提出させ、その内容について時間内で解決できるようアドバイスを与える。</p>	<p>【評価】 (関心・意欲・態度)</p> <p>A 自分の考えを発表し、班での意見をワークシートにすばやく記入する。</p> <p>B 班での意見をワークシートに記入する。 《行動観察》</p>
<p>●班で選択した体験方法や調査内容について取り組む。</p>	<p>・各班の課題をもとにして調査および加工体験を行わせ、各班へアドバイスを与える。</p>	<p>○特に「木材の固定」「のこ身と頭の位置」「ひじの引き方」の部分で不十分な生徒を優先させアドバイスを与える。</p>
<p>●自己評価</p>	<p>・自分や班の取り組みについてワークシートの自己評価欄に本時の成果や疑問点等について記入させる。</p>	<p>【評価】 (関心・意欲・態度)</p> <p>A 具体的な事例を挙げ、感想や成果が記入されている。</p> <p>B 感想や疑問点などが記入されている。(抽象的)</p> <p style="text-align: right;">《授業後のワークシート添削》</p>
<p>●まとめ</p>	<p>・次時「パズルピースの製作」について知らせ学習への見通しを持たせる。</p>	
<p>☆次時までの学習課題の設定</p>	<p>・ワークシート返却時に、次時への目標を記入するように促す。</p>	<p>●考えを深めるアドバイスやWEBページを紹介する等。</p>

技 5

(3) 評価の場面 (授業中)

- ① 「いすか切り」後の自己課題の設定 ② 話し合いでの課題の交流～設定まで
- ③ 再調査・再体験

(4) 「学ぼうとする力」を高めるための手だて (授業中)

- ① 他の素材を用いての「いすか切り」体験…木材の持つ割裂性があればこそその活用であることに気づかせる。
- ② いすか切りのサンプルの提示…切削の深さや割裂させる面、加工精度について考えさせる。
- ③ 習得した技能や知識に関わる交流機会の設定
 …相互評価や加工の様子観察などを通して、お互いにアドバイスし合い自分の活動に生かせるようになる

5. ワークシートと記入の様子

〔表面〕

まとめの部分や
関連コラム・WEB
アドレスを掲載。
体験作業後チェック項目の結果から自己課題を決定する。

〔裏面〕

個人課題をもと
にグループで本
時の課題、次時
までの課題、次
時の課題につ
いて具体的に考
える。
○自己評価欄

1. 班ではこう考えます

今日の授業では
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。

2. 今日をふりかえって

先週、いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。

1. 班ではこう考えます

今日の授業では
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。

2. 今日をふりかえって

先週、いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。
いすか切りの深さを調節するのことができた。

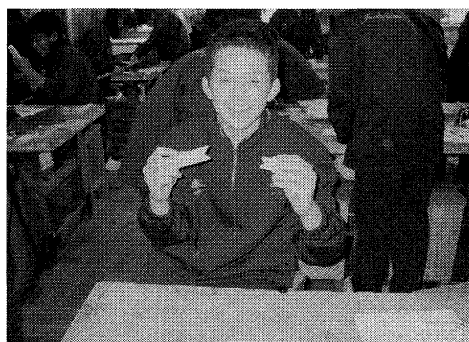
「いすか切り」は、切削・割裂後、その形状を考えるとかんなどでの研磨が難しい。製作原理を理解したのち、より高い精度で直線および直角に木材を切断することに加え、割裂方向と切削の深さについての判断力が求められる加工法である。生徒各自の技能の差が大きく、それによって解決すべき課題の量の差異も大きくなる。特に材料を押さえる力が弱かったり、のこぎりに余分な力が加わったりする生徒は、教師の多くの支援を必要とする。

授業後、生徒自らホームセンターに足を運び、木目にまで気を配って材料を購入し、納得のいくまでパズルピースを製作する生徒の姿が予想以上に多く、発達段階に応じた題材の選定や評価活動の継続性の大切さと有効性を実感した。

V おわりに

「学ぼうとする力」に関わる評価の研究を進めるうちに、生徒も自分も変わってきたと感じる。ワークシートへの記述一つをとっても回を重ねるたびに文章量が飛躍的に伸びる。それも単なる感想ではなくなっている。ほぼ毎回実施するため、さまざまな活動の場面で自分がどのような考えを持っていたか、仲間とどのようなやりとりがされたかを細かく覚えるようになっていく。生徒のそうした「学ぶ意識」の変容は、単元および各教科の目標に迫っていけるものと考えている。一方、自分でも生徒の実態や前時の学習状況に一層注目し、「わかって／できるようになってもらいたい」という気持ちで授業の準備をしたり、ワークシートに添削するようになった。もちろん内在している部分までは評価できないとしても、生徒一人ひとりの自己実現を促すための努力を、指導側も学習者も継続させることで質のよい授業が構築されていくと考える。

授業における「意欲」を、「生きてはたらく力」としての生活を創造する「態度」まで伸ばすためにも、学習指導のありかたについて改善を図る必要がある。



(文責 秋山 範光)

<引用・参考文献>

- 1) 北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要
平成 15 年度『『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成』
～発展的・補足的な学習はいかにあるべきか～
- 2) 梶田 叡一「教育評価」(有斐閣双書)
- 3) 北尾倫彦・向平 決・橋本由愛子編集
「観点別学習状況の新評価規準表～題材の評価規準と ABC 判定基準～ (図書文化)
- 4) 中学校学習指導要領 解説—技術・家庭編— (文部省 平成 11 年 9 月)

外国語科

コミュニケーションを維持・発展 させるための学習指導の工夫

附属函館中学校 早瀬真裕美・宮野 健

I はじめに

英語科においては、実践的コミュニケーション能力を育成するために、いかにして生徒の英語に対する興味を高め、コミュニケーションを図ろうとする意欲をもたせるか、基礎・基本の定着をどのようにして図るかなどが課題となっている。

本校英語科でも、平成十二年度から「実践的コミュニケーション能力の育成を目指して」という研究主題のもと、年間指導計画の作成、GB（がんばろう）カードやSU（ステップアップ）カードによる評価規準と到達基準の明確化、発展的・補足的な学習指導などに取り組んできた。この実践的コミュニケーション能力は、主体的かつ積極的に自分の考えなどを相手に伝えたり、相手の意向などを理解しようとする態度とともに育成されていくものである。これは学習に対する「関心・意欲・態度」と深い関わりがあり、英語科で言ういわゆる評価の四観点の一つである「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価に通じるものであろう。

しかし、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）がよりいっそう重視されることになってから、その評価によって生徒の学習に対する意欲をより高めていくことはわかっているにもかかわらず、特に「関心・意欲・態度」について具体的にどう見取り、どうアプローチしていくかについては、まだまだ研究途上であると言わざるをえなかった。そこで、本年度は英語科における「確かな学力」を支える3つの要素のうちの「学ぼうとする力」を高めるための指導について研究実践を進めることとした。

II 研究の経過

昨年度の研究では、「『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成」という本校の研究主題のもと、新しい研究内容に則り、英語科における「確かな学力を支える3つの要素」を以下に示すようにおさえ、学び方を中心にすえた確かな学力について、研究・実践を行った。

また、発展的・補足的な学習を指導計画に組み入れ、実現状況を評価していくために、SUカードの作成に取り組んだ。いくつかのねらいをもって作成されたGBカードの内容を見直し、学習者への具体的な課題解決のための手立てという役割を合わせもたせることにしたのが、このSUカードである。そして、全学年・全単元において、発展・補充の欄をもうけ、すべての生徒の学習に対する力を高めるための手立てや学習内容を記述し、よりよい学び方を目指す学習活動を工夫した。なお、本年度初めに全教科・全単元のSUカードが綴られた冊子が全校生徒に配布され授業等で活用されている。

○英語科における「確かな学力を支える3つの要素」

本校英語科では、習得した学力を利用したり、活用したり、関連づけたり、応用できれば、「確かな学力」が身につくと考え、英語科における「確かな学力」を次に挙げる3つの要素によって構成される総合的な力であるととらえた。

＜学ぼうとする力＞（関心・意欲・態度の向上にかかわる要素）

- * 英語という言語やその背景にある文化に興味や関心をもち、異文化理解を深めながら、学び方や表現の方法を工夫して、間違いをおそれずに英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度。

＜学び方＞（自己評価能力と学習方法の習得・向上にかかわる要素）

- * 単元の最初にステップアップカードで学習内容を確認し、形成的テストの結果やステップアップカードによる自己評価から自分の学習状況を把握する。その把握された状況に応じ、発展的な学習あるいは補充的な学習を選択して、自ら学ぶことを通して、コミュニケーションを維持・発展させるために必要なさまざまな表現や技術を磨くという手立て。

＜学んだ力＞（上記の2つの力と関連し、知識・理解・表現の能力の向上にかかわる要素）

- * 初歩的な英語を用いて自分の考えを話したり、自分の考えを書くことができる力。
- * 初歩的な英語を聞いて話し手の意向を理解したり、初歩的な英語を読んで書き手の意向を理解できる力。
- * コミュニケーションを成立させるために、発音・語彙表現・文法などを理解し、必要に応じてコミュニケーションに活用できる力。及び、言語や文化に対する差別や偏見がなく、文化や価値観の多様性に気づき、理解を深める力。

III 研究の内容

1. 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価について

北海道教育委員会発行の『中学校教育課程改善の手引』には、外国語科における「関心・意欲・態度」について評価する際の留意事項が次のように書かれている。

「この観点は、生徒がコミュニケーションを行うことに関心をもち、積極的にコミュニケーションを行おうとする態度を身につけているかどうかを評価するものであり、一般的な英語学習に対する関心・意欲・態度（宿題の提出状況や授業中の挙手の回数など）とは別であることに留意する必要がある。したがって、生徒が実際にコミュニケーション活動を行う場を設定し、その言語活動への取組状況を観察し、その記録の累積などから評価することが大切である。」

つまり、英語科では「コミュニケーションへの」という言葉が頭につけられているように、英語学習への「関心・意欲・態度」とは区別しなければならない。しかし、これまでの自分自身の評価の在り方について改めて振り返ってみると、次のような反省点が挙げられる。

- ①「関心・意欲・態度」の評価が、他の観点の評価にすりかわることがあった
- ②主に教師という他者による評価が中心に行われた
- ③評価の記録・蓄積の煩雑さに追われた

いわゆる絶対評価が導入されてから、確かな学力を育成するための評価活動を工夫してきたつもりではあ

るが、これまでの評価の在り方をもう一度見直し、より子どもの側にたった評価を進めていこうと考えた。そこで、今年度は「学ぼうとする力」をはぐくむためのカギとなる三つの関わりについて研究を進めてきた。

2. 英語科における学ぼうとする力をはぐくむ3つの関わり

○「学ぶ対象」との関わり

「関心・意欲・態度」を評価する場合、新しい学習に対する感受性があるか、ということが一つの視点として考えられる。Plus-One Dialog, Show & Tell, Story Telling, 5-Sentence Speech といった活動は、いろいろと応用がきき効果的であるといえる。ただ、通常のコミュニケーション活動の場合でも、「関心・意欲・態度」を他の観点との関わりで見とることを考えると、学習課題や教材の工夫に心がける必要がある。

例えば、授業の中で「コミュニケーションとしての読みの指導」を考える場合、教科書本文を目的に応じてリライトすることによって、普通の文をスピーチ形式やインタビュー形式に変えることができ、読み手がより主体的に読みに取り組むことができる。また、教科書本文とは異なる情報を含む文を故意に仕組んでおき、その異なる部分を見つけ出し訂正させるなどゲーム性を持たせることもできる。物語文についても同様で、ただ読ませるだけでなく対話形式にリライトするなど題材をうまく活用している。また、ある程度の分量の英文を書かせたいときには、単にサンプルを与えて書かせるのではなく、思いつく語彙や表現を線で結びながら構想を考えさせるようなマップ作り（簡単なワークシート）を行わせ、構想のための時間を与えている。さらに、初稿の段階ではわからないところや自信のないところに下線を引かせ、書き直すときには消しゴムを使わず二重線で見え消しにして書かせるなどすると、後で評価しやすい。話すことに関しては、コミュニケーションを維持する訓練をしていく必要がある。これは、学年が進むにつれてコミュニケーションの維持よりも、発音、語彙、文法、話題などの誤りを避けることに気をとられがちになるからである。そこで、教師側であえて無味乾燥な対話文を提示し、生徒にはその会話の内容を創造的に展開させる。生徒の個性や自由な発想を重視しながらも、何でもオーケーということにならないように、目標をきちんと示すこと、目標文が対話に含まれていること、ステップを踏んで条件を課していくことを、前提としている。

このように、コミュニケーションへの関心を高め、間違いをおそれず積極的に言語活動に取り組む態度を育てる学習が行われるような、学習課題や教材の開発を行っている。

○「他」との関わり

英語科では、二人で学習するペア学習が主であるが、授業内容に応じて小集団を組ませたり、生活班を利用したグループ活動といった学習形態も取り入れている。ペアで練習する際、到達目標と評価のポイントを理解させることによって、最初の目標がクリアでき次第、より高次の目標へと協働してトライするようになる。また、個々の能力に応じてパートナーを教師側で意図的に変えたり、好結果が期待されるようなペアを仕組むこともある。

例えば、教科書の文を暗唱する活動では、一斉に練習した後でお互いに暗唱の度合いをチェックさせる。その際、自分の取組状況に応じて、配布済のヒントカードを用いてもよいことにしておく。このヒントカードには、暗唱すべき文の文頭の語だけが書かれており、あとは自分の達成度に応じて付け加えて書くことが可能なようにしている。そして、暗唱の達成状況は自分の個人票にパートナーに記入してもらう。友人による評価なので、認められたり賞賛されると自信がつくであろうし、逆に低い評価であっても比較的アドバイスを受け入れやすく次回への課題意識を持つことができる。また、教師は全員の暗唱の様子をチェックすることはできないが、抽出してチェックした生徒については、個人票を回収した後で書かれたコメントと見合わせて評価することはできる。

このように、協働で学びあう学習を通して一人ひとりが一層意欲的になるような学習形態を工夫している。

○「自己」との関わり

自分の進歩の跡を自分で確かめることができなければ、意欲の喚起や持続は困難である。そこで、自己評価カードを用いて、学習の目標に近づこうとしているかどうかを自分で振り返らせ、進歩の度合いを具体的に確かめられるようにしている。自己評価で懸念される評価のルーチン化を避けるために、活動に入る前に教師が提示する今日の目標を記入させる。主に「聞くこと」「話すこと」が中心となるが、授業内容ごとに選択され、教師と生徒がともに評価の観点と基準を理解することになる。

そして、活動後に生徒は自己評価を行う。ただ振り返って反省するだけではなく、次時への課題を書かせることにしている。反省以上に悪かった部分を改善することが大切であり、それには次回に行う活動への取り組み方を意識させなければならない。教師は活動中の生徒の様子を観察し、活動状況の特により生徒と、改善が必要な生徒をチェックする。その際、煩雑な作業を抑え低コストでの評価を可能にする携帯情報端末器 (PDA) を利用することもある。

「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価基準例

- ◎ 聞くことの場面において
 - 1 相槌を打ったり頷いたりする
 - 2 相手の目を見て聞く
 - 3 メモを取る
 - 4 聞き取れないときに態度や言葉に表す
 - 5 質問したり、応答したりしようとする

- ◎ 読むことの場面において
 - 1 辞書などを活用しようとする
 - 2 辞書なしで推測して理解しようとする
 - 3 印をつけたり書き込んだりする
 - 4 感情をこめて読もうとする
 - 5 教科書に関連したものや自分の興味・関心にあったものをさらに読もうとする

- ◎ 話すことの場面において
 - 1 相手の目を見て話そうとする
 - 2 できるだけ多くの人と話そうとする
 - 3 補足したり言い換えたりしようとする
 - 4 友人などに相談しないで話そうとする
 - 5 間違いを気にせず、積極的に話そうとする

- ◎ 書くことの場面において
 - 1 他の人の文や文章を参考にしようとする
 - 2 テーマを探して、たくさん書こうとする
 - 3 文法的ミスをあまり気にせず、自分が書きたいことを意欲的に書こうとする

組 番 氏 名 _____

Unit3	月 日	評価者によるコメント	
<input type="checkbox"/> コミュニケーションへの関心・意欲・態度 <input type="checkbox"/> 聞くこと <input type="checkbox"/> 話すこと <input type="checkbox"/> 読むこと <input type="checkbox"/> 書くこと	8/24	読む 4	まだ話の内容を正しく理解していないところから、新しい語彙や表現を正確に聞き取ることも難しく感じているように思われる。
	8/26	読む 5	しかし内容を理解しおとすことができ、少しづつ内容を質問もできるようになり話して答えを出すこともできるようになった。
	9/6	読む 4	「Mommy」は特に気に入っているようですね。この単語を積極的に使ってください。
<input type="checkbox"/> 読書の能力 <input type="checkbox"/> 書くこと	/	/	/
<input type="checkbox"/> 話術の能力 <input type="checkbox"/> 聞くこと	8/25	/	十分な資料で全部言っていたので、良かったと思います。梅 megumi
	9/3	/	よく読んでいるので、良いと思います。梅 megumi

単元のまとめテストに向けて

目標 _____

結果と反省 _____



コミュニケーション活動の場面でワークシートを用いる際、必要に応じてヒントカードをワークシートに添付して用いるようにした。一例を挙げると、コミュニケーションを維持・発展させていくために、その場面場面で必要な語句などをヒントカードに示しておく。ヒントカードの裏側には両面テープが貼られており、それをワークシートの下部にでも添付することによって、ヒントを必要とする生徒は活用できることになる。また、トピックによって選択できる数種類のワークシートを作成し、それに簡単に書き込みができるような余白を設けたりした。これらの工夫によって、生徒が課題解決のために必要な表現や情報を得ようとしているかが見とりやすくなった。

いずれにしても、「関心・意欲・態度」の高まりの表出形態は、個々の生徒によって異なるので、一単位時間のみではなく、個人票やワークシートを活用しながら継続的に観察するとともに、短期・中期的なスパンで個々の生徒の「関心・意欲・態度」の変容をとらえ、学習指導の工夫・改善に生かしている。

3年 組 氏名 _____

■ ことばのつなぎ方を意識して、ある程度の時間継続してチャットができるようになるう！
 (例) well, ... oh, ... let's see, ...

example

Demi: Ken, have you ever been to _____ ?
 Ken: Yes. How about you?
 Demi: I've been there three times.
 Ken: I want to go again, too.

■ みんなのアイデアを実際に使ってみよう！

1回目	2回目	アイデア
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	① つなげ言葉を使いこなす
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	② 重要な語句を記入する
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	③ 知りたいことを繰り返す
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	④ 主題を書き足して補う
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	⑤ Yes/No だけの返事で終わらせずに詳しく説明したり、相手のことを反響けたりする

ヒントカード

アイデアの例

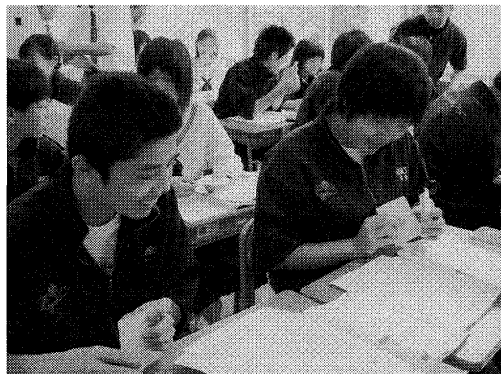
① Oh, well, let's see,
 ② Really? Me too. Yes, very much. Great. Too bad.
 ③ At ~ ? In ~ ? ~ times? Already? Not yet?
 ④ Did you? Were you? Have you?

IV 実践例

1. 題材名 Unit3 Children of the World LET'S CHAT 2 ことばのつなぎ方
2. 単元について

3年生で初出の現在完了形を学習することによって、時制については、現在や過去、そして未来のことだけでなく、ある過去の時点から現在まで続けていることや、これまでの経験について述べるようになる。より創造的にコミュニケーションを維持・発展させることが可能になる。(中略)

前回の LETS CHAT 1 で「会話の切り出し方」を学習した際、会話をある程度継続させるためにはどうすればよいかについて考えさせた。本時では、その時のアイデアを共有した後で、あるトピックや出だしを設定したチャットに取り組みたい。そして、その共有したアイデアを生かしながら、途中でペアやトピックを変えることによって、生徒は会話の内容を創造的に展開し、のびのびと楽しく意欲を持続させて取り組むことができると思われる。また、そのような雰囲気作りを教師の方で工夫し、いろいろな方法で支援していきたい。



3. 指導計画

主な学習内容	指導目標	時間
Starting Out ・現在完了(経験)	・現在完了の経験用法を用いた文の形・意味・用法を理解し、自分や友達がどのような経験をしたことがあるか、表現できるようにする。	2
Dialog ・現在完了(完了)	・現在完了の完了用法を用いた文の形・意味・用法を理解し、今日の時間割や今日しなければならないことなどを、表現できるようにする。	2
Reading for Communication ・不定詞の形容詞的用法 ・不定詞の副詞的用法	・不定詞の形容詞的用法の形・意味・用法を理解し、いくつかの選択肢の中から自分や相手がほしいものを表現できるようにさせる。 ・不定詞の原因を表す副詞的用法の形・意味・用法を理解し、シチュエーションとレスポンスを対応させて言うことができるようにさせる。 ・教科書本文を読み、由美の記録の内容について自分の感想を述べるができるようにする。 ・ジョスナの立場にたち、由美の手紙に返事を書くことができるようにする。	4
Listening Plus 3 ・バングラデシュ まとめの練習 2	・英語での社会〔地理〕の授業のようすを聞いて、概要やポイントを理解することができるようにさせる。 ・友達のプロフィールを書くことによって、現在完了形を用いた表現が実際に多様な使われ方をすることに関心をもたせながら、復習させる。	1
LET'S CHAT 2 ・言葉のつながり	・いろいろなつながりことばや会話のテクニックを用いることによって、これまでに訪れたことがある場所などについてのおしゃべりすることができる。	1 (本時)

4. 学習目標

- (1) 既習の英語を用いて、会話を続けるコツを生かしながら、友達と協力して楽しく意欲的にコミュニケーションに取り組もうとする。
- (2) 友達との会話を通して、いつどこで何をしたかなどについて正確に聞き取ったり、質問に対して適切な反応をすることができる。
- (3) 過去に起こった動作や状態が現在と何かのつながりをもっていることについて、現在完了形を用いた英文で表すことができる。

5. 学習の展開

学習活動	教師の働きかけ	指導上の留意点
○あいさつとウォームアップ	●既習事項を用いて生徒と簡単な会話をする	◇意欲を喚起する言葉がけ
○学習の振り返り	●前回の LET'S CHAT 1 で学習したことを想起させる	◇必要であれば前回のワークシートも用いる
○本時の学習目標の確認	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px;"> <p>・現在完了形の文を用いて、ことばをつなぎながら、ある程度会話を続けることができるようになる</p> </div> <p>●個人票に今日の目標を記入させる ●出だしの文型のみを設定し、1分間のチャットに取り組ませる</p>	◇ペアでトピックを決めさせる

○学習目標へ近づくためのアイデアの共有	<ul style="list-style-type: none"> ●話を展開するために使われる工夫を、これまでの経験の中から考えさせる ●前回の「話の切り出し方」の学習 (LET'S CHAT 1) で気づいた生徒のアイデアを提示し、共有させる 	<ul style="list-style-type: none"> ◇前回の学習の様子を想起させる ◇前回のワークシートを活用させる
○共有したアイデアの練習	<ul style="list-style-type: none"> ●現在完了形の文を用いたサンプルダイアログを提示する ●サンプルをもとに、共有したアイデアの生かし方を考えさせる ●サンプルを用いて、様々なアイデアを使う練習をさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教科書を活用する ◇教科書本文も参考にさせる ◇ヒントカードを準備しておく
○ことばのつながりかたを意識したおしゃべり	<ul style="list-style-type: none"> ●現在完了形の文を用いたいくつかのダイアログを提示する ●ペアで一つのダイアログを選択させ、サンプルを自分たちで工夫させる 【観察評価】 ●つなぎ言葉などのいろいろなアイデアを意識させながらチャットに取り組ませる 【観察評価】 	<ul style="list-style-type: none"> ◇トピックの異なるサンプルを用意する ◇ヒントカードを準備しておく ◇いろいろな方法を使うことを意識させ、楽しく取り組ませる
○本時のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ●振り返りの段階で取り組ませた1分間のチャットと比べることによって、学習の成果を確認させる ●個人票に本時の学習を振り返ったコメントを記入させる 【自己評価】 	

V 実践を終えて

今回は、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に関する評価基準の一つである「コミュニケーションを続けようとする態度」、つまりコミュニケーション・ストラテジーの使用に関するものについて実践を行った。授業ではコミュニケーションを維持し発展させるために、聞く・話す能力を中心に据え正確さよりむしろ内容と流暢さに重点を置いて評価し、多少の間違をおそれずに自由な発想で会話をするように指導した。その結果、コミュニケーションの維持・発展につながる談話能力と方略的能力を伸ばすために、生徒が使える簡単な相づちや確認、意思表示や質問の表現などを含めたコミュニケーション・ストラテジーの学習の幅を広げ、会話の展開に生徒の自由な発想をできるだけ生かすことができた。

しかし、このストラテジー使用の観察による評価はかなり意識的に行う必要があり、様々な工夫をしてコミュニケーション活動が続くかどうかを見るためには、そのための仕掛けが必要であることがわかった。今回の授業では、「関心・意欲・態度」を高めるために次のような工夫をした。まず、チャットを楽しませることに重点を置き、ペア学習ではトピックの異なる話題を提示し選択させるなど、無理なくスムーズに取り

組めるようにした。また、故意に退屈な内容の対話を提示することにより、いろいろなつながり言葉を使って会話を補ったり既習のアイデアで話を展開できるようにした。そして、「関心・意欲・態度」を見とる方法については、次の視点で行った。行動観察による見とりとして、様々な工夫をしながらコミュニケーションを続けようとしている様子を観察した。教師やヒントカードのアドバイス、友達との会話カードのやりとりによって、ペア活動に積極的に参加しようとしているかどうかを見とる材料とした。また、ワークシートによる見とりからは、前回の学習を生かしたいろいろなアイデアがチェックされているか、ヒントカードを利用しているかどうかを行動観察とあわせて見とることにした。

以上のような研究の視点で授業を行ったが、次のような課題があげられた。まず、コミュニケーションを観察法でどうとらえるかということである。やはり観察だけでは限界があるので、ワークシートの記述状況を参考にすることが必要である。そうすると、それらの集計や記録にかなりの手間がかかることが予想される。また、ペア活動で設定した目標が適切なものだったかということもあげられた。どのような活動の様子が見られれば、どう評価されるのかを教師も生徒も確認する必要があった。このように、ワークシートによる工夫はもちろん、ポイントを絞ったこまめな観察・評価の工夫なども引き続き検討していかなければならない。

また、生徒の学ぶ意欲を喚起・維持・強化していく教師の役割として、「やる気を喚起させる課題や教材の準備」

「取り組みやすい下位目標の設定」「課題解決のために必要な方略の指導」「成功体験を積む機会の保証」「適時に適切な指導・支援・賞賛・フィードバック」「課題の難易度の個別の調整」「協働学習態勢の推進」「間違いや不安材料への耐性の育成」「生徒が納得する評価方法」などに、できるだけ留意した指導を工夫して行うようにしたい。



VI おわりに

今年度は、コミュニケーションを維持・発展させるための学習指導について実践を行ってきた。「関心・意欲・態度」は情意面にかかわることなので、これを見とり評価するためにはいろいろな工夫が必要である。今年度手探りで実践を進めてきたが、明確で妥当なデータを元にした評価なのか、またこれを伸ばしていくための具体的な方策はどうあるべきかなど課題はまだ多い。日常の学習に意欲的に取り組ませるためには、どのような指導方法や評価方法があるのか、今年度の成果と課題をきちんとふまえて新たな課題に取り組んでいきたい。

(文責 宮 野 健)

<引用文献・参考文献>

- 1) 文部省 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—外国語編—』
- 2) 『中学校教育課程改善の手引』 北海道教育委員会 平成16年
- 3) 『中学校における学習評価の在り方に関する研究』 北海道立教育研究所・北海道教育大学 平成16年
- 4) 『北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要』 平成13年、平成14年、平成15年
- 5) 平田和人 編 『中学校英語科 絶対評価の方法と実際』 明治図書 平成15年

講

演

演 題「学ぶ意欲とスキルを育てる教育のあり方」

東京大学大学院教授

市 川 伸 一 氏

研究同人氏名

富田 幸雄 (学校長)	土谷 敬 (副校長)
三津橋 ゆかり (国語)	黒田 諭 (国語)
阿部 智子 (社会)	深見 亘 (社会)
福井 博志 (数学)	油谷 栄次 (数学)
辰巳 哲治 (理科)	松下 賢 (理科)
早瀬 真裕美 (外国語)	宮野 健 (外国語)
嶋田 歩 (音楽)	佐々木 善憲 (美術)
池田 靖秋 (保健体育)	秋山 範光 (技術・家庭)
林 潤子 (養護教諭)	高市 一男 (講・音)
高橋 健樹 (講・国)	佐藤 昌子 (講・体)
市井 茜 (講・家)	中原 和代 (講・数)
マイケル・ホップハム (ALT)	

【転出者】

尾崎 文彦 (学校長)	林 敏雄 (社会)
横井 由利子 (講・家)	

『『確かな学力』を身につけ、自己実現できる生徒の育成』
～学ぼうとする力をはぐくむための学習指導の工夫～

発 行 平成16年10月29日（金）
発行者 北海道教育大学附属函館中学校
印 刷 株式会社 長門出版社 印刷部